

一書... 尊藩に無御座候儀も難斗、左様に御座候はさし出候事も不苦奉存候。藩醫田中元勝と申もの近年征西將軍之御事蹟を考究仕、御傳を書認申候。右元勝本朝之事には博相渉り且又考證に長じ申候上、此吟味十年來之日月を懸け申候間隨分行届候様に奉存候。是又御用に被爲在候はさし出可申候。十年餘來之心事千緒萬端言上仕度候へ共一日に盡し得不申、此節は先前條心底之表白迄呈上仕候。何分奉期後鴻候。

(分部の初最) 簡書のへ湖東田藤りよ楠小

人は常に助多く、所頼は唯君上一心に御座候へ共古今一ト通りの名君位にては此道理決して明なり不申、扱々頼み寡き事に御座候。且又方今儒者號して宿儒と被稱候ものも全體利害之私心を抱き曾て義理之心肝を失ひ申候間、此等肝要之處に於ては總て俗論に落入申候は學術之不正人心之邪なるとは乍申、誠に以慨嘆之至に奉存候。雖然變易難測は天理にて御座候へば不遠、尊藩向上上一分必御開運に罷成可申、天下之志士仁人眞以奉頼日夜祈望仕候間、彌益御自愛被成度奉存候。外夷來寇之憂天下いまだ夢幻之時、尊藩既に御覺悟被成非常卓越之御先見、乍恐、義公御以來正大之御學術今日に相顯、眞以奉敬服候。近年之模様にては必然不遠及三千弋可申、有志之士は寢食を安じ不申候へ共舉世總て宴安に陷入、甚しきは外夷之事を申候へば忌諱に觸れ候て却て發狂之唱を成し候位にて、今日之情勢にても少も覺悟不仕、士氣之衰弱風俗之廢弛甚痛憤之至に奉存、何分幕下大號令を被出綱常を風勵し士氣を振興し奢侈を去り質素之御政行れ、根本底柱相立不申候へば宴安因循深痼之大病療治之道無御座、痛心此事に奉存候。私事不三相替、讀書仕候へ共元來迂癖之質に御座候へば舊日之面目改り不申慙恥之至に御座候。近年南朝之事に付て聊所存有之書認候ものも御座候へ共、いまだ脱稿に至り不申、出來之上は大

一書... 尊藩に無御座候儀も難斗、左様に御座候はさし出候事も不苦奉存候。藩醫田中元勝と申もの近年征西將軍之御事蹟を考究仕、御傳を書認申候。右元勝本朝之事には博相渉り且又考證に長じ申候上、此吟味十年來之日月を懸け申候間隨分行届候様に奉存候。是又御用に被爲在候はさし出可申候。十年餘來之心事千緒萬端言上仕度候へ共一日に盡し得不申、此節は先前條心底之表白迄呈上仕候。何分奉期後鴻候。

(分部の後最) 上 同 (藏博友野長)

一書... 尊藩に無御座候儀も難斗、左様に御座候はさし出候事も不苦奉存候。藩醫田中元勝と申もの近年征西將軍之御事蹟を考究仕、御傳を書認申候。右元勝本朝之事には博相渉り且又考證に長じ申候上、此吟味十年來之日月を懸け申候間隨分行届候様に奉存候。是又御用に被爲在候はさし出可申候。十年餘來之心事千緒萬端言上仕度候へ共一日に盡し得不申、此節は先前條心底之表白迄呈上仕候。何分奉期後鴻候。

方之君子に此正を相願申心願に御座候。此許阿蘇大宮司大分古文書御座候。自然はいまだ盡は、尊藩に無御座候儀も難斗、左様に御座候はさし出候事も不苦奉存候。藩醫田中元勝と申もの近年征西將軍之御事蹟を考究仕、御傳を書認申候。右元勝本朝之事には博相渉り且又考證に長じ申候上、此吟味十年來之日月を懸け申候間隨分行届候様に奉存候。是又御用に被爲在候はさし出可申候。十年餘來之心事千緒萬端言上仕度候へ共一日に盡し得不申、此節は先前條心底之表白迄呈上仕候。何分奉期後鴻候。

一書... 尊藩に無御座候儀も難斗、左様に御座候はさし出候事も不苦奉存候。藩醫田中元勝と申もの近年征西將軍之御事蹟を考究仕、御傳を書認申候。右元勝本朝之事には博相渉り且又考證に長じ申候上、此吟味十年來之日月を懸け申候間隨分行届候様に奉存候。是又御用に被爲在候はさし出可申候。十年餘來之心事千緒萬端言上仕度候へ共一日に盡し得不申、此節は先前條心底之表白迄呈上仕候。何分奉期後鴻候。

頓首拜。

六月十九日認

横井平四郎

時存(花押)

藤田虎之介様

再白、時下彌益御自愛奉_レ伏希_レ候。薩藩之内亂は最早御承知に相成申たると奉_レ存候へ共、承り候處大略言上仕候。

薩州當君之御初政より調所笑左衛門と申者下賤より登用、琉球之交易を管權いたし、薩藩之交易は勿論公許に候へ共、内實は琉球にて諸夷人之交易甚敷、是に因て弊數利益を得申候由。御側女中大奥と稱し候ものと深密相結内外表裏仕、御左右は申に不_レ及要路之職

事總て其子弟黨類にて相堅め、一切有志之士を斥去、是又山縣之擅權以來三十年餘に相成申候。然處當名を付候由。擅權以來三十年餘に相成申候。然處當

世子久敷此奸邪を御合點候へ共一切御力を被_レ出候事出來不_レ申、空敷被_レ押移_レ候内、此十年前之事

にて世子御子御三方極々あやしき病にて引續き御死去に相成候間牀下御吟味之處、矢の根様のも

の様々出申候間、調伏之怪事相違無_レ御座、有志之士甚以御氣遣仕候へ共奸黨之防禦甚以嚴重に有_レ

之、一切申破之手段無_レ御座、空敷隱忍いたし居候内、世子を廢し前條大奥女中が腹に被_レ爲_レ出來_レ

候庶公子を立候奸謀相顯候間於_レ是相決し、御家老某左衛門は去年島津侵襲と云ふ事か死去仕候。其いまだ不明。何某より言上仕候處、奸黨

之者共早其色を曉り嚴敷奸謀之跡を消し候のみならず、此奸謀は却て申出候御家老之黨類に出候

取可_レ被_レ下候。以上。

(長野友博藏)

段黑白を齧し誣告仕り、右御家老を何之吟味も無_レ之直に切腹被_レ仰付、其黨十九人死罰四十餘人遠

島此遠島は異例にして、依_レ之有志之士數十人出亡仕今以絶へ不_レ申、國中心なき町人百姓も黑白明白に合點決して生路無_レ之由。依_レ之有志之士數十人出亡仕今以絶へ不_レ申、國中心なき町人百姓も黑白明白に合點

仕候へ共少にても口外仕候へば直に誅戮に逢候由にて、一國聲を吞目_レ見合誠に以慘怛之極と承

申候。甚哉小人之國を禍する、痛心嘆憤無_レ限至に御座候。實に累卵之勢にて有_レ之、一日も早 公裁

御判決に相成不_レ申候へば大切之様體と奉_レ存候。乍_レ然此一件は薩國嚴敷隱密仕候間、筋々には一

切様子相分不_レ申、風説傳聞彼是承り候處前條之次第に御座候。勿論間違も可_レ有_レ御座、一説に御聞

取可_レ被_レ下候。以上。

(長野友博藏)

右書簡は横巻に仕立てられてあるが、其の跋文は昭和三年八月廿七夕大森山王艸堂に於て後學菅原正敬と署して徳富蘇峰によつて書かれてある。其の文の前半には小楠が東湖と親交のあつたことが記され、後半には此の書狀の原委が左の如く誌されてある。

先生の東湖に與へたる書信は、二通藤田家に存せり(今は後藤仙太郎氏に歸す)。其一是嘉永四年二月十五日附にて、先生諸國漫遊上途前三日なり。其二是嘉永六年八月十五日附にて、宛も彼理浦賀灣關入の報に接したる際なり。此の兩書翰は、何れも史料として重要なれども、それよりも先生の至誠君國に報ずる眞骨頭の最も遺憾なく發揮せられたるは、本書翰に若くはなし。

本書翰は藤田家現存の書翰と對照して、正しく嘉永三年六月たることを明にするを得たり。蓋し本書翰は先生が江戸遊學歸郷以來、間もなく水戸君臣遭厄となり、其爲め音信打絶えたりしが最近漸く其冤解け、藤田氏等も外間との交通に付幾分の自由を得たることを、久留米村上守太郎氏より先生の親友萩昌國に由りて傳承し、直に此書を村上氏に托して、東湖に寄せたるものか

るが如し。乃ち先生の東湖に與へたる嘉永四年二月十五日附の書翰中に

御歸郷後他所御取遣も不_レ苦様子承り申候間村上に相頼一封さし出申候處、無_レ據變事出來心事達し不_レ申別て遺憾千萬に奉_レ

横井小楠遺稿

一四七

存候

とあるを見て知る可し。蓋し村上氏は捨身刺殺の擧に出でたれば、固より小楠先生の本書翰を東湖に寄送するの餘裕あらざりし也。而して本書翰頼ひに天地の間に存し、友人長野友博君の挿架に歸す、眞に是れ神呵鬼護と云ふも過言にあらず。予長野君を徳應し、本書翰を複製し、之を同志の士に頒たんことを以てす、君慨然として之を諾し、更に予に囑して本書翰の原委を誌せしむ。義辭す可からず、乃ち考證の一斑を録して之に應ず。若夫れ小楠先生の學術の光明正大にして、其の規模の宏恢なる、其の氣象の爽快なる、特に勤王の精忠大節に至りては、赫々として本書翰の上に灼燦たり、復た奚ぞ予の喁々を竝て、而して後之を知らんや。

嘉永四年

一三 藤田東湖へ

嘉永四年二月十五日

小楠在熊本
藤田在水戸

一書拜呈仕候。時下愈御安全に被_レ成_二御座、珍重之御義に奉_レ祝候。先以往年於_二江戸_一屢奉_レ接_二鳳容御懇情被_レ成下、不_レ淺忝き仕合に奉_レ存候。以來歸郷仕、片紙も拜呈不_レ仕誠に申譯無_二御座、御無禮に押移御海容奉_レ希候。然者 尊藩御盛運之時節御新政赫々海隅邊地まで相響、列國廢衰實に憤興之勢にて竊に天下興運之時運と奉_レ存月日に刮目罷在候處、不_レ圖大變に相成、天下志士之腸爲_レ之百斷仕、徒に天地神明を呼、悲痛感歎之外更に他事無_二御座_一候。然る處無_レ程大冤表白御安全に被_レ成_二御歸郷、眞以重々至悦之御事にて爲_二天下蒼生_一奉_レ賀悦_一候。抑黨禍之事史冊上歴々照々と明鑑有_レ之而已ならず、歐陽永叔・

朱子之諸公於_レ此は別て心肝を碎き痛論辨白に相成、聊以疑惑之筋無_二御座_一道理に候へ共古今天下之禍必此朋黨之二字に有_レ之、尤以當今天下列藩之大病根にて、君子之正氣日々消小人之邪氣日々長、異日之患不_レ可_レ言に相成候は必然之勢に奉_レ存候。就ては無事を好み風波を恐る上下之情如_レ此に候へば、君子之大道決して行れ申問敷痛心大息何堪々々。久留米村上守太郎一件眞に悲痛之至に奉_レ存候。捨_レ身刺_レ姦、或は過たりといへ共必竟是赤心報國可_レ敬可_レ仰、爲_二同藩_一もの其志を繼是非共君之非心を正し先公之御遺志を奉_レ達べき事に候處、國論顛倒大抵村上を非斥致し、甚しきは喪心人之様に唱候由に承り申候。扱々無_二是非_一次第ながら憤怒に堪不_レ申、小生は村上知音にては無_二御座_一候へ共其人物追々承り去年書狀遣し通問仕、且御歸郷後他處御取遣も不_レ苦御様子承り申候間村上に相頼一封差出申候處、無_レ程變事出來心事達不_レ申別て感歎千萬に奉_レ存候。志士一人之喪亡は實に天下之義鋒かげ候様之心地仕可_レ惜之至に御座候。同藩宮部鼎藏列今度遊歴として罷出、尊藩之御事は別て迂生嚮慕仕、此節主として拜趨仕候間乍_レ憚萬端御教示被_二成下_一候様奉_レ頼候。右鼎藏は兵學を主と仕候間其筋之事別て拜聞仕度心願に御座候。小生身上萬端是より御承知可_レ被_二成下_一候。心事海山拜呈仕度事御座候得共先右之次第迄申上候。是よりは追々書狀差出萬端相同度奉_レ存候間、乍_二御面働_一其心得被_二成下_一度奉_レ願候。頓首拜。

二月十五日

横井平四郎

時存(花押)

藤田虎之助様

尚々近況如何被_レ成_二御座_一候哉、乍_レ憚爲_二天下_一御自愛被_二成下_一度奉_レ存候。小生事當月十八日より國許發程上方迄罷越、往來諸所遊歷仕筈に御座候。此節は江戸にも罷出 尊藩に拜趨自來之心情相述 御安否奉_レ伺度御座候へ共、其義出來不_レ申甚以遺憾千萬に奉_レ存候。尾・紀・越前・加賀・因州・藝州・長州等之國には打廻り申候筈に付歸郷後は見聞録差出可_レ申、何も奉_レ期_二後雁_一候。以上。

(小楠遺稿)

右書面は上記蘇峰の跋文にある如く小楠上國遊歷上途前三日に認めたもので、宮部鼎藏は肥後藩の軍學家にして肥後勤王黨の領袖だ。小楠と宮部とは小楠が開國論を唱ふるに至りて(安政二年)交際疎隔したが、當時は親交があつた。

一四 兄左平太・嫂清子へ

嘉永四年二月二十八日

小楠在久留米 兄・嫂在熊本

上國遊歷の途中よりの家信。

口 上

久留米より一書申上候。奉_レ始_二御母様益御機嫌能被_レ遊_二御座_一、恐悦之御事に奉_レ存候。私も何之申分も無_二御座_一候。十九日に柳川に着、廿三日迄到留仕、不_レ怪地走に逢ひ申候。夫より久留米に參り今朝太宰府之様に參り申候。久留米にても同様所々方々案内を受け、中々應對に窮困仕程に御座候。何ぞ申上

候儀無_二御座_一候。田邊列歸に付此段拜呈申上候。い才は田邊より直に御聞可_レ被_レ成奉_レ存候。尙此後之事は便利御座候はゞ可_二申上_一候。以上。

二月廿八日

横井平四郎

左平太様
御清様

(横井時靖藏)

一五 長岡監物へ

嘉永四年五月六日

小楠在京都 長岡在熊本

上國遊歷間京都滞在中に寄せたもの。

一書奉_二拜啓_一候。時下愈益御安泰に被_レ爲_二成_二御座_一、恐悦之御事に奉_レ存候。隨て私儀去月廿二日に京都に到着仕、同行何も申分無_二御座_一、壯健に罷在申候間乍_レ憚 尊慮安被_二思召_一可_レ被_レ下候。先以當節は經歷之所是迄十一藩にて、十分咄合出來候所も有_レ之又は出來不_レ申所も御座候て一なり不_レ申候へ共、國風民俗一ト通りは相知則別紙に認め差出申候、勿論委細は早々にて認め盡し不_レ申、誠に大略にて御座候間左様被_二思召_一可_レ被_レ下候。何分罷歸候上奉_レ拜_二尊顔_一候上可_二申上_一候。熊本にて考居申候に全躰は相替不_レ申候へ共諸藩節儉并知行手取之二つは存外にて、是は奉_レ始_二尊所様_一恐は御信被_レ爲_二成間敷

と一笑仕候。

一 中國筋長防・三備・藝州別て風・水之二害を被り困窮甚敷飢民道路に連續仕候。右は大抵京・大坂を指參り申候間二都別て夥敷、既に大坂にて去月初御城代御手許に達出候餓死二百餘人と申事にて、其實は五倍も御座候由、私共も大坂にて現在死になんくたるを見申候て甚以惻怛仕候。大坂は今以御救恤無之、京都是去冬霜月より御救恤有之候。此起りは例の道話社中より打立今以此社中主として取り計ひ余程其仕法も宜敷嚴重に被行申候。道話社中と申は實無之末頃か京師にて石田勘平と申人、元は程朱學にて専主として愚俗を論じ其人一切金錢等賣り不申甚感俗に被信申候。此流儀にて今以京師に社中有之、其流儀國々に及中々盛成事に御座候。京師にて豪宗不此社中に入申候得ば直様人物も宜敷相成申候位にて、第一に被。初發官府より米五百石に銀貳拾五貫目御出し方に相成候。御座候事に當町御奉行打も御意向にて節々謹難御聞にて御座候。

間道話社中京師中之豪商相誘都合壹萬兩餘之金相集り、三ヶ所に施行所を設公平に取計施行仕候間大抵京師中には餓死無之候。此許學者多分に御座候へ共左様成る事には夢更氣付不申、却て道話者に實行相讓候と一笑仕候。

一 北國は去年は平年よりも米出來方宜敷御座候へ共何方も殊之外鎖國仕り、大坂廻米例年よりは三分之一位と申事にて御座候。其故米拂底に相成大坂にて町御奉行より令書被出米根段引下げ被仰付、且豪家之者共過分買入候儀堅く御停止に相成申候に付根段は引下げ候へ共、現實之米拂底故小うりは不_二相替_一高直に御座候。大抵白米壹升に付百七拾文程に御座候。京師は根段下げ無之に因て却て所々より米も出申候由、何分麥作不熟にも相成申候へば大凶に相成可_レ申、甚以恐敷奉_レ存候。大坂一日に御米千俵づよりにて御座候、是にて拂

高御座候可_レ被_レ成候。

一 天下人才は誠に大拂底にて、是迄敬服仕候程之人一人にも出會不_レ仕、學意は勿論申に不_レ及正學にても何學にても一向に無_二御座_一候。責て指を屈候へば柳川に池邊藤左衛門、徳山に井上彌太郎、藝州に吉村重助、京師に春日讚岐守、大坂に大久保要、此五人にて御座候。就中讚岐守は余程才力明敏なる人物にて深相交り咄合仕候。大久保は去年君侯大坂御城代被_レ蒙_レ仰、公用人にて御供仕相詰居申候。此人温然たる人物にて才識も有_レ之中々底強き氣象にて可_レ愛人物に御座候。學問はさして深は相見不_レ申、例の水戸學にて大道は甚以明白に御座候。水府之咄様々御座候へ共是はとて筆上には盡得不_レ申、且相憚候事も御座候間態と拜呈不_レ仕、何に歸郷之節御土産に相貯置申候間左様に被_二思召_一可_レ被_レ下候。藤田虎之助著述常陸帯は未だ荻手許にも有_二御座_一間敷此節寫し歸申筈に御座候。是は溪山様御一生之御事を認め候ものにて十分之丁冊にて藤田心底溪山様御心底を明し候赤心にて御座候。

一 楠公肖像備前之内何郡何村兒島高德子孫今以血脈相傳いたし罷在候。此家に舊物様々有_レ之候内楠公并高德之肖像御座候。溪山様久しく御聞に相達居候處土浦侯大坂御城代被_レ蒙_レ仰候間土浦侯に被_二仰聞_一、要に世話いたし差出候様御頼に相成申候間、大久保様々心配仕漸寫取り溪山様に差出申候筈にて、別に寫方出來仕候間見せ申候。右寫取り候本圖左一右衛門所望仕此節差上申候。是は中々得難きものにて此節遊中之珍物と奉_レ存候。依_レ之何卒絹地に御寫方被_二仰付_一、私并左一右衛門に一幅づ、拜領奉_レ願

候。今より奉願候事餘りなる儀と御一笑可被爲成候。此にても又一笑仕候。兒鳥像は追て要寫させ候て遣し申候筈に及三約束置申候。

一 菊池正觀公像之事要に咄申候處殊之外大慶仕、何卒溪山様にさし出候様噂仕候間歸郷之上寫取り差出可申と咄合置申候。何に此かはりには溪山様御手跡自然は拜領仕儀も可有御座候。千里遊歷山野拔涉大抵苦勞のみに御座候中此一事は誠に大樂に奉存候。

言上仕度事は山海御座候へ共何分筆上盡得不申、先あらゝ迄奉呈候。五月十日頃は此許發足之積にて何に越前より尙可申上候。頓首拜。

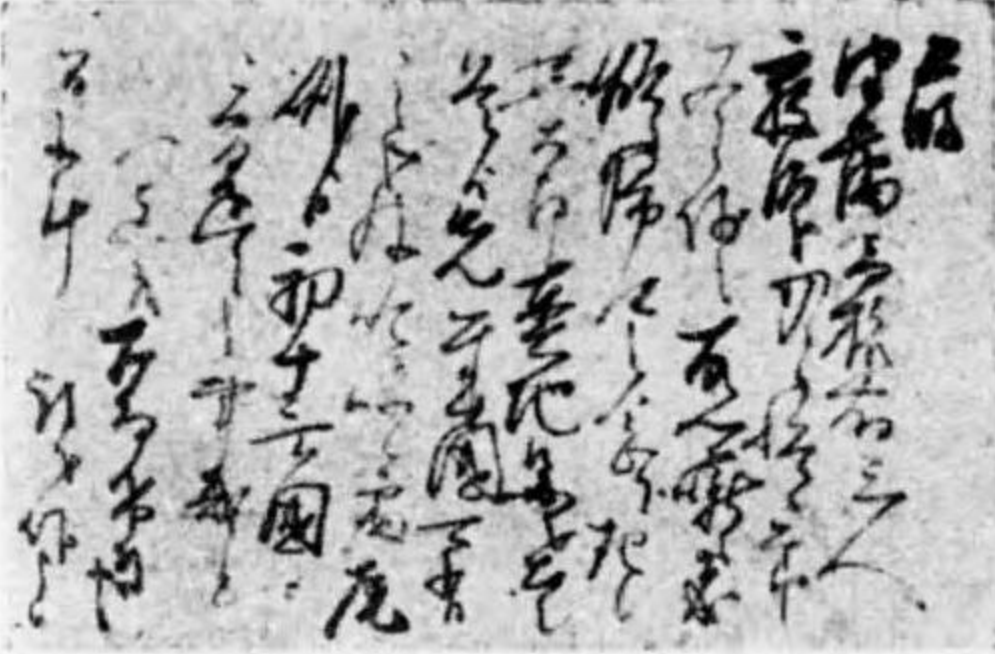
五月六日認

横井平四郎

時存(花押)

監物様

御左右



尚々乍憚御自愛被爲成度奉存候。最早次第に暑に向申候間私共も愈以慎戒を加へ養生仕候。勿論海乗りは堅禁制仕候。將又御示教之酒は大禁制仕、何方にても聊にても醉申様には給不申、三杯に相限斷申候。彼是御安心可被下候。家郷初所々に數十通之狀仕出申候間新

堀・都築・荻に別に認め不申、乍憚其旨御致聞被爲成、別紙聞取書御遣し被下候様奉願候。此段拜呈仕候。已上。

(荻昌道藏)

右文中「國風民俗一ト通りは相知別紙に認め差出申候」とあるは後記「遊歷聞見書」のことであらう。

一六 城野靜軒へ

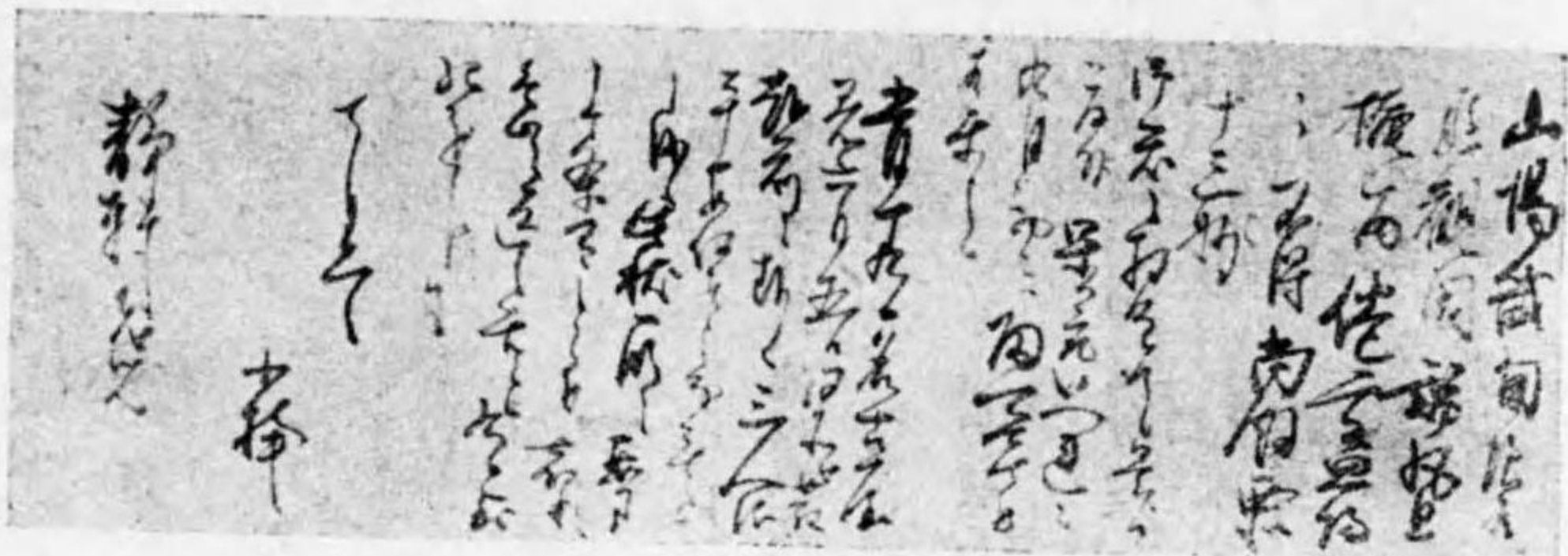
嘉永四年七月二日 小楠在金澤 城野在熊本

城野は肥後の人、名は充通、通稱彌三次、靜軒と號す。文學に秀で最も書を能くし、武技ことに劍術・居合にも優れてゐた。留守居小姓頭に擢んでられ、小楠より八歳の年長であるが親交があつた。此の書は小楠嘉永四年の上國漫遊間伊勢の津の宿にての出來事等を金澤から報じたもの。

上略 津藩にて旅宿三人寢酒を少々給候節又々例の故郷嚙に相成、頻に歸心之念を起し候。熊太郎輿地圖を出し是より先幾國可有之哉及三吟味候處、尾州より初十三ヶ國に候て遙々之事哉といつ迄も打なげき申候

間不斗詩を作申候。

山陽畿甸浪爲遊。觀國訪風且掩留。倦客思歸歸不得。尙餘西北十三州。



小楠よ城野靜軒への簡書 (藏福美光徳)

御笑に拜呈仕候。是よりは存外果か取、いづれに九月初には歸郷可仕と相樂申候。五月十九日名古屋着、六月五日同所を發、越前に赴候。三人儀平安何ぞ申分無之候。申越候此狀一段之要事之箇條有之に付、宿本へ急々返候筈に候。右迄書狀進申候。以上。

七月二日

小楠

靜軒老兄

(徳光美福藏)

一七 吉田悌藏へ

嘉永四年七月十四日

小楠・吉田
在福井

悌藏名は篤、號は東篁、越前近世の名儒。藩學教授兼侍讀で藩政の顧問にも備はつた。愛國の念頗る厚く、嘉永六年米糧來航以來は慨然國を出で國事に盡瘁した。彼の門下には鈴木主税・橋本左内等の逸足が多い。此の書は小楠福井滞在中吉田の世話にて稻葉家別荘含翠亭に居を移した時のもの。

昨日は萬端御配意被成下、殊に毎々御來臨被成下、不淺忝々拜謝難申上奉存候。御庇にて大にあり付、快然之氣色に罷成り申候。扱被仰聞置候書二枚認さし上申候。右語にて宜敷御座候哉、思召も御座候は書き替へ可申奉伺候。此段拜呈、餘は奉期拜鳳候。頓首。

七月十四日

横存拜

吉田先生

(吉田てる藏)

一八 吉田悌藏へ

嘉永四年十月朔日

小楠在熊本
吉田在福井

(前缺)履歷にして、拙藩中眞儒と稱するは退野・平野兩人にて御座候。い才は此書御覽被成候へば相分申候。

一 拙藩一体無事、相替り申儀無御座候。此節罷歸り承り候處、例の黨禁も存外相寛みの勢にて一向に波立不申、大に安心仕候。因て御相談仕置候諸子御遣に相成候儀少も故障無御座候、左様御承知可被下候。

尊藩盛大之筋監物列に委細に咄申候。最早歸郷後七八度の出會毎に其儀に及、甚以大慶仕候事に御座候。誠に當世之勢此道之衰廢無限、平生監物慨嘆いたし罷在候處、尊藩如^(及はずながらの意)此御盛運之儀拜承仕候ては、ならずながら一臂の力にても御助力仕度と眞以躍喜仕候。御高作は誠に存外にて甚大慶に奉存候。和歌も嗜候間何に不遠さし出可申候、此節は御斷仕候。私より吳々宜敷得貴意、吳候様申聞候。其外荻角兵衛より同様宜敷御傳言仕吳候様申出候。此段拜呈仕候。以上。

十月朔日

横井

吉 田 様

(吉田てる藏)

一九 岡田準介外二名へ

嘉永四年十月一日

小楠在熊本
岡田等在福井

岡田は吉田佛藏の弟で、福井藩家老稻葉正博の家臣。學識もあり氣概にも富む。

(前略)各様彌御平安御精業可_レ被_レ成、爲_二此道_一拜賀仕候。然ば先頃は不_レ斗罷出、數旬萬端御配意被_二成_一下、別て御別業に御引移被_二成下_一、何角御丁寧之御事共山海拜謝難_二申盡_一、千萬忝奉_レ存候。就ては日々御討論御深志之御事深感激仕候。拜別以來餘り残暑に堪不_レ申、敦賀より直に大坂に至り同地出船、周防三田尻と申處に至り、夫より萩に參り、八月二十一日に何之申分も無_二御座_一歸郷仕候、御安心可_レ被_レ下候。萩表之事は吉田様迄い才拜呈仕候間略仕候。御別後は定て萬端御咄合御座候_(四・五字蟲喰不明)。後尤彼是學事相考申候内、野村君_(淵源)合_(五・六字蟲喰)乍_(三・四字蟲喰)憚些掛念仕候。爾來は御會悟被_レ成_(三・四字蟲喰)。即義理に候文義にて二_(二字蟲喰)無_二御座_一書物迄にて文_(二字蟲喰)解_(三・四字蟲喰)せんとする_(一・二字蟲喰)。成_(一・二字蟲喰)る間違にて真に俗儒_(一・二字蟲喰)に落入申候。書物の文義は直に事實の上にて會_(三・四字蟲喰)し候_(一・二字蟲喰)。即義理にて御座候。所詮之處書物は日用事實之義理を説候もの故、日用事實之上に_(一・二字蟲喰)其義_(一・二字蟲喰)相分申候。日用事實之上にて其義理を辨明いたさずして書

物上にて合點せんとするは、譬ば碁を打ものが現在之碁はうち不_レ申して碁經に就て合點せんと欲するが如し。如何に定石を覺たる様なれ共現在之碁をうてばまつ黒にして少も分らず、是所謂世の文義者なり。誠の碁を志すものは我が知りたる丈にて四ツ目殺しより先現在之碁を必死とうち、扱夫より碁經を見て其碁經の手は現在うつ所の活所にて合點する故碁經之意味甚面白、是即眞文義なり。此合點の意味と碁經の上迄にて定石を知り覺たる意味は死活雲泥之相違なり。是即世俗之文義は眞文義にて無_レ之處分明に相見申候。是にて推せば醫者の治療之上にて醫書を會せず、醫書にて其理を知らんと欲するは甚以無理事にて終に醫書は少も分り不_レ申候。武藝も又此道理なり。天下何事か此道理に非ざるべき、如何々々。

十月朔日

尙々此許同志不_二相替_一罷在候。今般御配意被_二成下_一常陸帶千萬忝奉_レ存候、御禮難_二申盡_一奉_レ存候。
御約束之程易_(程易夜話・同雅話、大塚退野高等平野深淵の著)二話は吉田様迄指上置候間御轉覽可_レ被_レ下候。

右書簡は寫本にて横井家文書中にありしものより採録したが、蟲喰の場所の多いのと文中にある吉田佛藏への書簡(その終りの方は一五七頁に掲げてある)の全部を見るを得ないのとは遺憾だ。岡田外二名とは何人であるか詳でないが、恐らくは稻葉家の家臣で野村淵藏と坂部簡助とであらう。

二〇 立花壹岐へ

嘉永四年十二月五日

小楠在熊本
立花在柳河

壹岐は柳河藩家老、諱は親雄、胖亭後嗣と號す。同藩家老十時攝津の弟にて立花家に入つた者。小楠の門人と云つてもよい關係で、小楠の越藩招聘には少からず骨折つた。藩政ことに兵制の改革に功勞あり、國事にも盡瘁した。

十一月二十二日之尊書忝々拜見仕候。向寒之時節愈御安泰に被_レ成_レ御座、珍重之御儀に奉_レ存候。先以八月には罷出不_レ一方_レ御配慮被_レ成下、厚忝々御禮之申上様無_レ御座_レ候。早速書狀さし上奉謝可_レ仕筈之處何角押移失禮、御海恕奉_レ願候。右罷出候に付ては縷々被_レ仰下_レ候趣、御厚情之至り總て汗顔之仕合恐入奉_レ存候。

爾來御同社彌益御精業御盛之由、聊此道に志し候もの甚以人意を強し大慶此事に奉_レ存候。扱當冬御來臨も被_レ成下_レべき段略御約束にて奉_レ待入_レ候處、御さし支にて來春に被_レ差延_レ候段細々縷々御申越之次第、是又重々御多念之御事に奉_レ存候。私事も正月は閑暇に御座候間、御約束仕候通國界まで出獵仕候間極々忍にて何方にてぞ御出會可_レ仕奉_レ存候。尤南關に參り申候は、野町御別莊に罷出可_レ申候へ共、此節は高瀬の方角荒尾と申所に參り申筈にて 尊藩には三池通りの道にて御座候。右三池通りにて御城下より一二里隔り候處に可_レ然御別莊か何か可_レ有_レ御座_レ候。御家來まで門人より場所柄之事は相談に及置申候間御家來より御承知可_レ被_レ成候。乍_レ然故障等さし起罷出出來不_レ申儀も難_レ斗、御堅約は御

斷致候。拙子事一兩日散々腹痛相煩打臥罷在、丁度之折柄にて何分此節委細之御返事認候事出來不_レ申候。何分今一兩日迄は快相成申間敷、左候へば必_レ多物御家來へ懸留置候て甚以心痛千萬に奉_レ存候間、御別紙委細之御報答は此節御斷仕、不_レ遠奉_レ接_レ拜鳳_レ之上々御咄合可_レ仕と奉_レ存候。吳々も失禮千萬に奉_レ存候得共何分任_レ心底不_レ申候。既に此御返事も臥ながら相認申候位にて、失禮御海恕奉_レ希候。他諸君への御返事も同様にて乍_レ憚宜敷御斷被_レ仰入_レ可_レ被_レ下候。何分拜話之節は山海無量に御座候へ共此節は如何にも御斷仕候。尤腹痛格別之事にては無_レ御座、今四五日も經申候は、快罷成可_レ申、御懸念は被_レ下間敷奉_レ存候。此段迄拜復申上縮候。頓首拜。

十二月五日

横井平四郎

立花壹岐様

尙々次第に寒に相成時節隨分御自愛可_レ被_レ成奉_レ存候。拙子歸郷後同社中も不_レ相替_レ學事怠り不_レ申、別て監物壯に罷在り毎々御噂仕候。何卒來春は御出途被_レ下候は、寛々御咄合可_レ仕と相樂罷在申候。御國製之美酒御贈り被_レ成下、千萬忝々奉_レ存候。隨て千破屋城跡之竹にて造へ申候筆二對並同城跡石一ッさし上申候。右は遊歴之節罷越持歸り申候ものにて御座候。一小石一筆管可_レ以想見楠公忠誠神武、櫻_レ孤城_レ挫_レ百萬之賊鋒_レ振_レ起天下義士之氣、則是又非_レ修_レ養靈池_レ者_レ耶。如何々々。

御上書御遣被_レ下、就て縷々被_レ仰下_一候趣御厚志之至に奉_レ存候。本文申上候通之腹痛にていまだ拜見出來不_レ申候。何も少快罷成候は_レ得斗拜見可_レ仕候。來陽に至り返納可_レ仕、左様御承知可_レ被_レ下候。刑官御取起に付て被_レ仰下_一之次第重々御最千萬御同意に奉_レ存候。□□無_レ之候へば先政事は無きもの同様に、賞罰の亂何よりもかよりも大切千萬に奉_レ存候。就ては愚意申出候様被_レ仰下_一、是は得斗勘考仕り、且此許刑局之次第等能々及_レ吟味_一候て何も來春拜呈可_レ仕、左様御承知被_レ成置_一可_レ候。此段迄此節拜復仕り、餘は來春に可_レ申上_一、臥ながら相認申候間文字見にく、可_レ有_レ御座_一候、御用捨奉_レ願候。何も來春に附與仕候。頓首拜。

十二月五日

立花 壹岐 様

横井 平 四郎

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

嘉永五年

二一 岡田 準介 へ

嘉永五年正月十五日

小楠在熊本
岡田在福井

(前略) 尊藩御同志彌以御修勵之義日新長進之功御正大之御様子、千里外大慶此事に奉_レ存候。此許同社中少しづ、盛に相成方にて、一兩人は大分進歩之模様に見え大慶仕候。乍_レ然全體流俗甚下劣に御座候間寸斗功効は相立不_レ申候。是今日之痛心なり、御推察可_レ被_レ下候。東篁先生に指上申たる程易二話は追々御一覽と奉_レ存候。拙藩之人ながら此道理格別に會得いたし候様に相見、深く感心仕候。學者くさき事は一向に無_レ御座_一候。流石に人傑に御座候。外に少しづ、著書御座候、是は追々差上可_レ申候。

一 聖人生知安行之御講論被_レ仰下_一、どうか御同意に奉_レ存候。御説に付き愚意を可_レ申述_一候。聖人之生知安行は天授と申は凡の人は困しんで知り困しんで得るを聖人は困まずして知り困まずして行ひ玉ふ此困まざる所が勉強の入らざる地にて、其工夫は只敬の一字なり。聖人の學力□□外_一に有_レ之と申は見所聞く所一として我が學に非ざるは無し。孺子之歌滄浪之水之如く山か川にひゞきの所則聖人之格別にて有_レ之、且至善は終に極り無き所に候へば聖人之御心にては彌以御不足の所が聖人之學力之出候所と奉_レ存候。如何々々。

凡學者心に不足なき故進歩之道無_レ之、是至善之目當無き故なり。至善之目當あれば一步進めば又一步又一步、此一步の進みは限り無_レ御座_一候。去れば進むに隨て不足之心彌益盛に相成申候。終に聖人となり候ても不_レ相替_一不足之心にて御座候。是至善を極と見ては不_レ相成_一、限り無きが至善と申は此事に御座候。如何、思召に相叶候哉。尙拜聞仕度奉_レ存候。

其他種々拜話之所御座候得共、何事も東篁先生に拜呈仕候間御轉覽可被下候。

正月十五日

尙々未だ餘寒盛にて、隨分御厭被成度奉存候。拙生も不替壯健に罷在り、御懸念被下間敷候也。彦藩之事い才東篁先生より被仰遣、甚以大慶之至に奉存候。此上彌以御力を被盡同心同腹に相成申度、此藩實に興起候へば天下の中興憂に不足と奉存候、吳々奉祈候。

(横井時靖藏寫本)

二三 吉田悌藏へ 嘉永五年正月十五日

小楠在熊本
吉田在福井

密 啓

水府一條被仰下、去四月以來之光景初て承り千萬忝奉存候。如何に相成申たる哉と朝暮案勞いたし罷在候處、此御一報にて先々積氣下り申候。思召通り彌以寛々と仕候儀重々可然、何れ當春中には御登營も相濟、且兩奸跡役も出來可申、尙御様子分り次第被仰聞可被下候。

尊藩江戸表彌以御宜敷方と奉存候。鈴木君は御再勤は如何、何分色々思を勞申候。拙藩事體何ぞ相替申儀は無御座候。先書得貴意候通り黨禁は何と無く少しく寛ぎ候様に相見申候。然し朋黨之士被用候事は中々程遠有之、心痛之事のみに御座候。同社講學は彌以盛に有之、是は甚大慶仕候。何分水府同

様之事體にて彌以寛々心得候儀第一と奉存候。監物家中是迄寸斗齊ひ不申、其には色々譯有之心外に存じ罷在候處、去冬不斗したる事御座候て殊之外動き立、夫より手を入申候處家中末々家内之者迄甚以感動仕、初て監物所存家中一統に及申候。既家司奉行等之重役共六十餘にも相成候者老年を忘れ學事に取り懸申候。是一事は小生共も甚大慶之事にて、序に拜呈仕候。監物よりも吳々宜敷御致聞仕候様申聞候。荻角兵衛近年旅行打立罷在候處當年は彌決定仕、三月末より出懸申筈に御座候。左候へば尊藩には勿論罷出御難題に相成申候心得に御座候、此段も拜呈仕置候。以上。

正月十五日

横 井

吉 田 様

(吉田てる藏)

二三 坂本格・井上司馬太郎へ 嘉永五年正月十五日

小楠在熊本
坂本・井上在岩國

小楠上國漫遊の際岩國に到り藩學養老館の督學玉乃小太郎の案内にて同學を視察したので、漫遊より歸りたる翌年、當時同學教授にて親しく交遊したりし坂本・井上兩人に寄せたもの。

一書拜呈仕候。新春之御賀目出度申納候。各様愈御安康に被成御座、珍重之御儀に奉存候。先以去春は不斗罷上り、萬端御難題に罷成、不淺忝々奉存候。奉別以來中國筋列藩所々到留、大坂に出紀州に

横井小楠遺稿

參り大和・河内より京師に出、夫より勢州津・桑名・尾張・彦根・福井・金澤に參り、夫より引返し大坂に出
 乘船にて(編者註、以下、次の文字との間には變行かの缺文あるもの、如く、紙を切りて貼合はせあり、この例、下文にも、所々に少からず、其の他、少きは一・二字より多きは五・六字も脱減して全く字形を存せざる所も頗る多い。)抵廿一藩にわたり國々風俗士
 氣之相替り且は政治之盛衰人物之有無誠に様々にて一々言上出來不_レ申候。就中當時甚盛大なるは福井
 にしく所無_二御座_一候。御政事向は、いまだ夫々御手付き不_レ申候へ共、全體士氣之(編者註、以下文字全く分らず、その字數等も想像つき難ぬる。)君公
(一・二字脱減)□□よ程之賢明にて當時之所は君臣上下共に此學事に必死に志し修行最中にて、よ程可_レ然人物も出來
 いたし、何れ五七年も經候へば君臣共に丈夫に御成り可_レ被_レ成、□□□にて政事にも御乗出し被_レ成候
 へば極て一ト通之事にては有_二御座_一間敷、全體學術之本意專程朱を宗とし綱常彝倫より政事に推し及
 候、所_レ謂修_レ己治_レ人之所に有_レ之候へば一藩之人士少年輩といへ共徒に書物を讀候心□□□御座候。實
(三・四字脱減)に一身□□□懸け工夫を用候志にて御座候。まして詩文等之事□□□おかしく存、一切度外にさし置申
(一・二字脱減)候。四年前□□藩より私塾に參り□□□もの有_レ之、兼て因□□□□□問三十日斗到留(編者註、以下河程の缺、文あるか想像つかず。)御憐
(一・二字脱減)候。(編者註、以下、行消滅)之取り様で□□□、流氓等一人も無_二御座_一様□□□兼候御心を被_レ盡候間乞食體之流氓一切無_レ
 之、是にて御察可_レ被_レ下候。彦根藩當侯よ程賢明にて不_レ遠天下に相聞可_レ申、紀州・尾張杯は誠に弊政之
 極にて御座候。尤尾張は本身之□□□一輩人傑有_レ之、出會いたし咄申候處よ程志有_レ之、聊三藩之尊をさ
 しはさみ不_レ申、且其□□□大身に□□□候へ共少も其等に心を取られ不_レ申候。中々道を求候之心親切に相見
(編者註、以下の缺、文字數等不明)へ

聖像之御寫被_二贈下_一御多情之至り、誠に以不_レ淺忝仕合に奉_レ存候。御庇にて不思議成る御像拜戴仕、終
 身之大慶此事に奉_レ存候。何分御禮之申上様無_二御座_一忝々奉_レ謝候。且 元春公御父子様御遺事□□□(二・四字脱減)
 是亦御多念之御事共に候て不_レ淺忝々奉_レ存候。
 一 玉名先生(乃カ)初彌以御壯健にて可_レ有_二御座_一想像仕候。且館中之諸君彌以御精業御盛成□□□□□と
(四・五字脱減)奉_レ存候。一々書狀等も出來不_レ申、宜敷御傳致被_二成下_一候様奉_レ願候。當春は自然貴藩之御方九州方御遊
 も御座候はゞ必ず弊邑御立寄被_レ下度奉_レ待候。拜話之筋山海御座候へ共書中盡し不_レ申、先此段迄呈上
 仕候。行末長く御取遣可_レ仕候。頓首拜。

一月十五日

横井平四郎

坂本 格様

井上 司馬太郎様

尙々春寒いまだ除不_レ申、時節御厭可_レ被_レ成候。同行兩人に御傳致之趣夫々申聞、何も忝々宜しく申
(一・二字脱減)□□吳候様申出候。何も付_二後雁_一申候。已上。
(坂本格様)

右は横卷に仕立て、あるが、裝潢の不手際の爲か文字磨滅する處頗る多きは遺憾である。文中の「玉名」は「玉乃」の誤であらう。此
 の玉乃は文端と號したが子無く、その養嗣子は明治時代に明司直の評ありたる玉乃世履である。

二四 吉田悌藏へ

嘉永五年三月二十五日

小楠在熊本
吉田在福井

正月廿日之貴書先月相達忝々拜見仕候。御兩家 上々様益御機嫌能被遊御座、恐悅之御事に奉祝候。隨て貴家御老人様奉初彌御安全に可被成御暮、珍重之御儀に奉存候。將又御同社益御精業と想像仕候。廣部君獨立之見相進候段既に村田君(氏壽)より論志二篇被送下誠に以非常出類之人物と被存、甚以(小脱力)しく御座候。病氣何程に御座候哉、一つ喜一つ憂申候。村田君此般之書狀にてよ程進歩之様子に相見へ、重々慶賀仕候。

學校之下問有之、問答書相認さし出申候、御一覽可被下候。尊藩學校御建方は是非共御止方に相成、後日其時宜參り候上に御興し被成度、吳々奉祈候。備前新太郎少將此學御信用天下の儒者をも御集被成候處、御年十四歳かにて御家督、學校御建方は五十五才之御時にて御座候、流石に芳烈公と奉存候。當時は誠に衰廢に至り候へ共、元文・寶曆比迄はよ程盛成る事に御座候。箇様に百年斗も學校盛成は必竟其根本深有之故と被存候。

立花氏(尊殿)事先書に拜呈仕候通拙塾には見へ不申、當春は熊本に暫到留之積にて御座候處、君公當月初御下國にて其迄出來不申、何れ夏秋に至り可申、此藩は彌益盛に相成最早同志大身小身打混じ六十人餘にも相成り、日々立花方に打集精業仕候。拙塾にも當春より兩人(津留敬・淺川鶴之助)士人參り專精業仕候。君公も御下國後

よ程御悅之様子に承り申候。此上此道を君公眞實に御合點被成自身御修業に御踐込に相成候様にと重々祈申候事に御座候。君公も並々之御生質にては無御座候。隨分有爲之君にて事功に被懸候様(トモ)に共相成候ては決して相成不申、先何事もさし置き此學問之本意を御合點之處のみ立花氏初何も心ざし罷在申候。是以助長に相成不申候様に追々咄し合申候。何れ夏中には萬事相分り可申、其上は内輪御相談之筋も御座候心組に居申候。

久留米當春大騒動有之、大臣以下十八人閉門被申付候様子にていまだ事實は承り不申、何分非常之事にて氣之毒千萬に奉存候、事情相分次第可申上候。

薩州は當君去年御下國以來物情大に安穩に相成申候。隣國にては御座候へ共熊本より五十里餘に及申候間委しき事は一向に知不申、然しよ程心ある君とのみ相考申候。水府老公を御慕ひ被成候、是にて御心立は相分申候。

彦藩其以來は如何に相成候哉、定て御往來のよしみ付き申たると奉存候。南部は御召出に相成申たる哉。此藩之盛衰は實に大關係と奉存候。金澤は如何に御座候哉。關澤登用(房清)に相成候由大慶存候。いか様之職掌に相成候哉、承度奉存候。長大隅守當時の執權にて此人はいまだ年若にも有之、右關澤はよ程懇意の由に關澤より直々承申候。此上御同社中より往來に相成、終には學意混同いたし申度吳々奉存候。兎角彼方は三州之外に見識出不申、是金澤諸子之病痛にて御座候。皆崎氏(雄士、名不明)此許御出遊之御心組有

之段被_二仰下_一候趣御多念と奉_レ存候。此許はさし支無_二御座_一候間御都合次第相待申候。荻角兵衛遊歴打立罷在候處官府故障さし起り、いまだどふとも決定には相成不_レ申候へ共とても六ヶ敷方にて可_レ有_二御座_一、残念千萬に奉_レ存候。是も俗論にて風波の一に御座候。

(小楠の上國邊に隨行した四生) 徳富熊太郎事當月初より熱病相煩候處養生相叶不_レ申、去る廿日に死去仕候。熊太郎妻并妹一同に相煩

三人共に一同に相果申候、誠に以悲傷之至り絶_二言語_一申候、御察可_レ被_二下_一候。諸君にも御通知奉_二希上_一候。此段拜呈仕候。餘は後便に可_二申上_一候。以上。

三月廿五日

横井平四郎

吉田悌藏様

尙々去冬は其御許よ程の大雪にて御座候由、定て今比も餘寒かと奉_レ存候。此許は昨今一重位の身(時候)がんに相成申候。當春作は只今通にては通例の出来と相見申、悦申候事に御座候。御土産雲丹二箱御贈被_二下_一、千萬忝々早速拜味仕候。家内打寄屢夜酒之節相用ひ、毎々御噂仕事に御座候。此節は諸君夫々出狀不_レ申、吳々宜敷御致聞被_二成下_一度奉_レ願候。何も後便に拜呈可_レ仕申縮候。以上。

(徳富蘇峰藏)

二五 吉田悌藏へ(別啓)

嘉永五年四月

小楠在熊本
吉田在福井

久留米風説書

一 御家老有馬河内子なり事二月比登城之上或は御手打とも云ひ或は切腹とも唱へ申、屋敷は閉門に相成申候。

一 大身之内五六人閉門に相成申候。

一 中小姓以上三十五六人閉門にて其身は支配頭に預に相成、圍の内烟草も被_レ禁、一日越に御目附役より見分いたし候。此面々は何も人材にて有_レ之候由。

一 三の丸番人増人に相成、晝夜共に大勢罷通り候はゞ差留可_レ申、若し強て罷通り候はゞ切捨にいたし候様に被_二仰付_一候由。

一 殿様御在國之節是迄頻々御出浮有_レ之候處、當年は其儀無_レ之、四月三日始て北嶋と申所に御獵有_レ之候由。

一 當閏二月中旬御出府被_二仰出_一候處御延引に相成、今以何之御沙汰も無_レ之候事。

一 御中老稻津因幡事有馬勇吉子なりに御預に相成、屋敷は閉門の由。

一 右因幡實弟吉田久右衛門事同姓何某に御預、屋敷同斷。

一 因幡實父大番頭水野某之嫡子も御預なり。

一 殿様御領内大庄屋宅抔へ頻々御出に相成物入多、下方何も困窮いたし候に付、右河内列諫言いたし

候より事起り候と下方風説いたし候事。

一 御儉約去冬迄五ヶ年之年限相濟候へば衣腹(服カ)は是迄之通り、其餘三味線・歌舞妓(伎カ)・相撲等は迄被_三禁置_一候事一切御免に相成候事。

一 御領内往還筋之宿々は申に不_レ及、村々百姓共庄敷宅(屋カ)に呼集、此節之混雜一切風評いたすに於ては見當り聞當り次第御答可_レ被_三仰付_一一段申渡に相成、一統口をつぐみ罷在候事。

子 四月

右之通り國境之者より申來り、甚しき混雜に相見申候。尤是は下方之聞書にて虚實間違ひ申事のみと相考申候。乍_レ然其大なりは相違無_三御座_一候。段々考察の次第も御座候へ共事長く略仕候。近日には柳川より申參り可_レ申候。尙拜呈可_レ仕候。以上。

横 井

吉 田 様

(市村佐太郎藏)

二六 吉田悌藏へ(別啓)

嘉永五年五月二十一日

小楠在熊本
吉田在福井

水一條被_三仰下_一、忝々奉_レ存候。御登出來兼兩邸又々六ヶ敷相成扱々笑止千萬に奉_レ存候。藤田(東湖)・戸田御免

は大慶に候。就ては中山氏(備後守)引拂に可_三相成_一との御様子、是より萬一俗論に觸れ色々六ヶ敷共相成候ては重々大切に奉_レ存候。然し吉も凶も打替る世の習に御座候へば跡之御仕方は重々被_三成置_一、吳々奉_レ存候。兎角水學之病は一偏に落入り助長之所此以後も甚以氣遣仕候、尙被_三仰遣_一可_レ被_レ下候。

尊藩此節は少は御手を被_レ付候御趣向之段重々恐悦に奉_レ存候。乍_レ去何事も遅き程宜敷、餘り十分に參り候ては決して宜しかる間敷乍_レ憚奉_レ存候。第一御領内至窮民等御救恤被_レ遊候事御仁心之根本にて尤大切之御事に奉_レ存候。町抔御取りしめは此節迄は重々早く可_レ有_三御座_一候。且學校之儀は先便愚意さし出候通彌以御取り懸_三御座_一、やはれ此儘にて只々 君臣御講學のみ彌以盛に罷成り、朝廷之間警戒講習朋友之道行れ候處實に 御國家之大根本と奉_レ存候。是さへ盛に相成候へば餘之事柄は次第に漸々舉り可_レ申、眞以奉_レ祈候。且節儉も命令にては宜しかる間敷、御躬行之御徳儀自然に一統に及候上命令は被_レ出度御事に奉_レ存候。是等誠に釋迦前之説法御一笑と奉_レ存候。

監物家政家來中一統盛に相成候事に付て思召被_三仰下_一、早速監物に御紙面見せ申候處、不_レ怪忝がり吳々御禮申候様申聞候。重々思召通り助長に相成不_レ申方に深申談仕候。尤去冬家來中一統箇様に起り候儀は十年來心配之餘にて家來中内輪ニタ黨に相成居候處、此節眞實に雙方解け合無_三遺念_一相成候より、家來中一統監物本意を合點仕初て君臣一致に相成申候。何ぞ佐_レ用之筋を付け鼓舞いたし候事にては少も無_三御座_一候。自然に右之通と罷成候事故彌以先き強く宜敷方に參り申候。且又小生社中も漸々盛に相成、

何ぞ氣遣しき筋は無御座候。右之次第御懸念被下間敷奉存候。尤一統之勢は寸斗開通之模様になり不申、誠に以痛心仕候。彌以助長は大禁物に毎度咄合仕候。い才は尙追々拜呈可仕候。鈴木君御出處被仰下大に安心仕候。此御報にて 尊藩の今日の大體會得いたし實に安心仕候。宜敷御鶴聲可被下候。先此段迄、拜呈仕候。以上。

五月廿一日

横井

吉田様

(市村佐太郎藏)

二七 野村淵藏へ

嘉永五年七月十日

小楠在熊本
野村在福井

野村は上記岡田準介と同じく越藩家老稻葉氏の家臣。後恒見と改名し歌を詠み茶を點じた。

三月十日之貴書到着、忝々拜見仕候。上々様益御機嫌能被遊御座、奉恐悦候。隨て愈御安康被成御座、珍重之至に奉存候。

彦藩尙御出懸に相成候段東篁先生・村田氏(吉田悦藏)より申參り、一ト通承申候 君公之御様子全明君に相違は無御座候。乍去此道之大體御承知無之より一旦之美政美行に有之、終始之落着は遂に世間一樣之明君

と奉存候。此流義にては天下を憂ひ玉ふ御志は有御座間敷、中々残念に奉存候。乍去所證明君にて御座候へば可然人賢を被爲得候へば御心も相替り可申、此上は補佐之人物に御座候處、彦藩是迄之衰廢徂徠學抔と申事に候へば其人物決して有御座間敷、南部氏も學術正しからず候へば何分大本領之處に暗く可有御座、此人中々是迄之積學其方には十分力も入り居可申、今更歸正は六ヶ敷御座候はんと奉存候。然し此人物はどふとぞいたし引入申度、御見込如何と奉存候。南部氏より外には勿論出類之人物と申は有御座間敷奉存候へ共、當時興國にて人心競立居候へば其内には志あるものも急度可有御座、子細に心を用ひ相求候へば能き手綱も付可申、何分御配慮被成度重々奉存候。南部は君意相懸り居申候哉、どふか御召出にも可相成と承り申候。只今は如何にて被居候哉、承り度奉存候。

柳藩相替不申隨分盛にて御座候。尤彼方より兩生(前出)參り居候人五月末より歸省仕、當月末に尙又參り申筈にて御座候。其故五月後の様子は知れ不申、定て宜しき方と奉存候。

昨夏夷齊之仁に付て御咄合之後御發明之次第一々御同案に奉存候。何分此處が賢君之病症と相考申候。既に此處に御會心被成候へば全體之御心嚴斗相替り可申、深大慶に奉存候。

此許社中少づゝ進候勢にて、兩三輩は相應に出來仕候。然し全體衰世委靡之勢に候へば一として快くと奉存候事は無御座、萬事痛心のみにて、御察可被下候。此段拜復仕候。何も近々拜呈可仕候。頓首拜

七月十日

野村淵藏様

横井平四郎

尙々去歲罷出候事最早一周回に相成、何角思出し想像仕候。扱々光陰は如く矢空しく日月を送り、此身は依然と舊日にて罷在り恥入候仕合に奉存候。近來は些と存じ付候事有之西洋翻譯之兵書を讀申候。就ては軍事深思ひ當り候事有之候へ共筆上に盡得不申、半白之書生兵書を几上に置候は竊に一笑仕候。早々申縮候。已上。
(野村厚生藏)

二八 岡田準介へ

嘉永五年七月十日

小楠在熊本
岡田在福井

(前略)日本之書にては熊澤之集義和書は格別に相見申候。尤外書之方は甚以疑しく、決して熊澤之書にては有御座間敷と兼々存罷在り、(嘉永四年)去年岡山へ參り承り候處彼方にては偽書に相違無御座と申事にて疑晴れ申候。是は大に俗論のみにて見る可きものには無御座候。至善を事上と心上と御引分之高論尤以明白にて重々御同意に奉存候。然るに事上・心上二にて無之、今一事に處するに至當を得たるは是理之至善なり。是にて安心と心得れば油斷に相成忽に事理を失うに至る故、其理之至當なる所にて其事に處すれども、此心は未だ盡さざると思ふ所無之ては不_二相成_一是則心上無窮之至善なり。是事に處する上にて云なり、況や一身を修る國天下を治る尤此心得にて二に

離不_レ申候。是則至善たる所と奉存候。如何々々。

尊藩諸賢愈御進歩被_レ成候段大慶此事に奉存候。尤村田君・矢島君御長進之由東篁先生より申參り、此許も兩三輩は大分長進いたし深く悦び候事に奉存候。野村君彦根御出浮之御様子承り申候。南部は乍_二人才_一學路正しからず是は甚以残念千萬に奉存候。其外は一向人物無御座候段扱々心痛之至り、どふとか可_レ致様は無御座哉と案勞致し候。然し行末は何か變代も可有之、何分此藩は終始此道に引入申度吳々奉存候。此節數通相認縷々奉復出來不_レ申、略呈仕候。

七月十日

(小楠遺稿)

二九 吉田悌藏へ

嘉永五年七月十一日

小楠在熊本
吉田在福井

六月九日御認之御狀當月初に到着、忝々拜見仕候。上々様益御機嫌能_レ遊御座、奉_二恐悅_一候。隨て貴家奉_レ始御老人様御揃被_レ成御安康に被_レ成御座、珍重之至に奉存候。此許同社中相替不_レ申、御懸念被_レ下間敷候。

矢島君彌以御長進之段定て大_レほけに相成申たると奉存候。此公局外より道を見られ候處先便紙面參り、初て局中に入り候様に覺申候。其後彌以親切に被_二相成_一候御事と奉存候。左候へば是迄と替り外々にも意念懸り極て押し懸られ我物之規模立候筋と奉存候、誠に目出度御事にて眞以大慶に奉存候。然

るに遂に局外之病は當分は出入仕り可_レ申深想像仕候。

村田君^(氏誌)當年兩度之取遣格別に進歩と奉_レ存候。此公殆菩薩界上之地位に被_レ到候と重々大慶に奉_レ存候。

此上は千里外よりも望み格別に御座候間、聊之油斷も被_レ致候ては天下君子之責參り可_レ申、乍_レ憚御致聲可_レ被_レ下候。此許にても湯地尉右衛門・津田山三郎・矢鳥源助此三人は近比格別に進歩仕り、深大慶に奉_レ存候。追々は此面々よりも御取遣可_レ奉_レ願御聞置可_レ被_レ下候。

學校或問御同案之段深大慶に奉_レ存候。就ては被_レ仰下_レ候趣甚以安心仕候。

柳川藩彌以助長は深相恐れ、小生力丈は入置申候。且同家中池邊藤左衛門と申候人は彼藩之先輩にてよ程識見も長進いたし、深助長を恐萬端さし扣候方に引しめ罷在候間、容易之事は無_レ御座_レ奉_レ存候。拙塾に參り居候^(前出)兩生去月より歸省、近日には參り申答にて、其内之様子はいまだ分り不_レ申何も安穩と被_レ存候。

久留米大亂漸平治に相成申候。委しき事は分り不_レ申候へ共筑後守様御代登用之人物御死去後兩脈に分り、一方は村上守太郎列に有_レ之、向の脈之物、共守太郎歿死一件を様々悪く申立、一旦は極々非分に落入候處、此節御家老有馬河内^{此人は薩部彌子にて守太郎方にて忠臣なり}より書達いたし、双家御究明之上全向の者等非分に落着、五人御知行被_レ召上_レ親類にか御預、河内は御賞美に相成候。此通りに承り候儘拜早仕候。

彦藩之事被_レ仰下_レ、承知仕候。南部事甚以残念に奉_レ存候。必竟英物之上是迄自我之讀力もあり十分之私

見に落入よ程かたまり候と相見、正路に歸候儀は中々六ヶ敷相考申候。必竟は三代上に眼上り不_レ申、規模狭少と奉_レ存候。且又君公之御様子も同様甚残念之至に奉_レ存候。乍_レ然いか様とか御手段被_レ成、南部御引入之道御配意之様吳々奉_レ存候。且又興國にて候へば家中一統因循に眠入り候ては居申間敷、何様興り候は必定にて、外にも極めて心ある人可_レ有_レ御座_レ候。何分御吟味被_レ成、何からしても道を知らせ申度吳々奉_レ存候。餘は別紙に拜呈、早略申縮候。以上。

七月十一日

横井平四郎

吉田 悌藏 様

尙々去月初は御許大洪水に御座候段驚入奉_レ存候。田地之損失如何に御座候哉、定て餘分之事と奉_レ存候。此許は夏中は極々雨少にて、既村々雨乞仕候程に御座候。秋分に入り節々雨を催し、只今通りにては相應之作毛と奉_レ存候。然し此より先風と云恐あり又は早霜尤恐申候。

昨年罷出候時節に相成、日月誠に如_レ流、感慨無_レ限事に御座候。日夜諸賢集會よりして稻葉大夫別業之風色或は夜更客散じ、獨一壺をたづさへ池上の小舟に掉月を賞、千里家郷之情を起し候坏、歴々として昨今の如し。今則家國に在りて却て他郷を思之情更に切なり、人世之變遷如_レ此真に感情に勝不_レ申、附呈仕候。以上。

(波々^{ホウカベ}伯部繁政藏)

三〇 伊藤莊左衛門へ

嘉永五年八月五日

小楠在相撲町
伊藤在津奈木

莊左衛門は葦北郡津奈木の名家に太多次の長男として生れ長じて小楠塾に入りたる人。文中の四郎彦は其の弟で同じく小楠塾に在つて學んだ。

愈御安康珍重之御事に御座候。然ば病氣御見舞として四郎彦氏被_レ差越_二忝候。瘡に相成、性命の氣遣は無_二御座_一候へ共寸斗落兼甚以難澁いたし、誠に是迄無_レ之くるしみ疲勞無_レ限御座候。此上早く落候へかしと祈申候。扱先比御世話被_レ下候臺木代錢何角及_二延引_一、此節純三郎歸りに遣申候、御受取可_レ被_レ下候。病中相認、最略に申縮候。以上。

八月五日

平 四 郎

莊 左 衛 門 様

尙々萬熊へ宜敷御傳聲可_レ被_レ下候。以上。

別 啓

先頃參上之節いなし綱之事御咄合彌以損失のみにて重々馬鹿事、深淵に落入不_レ申内に御止方有_レ之度、箇様之事は體裁も甚以惡しき筋にて、彼是此節よりは嚴斗被_二差止_一候様存申候。御老人様にも其趣御相談被_レ成候はゞ定て其御所存にて可_レ有_二御座_一、最早時節に相成、如何と氣附且聊心遣いたし申候間此段

申進候。以上。

八月五日

平 四 郎

莊 左 衛 門 様

(渡邊季基藏)

三一 吉田悌藏へ

嘉永五年十一月十日

小楠在熊本
吉田在福井

一書拜呈仕候。御兩家 上々様益御機嫌能_レ遊_二御座_一、恐悅之御儀に奉_レ存候。隨て愈御安康に被_レ成_二御座_一、珍重之御儀に奉_レ存候。將又御同社諸賢増御精業之御事と目出度奉_レ祝候。扱近比は久々御書通打絶、御様子も承り不_レ申、小生も八月か書狀にて得_二貴意_一候通七月末よりギヤク^(唐)相煩、次第にきびしく相成、八月中は誠に困窮仕、漸近來快罷成り、當月朔日初て外出仕、日數百日に至り打臥居申候。只今通りに候へば一日々々と元氣も付き、年内中には十分の平快に至り可_レ申、少も御氣遣は被_レ下間敷候。此許同社中も何ぞ相替り不_レ申内少づ、進歩之人も有_レ之、御安心可_レ被_レ下候。

柳川之方も先は無事にて御座候。君公は今年二十三歳に御成り被_レ成、御順良中御氣力も御座候。然し御左右に可_レ然人物無_二御座_一、重役も同様にて残念成る事のみ承り申候。只今通りにては來年御參勤之上大廣間御同席の風化に被_レ爲_レ化候は必定にて、有志者深憂懼を抱き罷在候。追々得_二貴意_一申候池邊藤左衛

門より御書通仕り申度、紙面遣し置申候間さし上申候、御返事は小生迄御遣可_レ被_レ下候。此人は柳藩中之先覺にて近比別て知識も相進み、依頼ある人物に御座候。内輪之處はさして風波立不_レ申迄にて、壹岐列之同志決して助長無_レ之様に精々申遣し置申候間御安心可_レ被_レ下候。

尾州追々取遣仕、去秋田宮君側(綱太郎)に轉役後、肥田孫左衛門と申人御家老に登用、此肥田は藩中有志之第一にて、是迄御城代之閑職に罷在り此節御用ひ、當春肥田・田宮共々御供にて江戸詰仕候。然處是迄御登用之小人輩次第に御斥に相成、よ程國脈張りあがり申候由に御座候。既小生同姓横井伊織介も病氣申立退役いたし申候。此伊織杯尤俗人にて御座候。右之次第にて先は一新之模様に相見申候へ共あまり一旦に進退有_レ之、重々氣遣仕候。此段迄承り、拜呈仕候。

彦藩如何と奉_レ存候。近來は拙藩邊迄御美政何角と唱有_レ之、内輪之處何程に御座候哉と甚案勞仕候、被_レ仰聞_レ可_レ被_レ下候。一體相替申儀無_レ御座候。餘り御無音に付拜呈仕候。頓首拜。

十一月十日

横井平四郎

吉田 悌藏 様

尙々時節御自愛可_レ被_レ下候。乍_レ末御家内様へ宜しく被_レ仰上_レ可_レ被_レ下候。此節は諸君夫々書狀さし上不_レ申、是又御傳聞奉_レ頼候。以上。

(吉田てる藏)

三三 矢島源助へ

嘉永五年十二月二十五日

小楠在相模町
矢島在中山郷

源助後の名は直方、上益城郡津森村の人。矢島忠左衛門の嫡男にして小楠の室つせの實兄である。小楠の門下となり其の學べる所を實地に應用して利用厚生に心を盡くした。すでに十六・七歳にして總庄屋たる父の代役を務めたほどの英物。才華煥發理非の辨別峻嚴で流石の小楠も持てあました。明治維新後左院議官や福岡縣參事官になつたが、官を辭して歸郷後は道路を通じ産業ことに茶業を興して村治に功績があつた。

一書致_三拜呈_二候。月迫に相成何角御多用と存申候。先以先日は長々御難題に罷成忝々拜謝難_三申盡_二御座候。御庇にて寛々保養相加大分氣力を得大慶此事に御座候。御全家様宜敷御禮御傳可_レ給候。然ば日外御難題に相成申候五十目の借錢手許出來いたし候間御返納いたし申候。是又御庇にて急用手使無く、千萬忝存申候。

駒藏事彌以宜敷相成申候。金三郎もよ程感動いたし、只今通りにては來春は大分面白見申候。其外塾中此節大分起き上申候。尤おもて向迄にて無_レ之、下た心より起り申候間御同悅可_レ被_レ下候。熊本之模様一體相替不_レ申同社中大分起き上申候へ共、此節之打立二(米田是督)の丸・新堀と些相替り行違候事も大分有_レ之、是にはよ程心痛いたし申候。乍_レ然春にも成り候へばもつれも次第にはつれ可_レ申、何も年内は御出府も有_三御座_二間敷、明候へば早々御出方い才御咄合可_レ申候。先右迄拜呈いたし候。以上。

十二月廿五日

平 四 郎

源 助 様

尙々御大人様初宜敷御傳致可_レ被_レ下候。長野昨_(澤平)日出府、寛々咄申候。此節はよ程分別まわり、よ程開候て大に悦申候。是も年明候上は早々出府之筈に御座候。

萬熊目出度御同慶に存候。先日御禮に出府、寛々咄合申候。彌以進歩之模様相見申候。以上。

(江藤太郎藏)

此の書面につきて徳富一敬は「嘉永五年十二月二十五日仕發と拜觀す」と裏書してゐる。

嘉永六年

澤田良藏へ

嘉永六年正月十五日

小楠在熊本
澤田在名古屋

良藏名は師厚、眉山と號す。尾張藩士、漢學者にして書を以て著れ、弘化元年よりは明倫堂にて書法を教授し、同四年よりは御儒者となり明倫堂典簿次座に上り、嘉永六年五月教授に進む。小楠は嘉永四年上國漫遊の際名古屋に遊びて相識り、其の後懇意となつたのである。

新春之御慶目出度申納候。愈御安康に被_レ成_レ御加年、珍重之御事に奉_レ存候。隨て小生無異に馬齡を重、御安意可_レ被_レ成_レ下候。去秋は御書狀被_レ成_レ下、忝々拜見仕候。早速に奉復仕筈に御座候處、八月初より閑退

熱相煩十二月初に初て理髮仕候程にて十二三旬打臥罷在候間、執筆出來兼失禮仕候間御海量可_レ被_レ下候。先以久旱嘆之高吟幾回拜誦仕、何方も御同様之奸吏俗夫此民を苦しめ候事甚しく、眞に痛心之至に御座候。九州表去秋は七步通之出來にて御座候へ共、近年打重候凶荒にて中々愁苦少も相寛み候容體にて無_レ御座候。弊藩尤窮困之民情にて御座候。自然當春作聊不熟にて候へば民食必死と被_レ存候。如何に成り可_レ申哉、痛心仕候。乍_レ然例の俗吏は少も驚き不_レ申、依然たる光景眞に嘆息之至に奉_レ存候。

久留米藩此節の出入は小人輩敗軍にて君子冤を開、珍重に奉_レ存候。高諭の通り近年天下之勢何方も君子小人流脈を分朋黨之憂甚しく、是總末世之勢眞に氣之毒之至に御座候。小人は勿論、君子亦餘り小人を惡み過し却て_(二字不明)成病は尤戒め謹ますんばあるべからず。去冬柳川藩士拙塾に參り居候書生歸郷之節二絶相送申候内一首

後先憂樂果名箴。忠愛養來深又深。人類不_レ須分_二黑白_一。包_レ荒識量服_二人心_一。

柳藩亦此黨脈之病有_レ之、深く君子心を用ひべき所にて御座候。乍_レ去此間甚以所置六ヶ敷、苦心此事に御座候。薩藩は當君よ程明主にて御座候。既に此藩よりも拙塾に參り居、内輪之事情具に承り申候。此節は必定起り可_レ申候。乍_レ然至て事情六ヶ敷、何分君公寛大之御量にて無_レ御座候ては御乗り鎮め出來申間敷、御先代御用之小人輩は大略御斥に相成申候。三十年來小人政を執り罷在候間其黨與流滿いたし候間、忽に是を斥け罪を正し候様に御座候ては如何成禍亂を生じ可_レ申哉、深憂ひ恐れ候勢にて御座候。尤

此所は君公御合點參り、巨魁のみ御斥にて其餘は深御惡みの様子も相見不_レ申、所謂包_レ荒之所御見識御座候間重々珍重奉_レ存候。

外夷惡氣景色至て六ヶ敷模様承申候。既に長崎にては紅毛よりさし出候書附一切外に流布いたし不_レ申様に御奉行より嚴令有_レ之、通事共翻譯は御奉行面前にて仕り、其草稿は直に火中いたし候との事に御座候。且又薩生申出にはイギリス近年琉球に參り、年々夷人を殘し置只今も兩人罷在り毎歲々々更代仕候。此譯は琉球はアジャ洲の中尤中央之地にて有_レ之、是非共大交易場を立可_レ申との論談の爲にて、琉人も内輪は利害之説によ程動き申候由。因て薩よりも甚以致しにくき鹽梅に罷成、何に夷賊之心底難_レ斗次第に御座候。此方之流説にては當夏は必ず何方かに參り一論談いたし可_レ申、此論談之儀は海運を鎖すの一策に出ること必定と奉_レ存候。可_レ憂可_レ戒。

文章五篇御笑具に拜呈仕候。小生文字は兼て修行も不_レ仕、別て近年は一切程に廢絶仕り無_レ餘義_レ應酬共仕候位にて中々下劣可_レ恥之至に御座候、必御改正被_レ成下_レ度吳々奉_レ希候。此段迄拜呈仕、餘は後脚に萬縷可_レ申上_レ候。頓首拜。

正月十五日

横井平四郎

澤田良藏様

尙々鬼頭君に一封さし上申候間御序に御届被_レ成下_レ候様奉_レ頼候。以上。

別啓

尊藩彌益御盛隆之御事奉_レ恐悅_レ候。田宮君は不_レ相替_レ君側に御勤被_レ成候と奉_レ存候。乍_レ憚此地位尤以御大切之大根本にて、第一等之人物須臾も離れ候ては相成不_レ申、眞以千里外想像仕候。肥田大夫御登用直に御東下重々目出度御事に奉_レ存候。大導寺君はいまだ御閑散にて御座候哉。將又小生(横井伊藏介)御役御斷に相成候様に承申候。其外にも此類之人御同様之事可_レ有_レ御座_レ候。此等之御進退尤御一番中之耳目打替り候第一にて、就ては御内輪様々委曲之譯合善事惡事さぞかし御座候と奉_レ存候。一喜一懼重々御大切之御時節にて 尊藩御盛隆は眞に天下列藩之大勢に大に關係仕、有志者甚大望を懸け罷在候間乍_レ憚聊も御失慮無_レ御座_レ御都合宜しく行れ參候様神以奉_レ祈候。中々季世之人心は惡習甚しく候。別て尊藩は以前御内亂より指届仕候へば十六年餘に相成候様に奉_レ存候。此間士風民俗惡しき方にのみ培養に相成候御事にて、中々一朝一夕には改觀仕様には參り申間敷、乍_レ憚寛大なる御趣向第一にて助長等之事無_レ御座_レ様重々奉_レ存上_レ候。是等は誠に釋迦前之説法、失禮千萬之申事と可_レ被_レ思召_レ奉_レ存候へども、御懇意に任せ無_レ遠慮_レ拜呈仕候。何分有志者大望を奉_レ懸候御事にて、其所御憐察可_レ被_レ下_レ候。以上。

正月十五日

横井平四郎

澤田良藏様

(名古屋市圖書館藏)

澤田より小楠への書簡を見出し得ぬのは遺憾である。本文中の詩は柳河藩士池邊龜三郎の歸省を送る二首中の一。尙々書にある鬼頭は忠次郎忠純。(此の人のことは本書第四、乙、四にある)別啓中の田宮は云ふ迄もなく彌太郎のこと。大導寺は玄蕃と稱して尾藩家老で、此の人の事も本書第四、乙、二の尾藩騒動を記せる處にある。

三四 吉田悌藏へ

嘉永六年四月三日

小楠在熊本
吉田在福井

二月十一日之貴書相達、忝々拜見仕候。先以 御兩家 上々様益御機嫌能被遊御座、奉恐悦候。隨て貴家愈御安康に被成御座、珍重之至に奉存候。且御同社中彌御盛事奉拵賀候。此許拙家別狀無御座、同社中不_ニ相替罷在、御懸念被_レ下間敷奉存候。

柳藩池邊への御返書直に相達申候。且又御許諸君より御通問被_レ成度旨重々御雙方之爲可_レ然奉存候間、其趣池邊へ申遣置候。柳藩も同學次第に盛に相成、大身之子弟漸々此道に入申候様に成行、悦申候。然し君側一向其人無_レ之甚残念に奉存候。君公は御氣力も有_レ之、何分凡庸にては無_ニ御座、一ト開いたし候へば此道に御入り被_レ成候御方と被_レ存候間、尊藩とは御間柄にても有_レ之、何卒御引立被_レ遊度奉存候。

尾藩近比書狀參り不_レ申、如何と按じ居申候。尤あしくは決して無_ニ御座、模様にて、不_レ遠様子相分り可_レ申候。

彦藩當春には南部罷出可_レ申旨、定て今比は參謁御咄合御座候と奉存候。是は是非共此道に入れねば不_ニ相叶、幾重にも御心配之程奉_レ祈候。

薩藩之事前書に一ト通拜呈、其後書生參り不_レ申、何に不_レ遠尙再遊可_レ致相待居申候。其上い才言上可_レ仕候。

外寇一條長崎・薩州之事狀前書にさし上申候通にて、其後は相替不_レ申候。尤長崎より書生參り居先月より歸省、當月初には尙又參り申筈に付内實事情承り參候様申含置候間、尙様子も御座候はゞ早速拜呈可_レ仕候。早々以上。

四月三日

横井平四郎

吉田悌藏様

尙々時分柄御自愛可_レ被_レ成奉存候。御老人様益御安康に可_レ被_レ成御座、乍_レ憚可_レ然御傳言奉_レ頼候。拙家老母先月初外邪(盛月)に感じ、一段はよ程氣遣仕候處甘快に相成、今程は大分元氣付き安心仕候。(左平太)家兄近日中風相煩甚氣遣仕候處、是以漸々甘快に趣、先安心仕候。彼是病人打重近來は大に按勞仕候。小弟も大病後漸く全快仕、當時は氣力も殆平常通に罷成申候間御安心可_レ被_レ下候。此段迄申縮候。以上。

(吉田てる藏)

三五 伊藤莊左衛門へ

嘉永六年四月十四日

小楠在相摸町
伊藤在津奈木

御紙面忝々拜見いたし申候。御全家御揃御安康之由珍重之御事に御座候。其御許讀書生も大分折合申候段珍重に存候。

此許も相替不_レ申、民平参り候に付ては少は宜敷御座候得共寸斗思ふ様に成り不_レ申、困入申候。彌以力を用心得に罷在候。

純三郎御咄合之段此人どふでも本領に力入り不_レ申の病痛にて御座候。彌其處に工夫相用候様御咄合重々可_レ然存候。

未發已發之御説一々御同意に御座候。尤閑居獨處聞中重々力入り不_レ申ては何事も外に成申候、學は全此處に御座候。

先月末より家兄中風相發散々之容體誠に心痛いたし候。然し大分快方に相成、只今通りに候へば大方此節は平復可_レ致、然し寛病に御座候。右之次第故拙子遠方出懸は一切六ヶ敷、當夏其御許避暑は行れ不_レ申事と相考申候、左様御承知可_レ被_レ下候。

小綱之鹽煎被_レ下忝々、別て調法毎夕相用申候。此段迄略復、餘は往々可_レ申述候。以上。

四月十四日

平 四 郎

莊左衛門様

(緒方直喜藏)

三六 岡田準介へ

嘉永六年五月三日

小楠在熊本
岡田在福井

(前略)尊藩舊冬之御様子又々御都合宜方に相成候段重々目出度奉_レ存候。根本之地嚴斗一定不_レ仕内は色々變動可_レ仕、何分御大切之御時節と奉_レ存候。被_レ仰下候通是迄積年之御講學人心に深染いたし居候事を得ば終には御一定之地に罷成可_レ申候。此間助長は大切なれ共又大に力を入れねばならぬ事、御心配之御事萬端奉_レ察候。何分君側に一大人無_レ御座候てはなり不_レ申、願くは當年中にも鈴木君御歸役に相成度御事真に神明に祈申候。近來は西洋之變動其沙汰紛々と有_レ之、定て夏中には浦賀へ参り可_レ申候。去れば彌益天下之勢武でなければならぬと、士氣を興すと一偏の所に参り可_レ申候。成程士氣を興し武備嚴重にならねば決して相成不_レ申候得共、此一偏に根本定候へば甚以恐敷事に御座候。先便村田君列に文武一途之説と申候一通指上申候。或は御一覽なされ候半。唯武事を起し候は大成る相違にて御座候。聖賢豪傑心術事業一致に参り、治にも亂にも常にも變にも一偏ならざる修行尤以此學の心得と奉_レ存候。如何々々。

水府の事は飛立計に大慶存候。然し復の一爰甚以氣遣しく、聊心付候筋先便藤田_(東湖)へ申遣候。どふぞ好き

返書參り候えかしと希候。此許同社中不_二相替_一大分盛に相成申候。柳川同様と申内、是は餘程面白き起りにて御座候。只今通りに候得ば一藩中に及び可_レ申勢に相見悅申候。池邊一人之力にて、此人は彌以修勵進歩に相成申候。近日に此許に參り申答に候、左候へば萬端咄合可_レ申候。此段拜呈、餘は後便に付申候。已上。

五月三日

外寇之一條、前條之通彌以變動可_レ有_レ之奉_レ存候。長崎表坏は殊の外秘密に相成、扱々氣之毒千萬に奉_レ存候。北條時宗が蒙古之使者を首切り、天下に令して逆寄之打立いたしたるとは天地之懸隔。眞に嘆息々々。

梅田至困に付御助力被_レ成候由、御厚情之御事に奉_レ存候。此人不_二相替_一偏固に御座候段迷惑成る人物、扱々笑止に奉_レ存候。水府御開運に就ては尙更氣力を張り可_レ申候。此種の人程致しにくきは無_二御座_一候。御一笑々々。

〇〇へ御傳言忝奉_レ存候。此者近來大にくたびれ、繩も綱も掛け不_レ申甚以迷惑に奉_レ存候。必竟例の山崎家講義讀之學者にて一切心術之工夫無_レ之、外馳之大病甚敷、其故同家中之面々より一統に見限られ、うち合候者も無_二御座_一候。主人よりも嚴重切磋商聞、小生も同様最早示教幾度と申限り無_二御座_一候得共、唯屈し込み落入迄に御座候。

梅田は何様氣力にても有_レ之ととも一種の人物、〇〇が如き者に成りてはどふもこふも致し方無_二御座_一候、扱々迷惑千萬之者に御座候。已上。
(小楠遺稿)

右文中梅田至困云々は岡田の主稻葉正博が岡田の紹介でその國事に奔走するの内情を知り梅田を別墅遊仙樓に寓せしめ且つ衣食を給した事があるのを云つたものでもあらうか。梅田の評は後記吉田悌藏への書簡中にもある。(二〇〇頁)
〇〇へ御傳言云々の〇〇は小楠が上國遊歴の時同行した笠安靜の事、次の伴圭左衛門への書簡の「尙々書」参照。

三七 伴圭左衛門へ

嘉永六年五月七日
小楠在藤本
伴在福井

伴論は習輔、號は閑山。吉田東篁に従ひて經學を研究。藩に仕ふるかたはら家に在つて教授す。安政中司計吏となり尋いで中監察に遷り、功を以て大番に班した。

二月之御狀忝々拜見仕候。上々様益御機嫌能被_レ遊_二御座_一、奉_二恐悅_一候。隨て愈御安祥被_レ成_二御座_一珍重之至に奉_レ存候。御許御同社諸君益御精業御進歩被_レ成重々之御事、此許も不_二相替_一聊脩勵仕、御安意可_レ被_レ下候。然ば格知御工夫被_レ仰下_一夫々承知仕候。如_レ命是も先彼も大抵先坏と推究十分に成り不_レ申、根本を深吟味仕候へば必竟其事に誠意ならざる所に基き來り候へば丹書敬怠之字重々大切に奉_レ存候。因_レ之大學或問に主として敬之一字を説き來り候は即格知之根本全是に有_レ之尤以親切に覺申候。然處近來熟_レ省察勘考仕候には敬尤大切に御座候へ共是は本心發見之上より持守いたす所にての工夫な

り、今日之學者兎角舊習にまどわれ候へば言行共に善を爲し候とも此心は眞實ならず、(やほりの意)やはれ内より引もの有之候故第一誠意之工夫にあらざれば其事物に親切ならず候。既是親切ならずして如何にして物理を究候事を得可申哉。於是甚以力を弱く覺へ何事もまあ／＼の位に相成一切格知之修行に成不申候。左候へば敬は勿論之事に御座候へ共尤大切なる工夫誠意と奉存候。故に明道も先立誠意後致知と被申候。其上此誠意は論語にて申せば主忠信之處、近思錄にては爲學之所、皆此學問之大本領之工夫なり。然れば大學或問之説き様と替り候様に御座候へ共大學は小學を受け來り全體順道に説き申所にて敬之字にあらざれば不三相叶、論語・近思錄は學者此心本領を不_レ得所より其本領を立る工夫より誠意之工夫を主といたし候。要_レ之敬といへば誠意も其内に有_レ之、其心持にて大學を見るに誠意致知誠意と心得候へば却て大に親切に御座候。然し此心之發る所を持守擴充する所よりは敬にあらざれば不_二相叶、兎角敬は此心之發る上よりの工夫、誠意は善を爲せ共此心實ならざる上之工夫なり。學者此心實ならざるより本領立不_レ申格致之士臺無_レ之、是孔子以來學者之入處忠信誠意之處を以て御示教に相成候所以なり。如何々々。

去秋來は官途御多用と奉存候。被_二仰下_一候通是即第一之工夫處にて、學者往として誠意格知之工夫にあらざるは無し。御自愛可_レ被_レ成奉存候。(豊兵衛)
末松君・三寺君一向に音信相絶、如何と奉存候。此節は書狀にてもさし出申筈に御座候處、(少し多く)少多相認失

禮仕候間、吳々御傳聲可_レ被_レ下候。(兼左衛門)

柳藩池邊はよ程上進、日出度事に御座候。藩中も日々益盛事にて、御同慶に奉存候。先此段迄略呈仕候。頓首拜。

五月七日

横井平四郎

伴 圭左衛門様

尙々笠事御尋被_レ下、忝候。一向に信實之學に入り不_レ申、(嘉永四年)一昨年來主人家彌以脩勵致し、家中之者共老輩之面々迄一致に此學に入り、當時に至り候てはよ程可_レ見家風に相成申候。(立安節)然處左一右衛門右之通之不埒にて段々督責に逢ひ、言語同斷之仕合にて御座候。追々呼寄教示いたし候へ共中々本心遠、是には甚心痛仕候。全體は左一右衛門親父山崎學いたし例の講義讀にて、父子是迄彼之家中にては學者と被_レ稱、自も先輩を以て罷在候處實地之學起り候ては一向に狼狽いたし如_レ此之仕合、何とも可_レ申様無_二御座、氣之毒成ものにて御座候。此段付呈仕候。以上。

(伴圭一藏)

三八 吉田悌藏へ

嘉永六年五月十一日

小楠在熊本
吉田在福井

一書拜呈仕候。先以上々様益御機嫌能_レ遊_二御座、奉_二恐悅_一候。隨貴家被_レ成_二御揃、愈御安康被_レ成_二御

座、珍重之至に奉_レ祝候。御許御同社中彌以御精業之御事と奉_レ存候。此許も相替不_レ申、御安意可_レ被_レ下候。將又柳藩も相替不_レ申と申内是は彌以好き都合に參り日に増此學盛に相成、大身之面々過半は心を傾申由に御座候。必竟池邊一人(藤左衛門)の力にて此上之處助長は勿論萬事聊之敗事無_レ之様、精々是よりも心を付候事に御座候。池邊人物別て近來は進歩いたし知見大に活動、譬ば同社中不見識之人よりは智術にわたり候様にも疑を生じ候程に御座候て、中々此人は大に頼み有_レ之候人物に御座候。當月末には此許に五七日到留に咄合に參り申筈にて何角相談可_レ仕と奉_レ存候。彦藩南部は當春は定て參上いたし候と奉_レ存候。彼表之模様如何に成行居候哉、按勞仕候。萬一功利之様に共落入候ては重々残念千萬、既に肥前之容體以前略拜話仕候通り彌以功利に落入り士俗至て輕薄に相成、近比は學者押出候て功利を唱へ、道學を忌み嫌候様に成行申候。大抵當時之士風を申せば種々様々之黨脈に分れ相互に嫉疾甚しく、己を是とし人を非とするけわしき人氣に相成申候。御政事之上を見候へば御家督足下より御儉約嚴敷被_レ仰出、御領内中三吟(味カ)線之聲を不_レ聞事既に二十餘年不_レ相替_二行れ、學校御建立居寮生二百人斗も平生相詰、專文武御勵、將又武事は炮術は申に不_レ及劔槍等嚴敷御力を被_レ入、長崎表之御防禦に至り候ては尤以十分之御力至れり盡せりとも可_レ申候。既長崎湊口のまへこふやきと申嶋より海上八丁餘り御築出に相成船入出來仕候。此處深さ十八尋以上之由、誠に非常之事に御座候。佐賀藩士之内話に十餘年來御軍備一條之物入大抵三十萬兩餘と申事にて御座候。箇様に御心志を被_レ盡御政事向種々御配意に相成候へ共前

條通り士風益以惡しく相成一人之人才も出來不_レ申、必竟功利之學可_レ恐事に奉_レ存候。其故彦藩も明君にて此道を御講明に相成不_レ申候へば肥前流に落入可_レ被_レ成かと大に氣遣仕候。兎角明君英主大僻事は此所にて御座候。何分彦藩は御配意と奉_レ存候。

當年は浦賀表夷船參り可_レ申模様、是付ては段々愚意之次第御座候へ共略仕候。何様夷船參り候へば跡之所置にて御座候。何も後脚に付與仕候。頓首拜。

五月十一日

横井平四郎

吉田 悌藏様

尙々時分御自愛可_レ被_レ成、乍_レ末御老人様へ宜敷御傳聞奉_レ頼候。先便得_二貴意_一申候家兄病氣も殊之外鹽梅宜しく、昨今は大抵八歩位も快相成、近邊迄は外出も仕候。先安心仕候。

水府正月以來之御模様如何と奉_レ存候、定て様子可_レ有_二御座_一候。急ぎ御知せ可_レ被_レ下候。先便藤田への書狀は定て返書參り可_レ申候。返書之趣に因ては段々愚意建白仕筈に罷在候。先第一此學術一條是迄之事實に因て重々討論仕度奉_レ存候。其外御政事之得失何角建白仕度、返書を相待居申候。此節は格別言上之筋も無之、別紙諸賢え拜復仕候間荒々如此申縮候。以上。

(市村佐太郎藏)

三九 吉田悌藏へ

嘉永六年七月十三日

小楠在藤本
吉田在福井

四月廿九日之御書先月末に到着、忝々拜見仕候。烈暑之砌、上々様益御機嫌能被遊御座、奉恐悅候。隨て貴家御揃被成御安康に被成御起居、珍重之至に奉存候。且諸賢君彌以御精業、別て村田・矢鳥之諸賢御進歩實に大慶仕候。此許も同社相替り不申御安意可被下候。

然ば江戸表英船參り散々之無禮相はたらき、深痛心之至に御座候。此船去夏蘭船に託し前廣申入候事に、廟堂實に御覺悟に罷成り候へば夫々御手當に相成り、箇様に寢耳に水入り候様には至り申間敷、必竟例の因循家何事も無事々々の御沙汰故如此之大驚動、實に耐慨嘆不申、然し夫は跡之事今更に申不及、何様是より兵禍に相成候は必定にて、既に琉球表にはアメリカ船十六艘か參り居り、當年中尙又江戸に參り御返答承り可申との取沙汰、是は現賞之事は承り不申、薩州に聞合候へ共いまだ返事参り不申候。果して然ることに候へば手近く干戈に相成候事も難斗、廟議之御決定如何に御座候哉。何も扱置此場に至り候ては第一人才御用之外無御座、水府老(齊昭)公御用に相成候一着に御座候。左様に御座候へば此節是中興之大機會大有爲之時節、重々目出度御世に罷成候は現然之事に御座候。若し然る事に不相成して例の海防家之説行はれ、軍艦の大炮のと防禦之用意迄に至り候へば實に寒心に耐へ不申、覆亡は現然と奉存候。何様老公御用に相成候へば、大將軍家御一身より非常格外之御所置可被爲在、御身を以て天下に令せられ、此御所置大機會付定て御思惟一定仕事なり略仕候。尤

御座候に當り候て再認不申候ては不叶候。御座候間出来仕候へばさし上可申候。 候様相成候へば實に天下萬姓之大幸此節程大機會は無御座候。御賢慮後便奉待候。

彦根藩南部罷出に付縷々被仰下、中々驚入候人物重々頼母敷大慶至極に奉存候。就中出所之一條は今代人士絶て無之志確然たる所眞に感心仕候。學意は先づ扱置、今日之世界一人之人物も尤大切に、君公當年は御在國、此變動にては或は御登用にも相成可申哉、如何と案じ申候。南部に御通問之節小生よりも可然御傳致仕候様、御沙汰重々奉頼候。

加藩密交易既に此許にも種々之風説有之、萬一大身之内黨與も御座候へば此折柄重々氣之毒千萬に奉存候。能登・越中之御領にても如何成事御座候も難斗、越後杯は交易殊之外盛之由に承申候。其外九州にては薩州・五島等、南海には土佐・紀州等沿海之諸國海禁甚以大弛に相成、因循之流弊絶言語事に御座候。

柳川彌以都合宜敷、只今通りにては聊大氣遣は無御座候。次第に宜しき方に成行申候。必竟池邊立花・立花兩人之力と奉存候。此段拜呈、餘は付後鴻申候。頓首拜。

七月十三日

横井平四郎

吉田悌藏様

尙々當夏は殊之外烈しき暑にて御座候。御地如何、御自愛可被成候。乍末御老人様方彌以御壯健

御申分無御座御暮し可被成、宜敷被仰可被下候。拙家先便に拜呈仕候家兄中風相煩、一旦は死生不定に御座候處漸々甘快に相成、近來は彌以快く大抵八分位之平復、外出等も仕事に御座候。老母は當年は大に元氣壯にて大安心仕候。

京師梅田困窮に付ては稻葉氏(正博、福井藩家老)より御助力に相成候由、尙又此許監物手許に助力申越、扱々困り入申候。此人陽に正直をかざり、陰に利心をさしはさみ、都會儒者之情態一笑に耐不申、聊附記供(長脚)一

候。此人陽に正直をかざり、陰に利心をさしはさみ、都會儒者之情態一笑に耐不申、聊附記供一(山口周祐藏)笑。

四〇 矢島源助へ

嘉永六年七月十九日

小楠在相撲町
矢嶋在中山郷

一書致拜呈候。朝夕は大分暮し能御座候。扱竹崎(律次郎)・内藤參り雨乞一條是迄之成り行承候。吉田直吟味にて却て事情明白いたし可申と存候事に御座候。然し此末如何と案申候。右に付ては此方之御心中平坦成る所に彌以御心を被用、清原列を此節物見せんと敵に取り候様之意思決して無之、只々自ら罪し自ら責人に對して言も我が獨りの心も不替御座候様重々祈申事に御座候。凡人情平生不平之筋有之候へば其事に當りて此不平主と成り候より大に事理を誤り申事は御案内通りにて不及申候。別て貴公は生質此處に偏なり申候間實々氣遣ひ申候。何事も何事も自反被致、平坦なる御心得尤以大切にて、

嘉悦がどふの清原がどふのと聊人を敵に取り被申候様無之、千々萬々祈申候。平生之學問全く簡様之場にて、俗人と氷炭相替り申候、實に御心得可有御座存候。

嘉悦一條も竹崎列よりい才に承申候。是は懸御目不申候へば委細筆上にて盡しがたく候。只々吉田望みの通りに門兵衛手前より(門兵衛の手の方から野決)ほどきに相成候様嚴斗可然存申候。平生友誼御信じ不替候へば愚拙所分御疑無之御決定可有御座候。い才はどふも筆に盡され不申、略仕候。

右愚意之趣一刻も得貴意度態と人をさし立致拜呈候。吳々も愚存御疑惑無之候様、天地神明に懸け誠心御切瑳仕候。此意御組取可給候。外に申事も無御座申縮候。以上。

七月十九日

源 助 様

平 四 郎

尙々江戸之御模様大に宜しく、水府老公御委任にて大に言路を御開き衷情も御打明に相成申候。外に恐悦之筋御座候へ共、態と略いたし候。何れ不遠相分、爲天下國家大慶無限、此段迄申縮候。以上。

昨日早御飛脚着之次第なり。

別 紙

御大人様に別書呈不申、吳々宜敷御頼申候事。

(矢島武次藏)

四一 江口純三郎へ

嘉永六年八月二日

小楠在相模町
江口在葦北

純三郎名は高廉、徳富一敬の第二弟で江口家の養子となつた。小楠門下の才物で、小楠の越前行にも數度隨伴したし又明治元年小楠が朝廷よりの召命によりて上京せる際には出發當初より之に隨ひ、病床に親しみ勝ちだつた師の身邊に在つて何吳と介抱した。小楠も純三郎を家人同様に親しんで普請其の他家事向のこま／＼した事まで同人に依頼してゐた。小楠歿後は諸方に宦遊して、後には東都にて雜誌を發行し、明治廿二年『小楠遺稿』上梓に際しては資料蒐集及び編輯の任に當つた。

一書致拜呈申候。愈御安康珍重之至に存候。先以先日來は御不快之御様子(可憐)典次列より承り如何と案勞いたし申候。最早定て御甘快と存申候。隨分御保養專一に御座候。扱家兄病氣來今以十分勝不申に就ては家政向一切拙子受込申候。全體御承知之不勝手之上病人之物入非常に有之實に大困窮に相成、痛心此事に存候。就ては熊本居も出來不申仕合に候へ共此節之折柄拙子在宅は六ヶ敷、板はさみの身に相成申候間何卒御助力被下度希所に御座候。い才は竹崎(津次)に咄合置申候間可然御相談被下度重て御頼申候。外夷之事も竹崎より御承知可被下候。前條御願申候迄拜呈、其外は略申候。以上。

八月二日

平 四 郎

純 三 郎 様

(米原鶴太藏)

四二 伊藤莊左衛門へ

嘉永六年八月七日

小楠在相模町
伊藤在津奈木

七月廿九日之御紙面相達、忝々致拜見候。先々御揃御安康珍重之至に御座候。此許も不替、社中一統無事にて御座候。

先頃は内野列參向寛々御咄合御座候段い才に承り、大慶いたし申候。扱長崎表にもヲロシヤ參り是は同じ穴の狐にては有御座間敷、全體ヲロシヤは御案内通り世界第一之大國、イギリス杯は元來其屬國に候處文政之初かより強大に相成獨立いたし、ヲロシヤの命令も受不申全體中惡しく有之。此節の北アメリカも同様にて、是等の夷人強大はヲロシヤの實情大に悦び不申事と被存候。去れば是等と申合此方を搖動いたし候様の筋合には決して見不申、いまだ使節の主意は一向に知れ不申候得共愚考する處此節アメリカ參り候事嚴斗沈痼たる大病、一方ならざる大變事にて候得ば日本にて重々遠慮を被加、決して疎率なること無御座様に心を付けに參り、且ヲロシヤより此節の風波は取り鎮め無事に取計可申と申出候ものに相違無之相見え申候。左候へば日本・アメリカの亂をヲロシヤより取り治候大名世界にかゝやき、且日本よりは大恩に相成たる交易も無異議行れ可申との所存と考申候。然ば此返事尤以大切成る事にて如何御了簡候哉、承り度候。

江戸表水老公(齊地)日々御登城、全く御後見と相考誠に大慶此上もなし。去月十九日一萬石以下御旗本之衆登

城出仕、木綿被_二相用_一候様御達有_レ之中々きびしき事に被_レ存候。いまだ委細之狀參り不_レ申、何に四五日中には相分可_レ申候。先御穩便たるといへ共炮術之修行は江戸中少も遠慮いたし不_レ申段御達に相成、此節は江戸中炮聲甚だ賑々敷穩便と申參候。是は江戸之事、御國は左様にては無_レ之候彌以夷船御打はらひに決し、誠に以重々目出度御事飛立斗に悦申候。段々得_二御意_一度儀御座候得共先此段迄申略候。以上。

八月七日

平 四 郎

莊左衛門様

尚々竹崎薩州に打立、定て御咄合御座候と存申候。(徳富) 太多助・純三郎に宜敷御傳致可_レ給、御頼申候。以上。(江口)
(律次郎)
(淇水文庫藏寫本)

四三 藤田東湖へ

嘉永六年八月十五日

小楠在熊本
藤田在江戸

一書拜呈仕候。愈御安泰に御起居なされ珍重之至り、奉_二賀上_一候。然ば夷船來航天下の大騒動と罷成、十年以前其兆顯然の處廟堂恬然無事太平に押移られ、一旦狼狽申計なく、眞に痛哭の至り言語に絶たる事にて候。然しながら夫より跡の事今更申に及ばず、天命人心尊藩に屬し、老公様御後見眞に以て天下中興の大機會到來仕り、何の悦か之に過ぎん。此時に於て列藩總て老公様の尊意を奉じ二百年太平因循の弊政を一時に挽回し、鼓動作新大に士氣を振興し、江戸を必死の戰場と定め夷賊を壑粉に致し、我が神

州之正氣を天地の間に明に示さずんばあるべからず、是今日大に馮河を用候の機會、誰か疑を容べけんや。然ば小子輩一番に馳參り聊の御力とも相成るべきの處、我が國體是迄敬上の事共何ともかとも言語に述べられ申さず候。俗論頑固有志者少も動かれ申さず、眞に恥心限りなき事に御座候。夫故同志中津田山三郎と申もの罷出、國體事情内實御相談仕り、小子輩念願の事共委細御聞取成下され度千々萬々奉_二願上_一候。越前藩中平生深く相結び同心隔なく御座候へば兼て我が國情は委細に合點致し罷在、尙更此節は二三の有志者出府にて、津田より萬端咄し合申事に御座候間、定て越藩よりも御相談仕り申べき事と奉_レ存候。事新らしく申事に御座候へ共拙藩も百萬石の一大藩の上祖先三齋東照宮の御先手仕り關原にて大友を打破り、父子夫婦君臣御當家の爲非常の忠戰を盡し候へば斯く大國をも給り三百年太平の恩波に浴し、今日に至り決して他藩に一步も譲り申事は相叶はず、況や今日の國體開闢以來未曾有の大變事、天下の御爲十分の御用を盡し申さず候ては我國有志者の心情濟み申さず候間、何分深く御組取御配慮成下され度神明に懸けて奉_レ願候。委細は津田より言上仕るべく、此段書中拜呈仕候事。頓首拜。

八月十五日

横井 平 四 郎

藤田虎之助様

(肥後藩國事史料)

右は米使節彼理浦賀灣關入の報に接したる際時局に對する其の志を述べ、且つ同志津田山三郎出府同志の素願を陳ぶべきを以て

横井小楠遺稿

宜しく配慮ありたき旨を請うたもので、文中の「越前藩中云々」につきては次の鈴木主税及び吉田悌藏の兩人に寄せた小楠の書簡
二通を参照すれば其の事情が首肯せられる。

四四 鈴木主税・吉田悌藏へ

嘉永六年八月十七日

小楠在熊本
鈴木在江戸、吉田在福井

鈴木主税名は重榮、純淵又樂城と號す。福井藩の重臣で同藩の治績を天下の標準たらしめんとして藩政の上に規畫献策遺す所なく、江戸に在りては春嶽の左右に侍して内其の機密に參與し外は幕府及び列藩の名士と交り國家の衰運を挽回せんと謀り、幕府に獻策する所頗る多かつた。主税と最も交の深かつたは藤田東湖と長岡監物とであつたが、藤田・長岡も鈴木には推服してゐた。小楠も亦大いにその偉材なるを認めてゐた。

一書拜呈仕候。秋冷之砌、御兩家 上々様益々御機嫌能被遊御座、奉恐悅候。隨て御兩賢君愈御安祥に被成御勤、珍重之至に奉存候。然ば吉田君御狀早速相達、本多君・鈴木君七月十九日比に御國許御出立被成、吉田君は追て御出府之段、今比は其御地御着參と奉存候。天下の御大事此節に有之、天下の有志者捨身命奉公可仕時節にて、藤田・戸田も小石川に參り居候と承、定て御出會被成候と奉存候。老公様御出方に相成候ても擧朝堂頑固之俗論相かたまり、十の六七は和議之説相立、于今國是決定に至り不申と承り、扱々人心之果なさ何とも可申様無御座、深痛心仕候。大廣間等之御大名方は如何に候哉、甚以氣遣しく事に奉存候。何分累卵至危之地に候へ共天下有志者身命を捨相はたらき候へば、老公平生之御志相立、三百年來の因循宴安一時に打崩し、一新中興之大機會此節到來仕

候。就ては熊本有志者長岡監物を初小子輩一刻も早出府仕御一助と相成覺悟一ト筋に御座候處、兼て御承知之通此許之容體俗論頑固無限之至り絶言語一事共にて、一步も足出し出來不申慨嘆とや言はん悲痛とやいはん眞に哭泣之世界、御察し可被下候。因て同社中津田山三郎さし急ぎ出府仕候間小子輩念願之次第同人より得斗御聞届被成下、御配慮之處偏に奉願候。何分事情を御盡し被成敗事無之様御賢慮可被下、千々萬々願所に御座候。此段拜呈仕候。以上。

八月十七日

横井平四郎

鈴木主税様

吉田悌藏様

尙々吉田君萬一はいまだ御出府に相成不申難斗被存候へ共、御連名にてさし上申候。

天下の御處置夷人御返答之旨等此許同志建議之處津田より御聞可被下、何も不遠懸御目候様に罷成御配慮之程偏に奉願候。以上。
(松平慶民藏遺愛帖)

四五 鈴木主税・吉田悌藏へ

嘉永六年九月二十六日

小楠在熊本
鈴木在江戸、吉田在福井

一書拜呈仕候。先以 上々様益御機嫌能被遊御座、奉恐悅候。隨て愈御安康に被成御座、珍重之至に奉存候。然者先達て津田山三郎罷出、此許事情御聞取被下候事に奉存候。誠に以一大事之御配慮

を奉願奉謝之筋可申上様無御座、何分御仁憐之程千々萬々奉願候。扱吉田賢丈には御承知に相成居候薩州鮫嶋正介と申人出府仕候。此人非常之人材之上大有爲之志相抱き深内談仕申候間、何卒小生に不替様御咄合被成下候様千萬に奉願候。小生心事委細に正介承り罷在申候間、是又御聞取可被下候。此段轉書仕候義鮫嶋より縷々可申上奉存候。以上。

九月廿六日

横井平四郎

鈴木主税様
吉田悌藏様

尙々吉田賢丈は最早御出府之御事に奉存候。千里外晝夜考申のみにて、心中御憐察可被下候。極々いそがしく寸楮迄相認上申候。以上。
再白西依は拙塾に留置申候。以上。

(編者藏)

右二通の書面につきては、前記小楠より藤田東湖への書簡(四三)を参照すればその事情がよくわかる。

四六 吉田悌藏へ(追啓)

嘉永六年十月二十五日

小楠在熊本
吉田在福井

追啓

先達ては西依熊太郎罷出、就ては懇に被仰越候筋い才承知仕候。熊太郎事拙塾に留置段々咄合申候

處、此者何の志も無之例の俗人、書物讀にて却て塾中の害のみに罷成り甚く望を失ひ申候。とても此もの罷在候ては塾中色々煩敷事さし起り大に迷惑仕候間、引き取らせ申答に心配仕候。折角被仰越候事に候へばどふとぞいたし教諭仕、心得相立候様に十分力を盡し候へ共右之次第にていたし方無御座候。扱々當惑之至と奉存候。此段附呈仕候。以上。

十月廿五日

横井

吉田様

(吉田てる藏)

四七 吉田悌藏へ

嘉永六年十二月十八日

小楠在熊本
吉田在福井

一書拜呈仕候。上々様益御機嫌能被遊御座、奉恐悦候。隨て愈御安康被成御座、珍重之至に奉存候。先以先達は御書狀被成下候處何角押移不及貴答、失禮御海容可被下候。江戸表寸斗都合不宣と申内、近比同社中よりの申越には第一水府奸黨嚴罰、是にて、少は勢を替へ申候段珍重此事に奉存候。扱又拙藩浦賀固被仰付に付ては寡君よ程之開明之模様にて、^(長閑)監物へ急速之飛脚にて直書到來一藩之惣帥被申付、去る十一日に出發仕候。必竟尊藩初奉り諸方御配意故と奉存候。誠に以難有仕合眞に感涙に沈申候。就ては一藩人心兒童奔卒に至る迄大慶此事にて、御察可被下候。然處浦賀之固中々

大事にて、此節は彦根杯之様に夷艦内海に入れ候ては決て相成不_レ申、嚴重に防禦之道相立候策尤以大切にて、さし寄舟臺場にて防止め申外は有_二御座_一間敷と被_レ存、天下之公論如何と奉_レ存候。御見込之筋無_二御遠慮_一被_二仰越_一可_レ被_レ下候。小生も出府之心得に御座候處さし障り勝にて、此節は留守居罷在申候。賢丈如何に候哉、于_レ今御出府出来不_レ申哉、案勞仕候。藤田杯之様子大分動じ候様承申候。心事萬緒に御座候へ共何も先さし置、監物出府之事言上仕候。大に取紛罷在り、餘は後便に拜呈可_レ仕候。以上。

十二月十八日

横井平四郎

吉田悌藏様

尙々御全家様へ可_レ然奉_レ希候。岡田君其外様へも書狀さし出得不_レ申、宜敷御致聞奉_レ願候。以上。

(吉田てる藏)

安政元年

四八 岡田準介へ

安政元年三月十四日

小楠在熊本
岡田在福井

新春之御慶目出度申納候。御兩家 上々様益御機嫌能被_レ遊_二御座_一、奉_二恐悅_一候。御主家様彌御安康に被_レ成_二御座_一、重々目出度奉_レ存候。先以舊十一月廿九日之御書相達、忝拜見仕候。愈御安康珍重之御事

に奉_レ存候。隨て小生も無事依_レ舊罷在り、御懸念被_レ下間敷奉_レ存候。其御許御同社中彌御精業と奉_レ存候。此許相替不_レ申候。大分去冬來は進歩之人も有_レ之大慶仕候。扱去年來は御許光景專武之一字に參候由、就ては何角御配意被_レ成候と奉_レ存候。是は乍_レ憚當時之勢と奉_レ存候。必ず_レ御力落無_二御座_一様吳々奉_レ存候。此方に就てはい、才村田君列に別紙さし上申候、御一覽可_レ被_レ下奉_レ存候。

此許前條通り監物初彌以勵み罷在申候。青天は曇り候へ共一統は大分耳目をさまし申勢と相成申候。彌以助長等之病無_レ之様精々申談候へば御氣遣被_レ下間敷候。水府もよ程宜しき方に相向ひ、(結城守備等)姦物底は水に退轉いたし御父子様彌以御和熟、老公思召次第に被_レ行候段爲_二天下_一誠に目出度御事に奉_レ存候。是以此上御助長無_レ之寛々御心を被_レ用度千萬奉_レ存候。

御主人様御教導方の事被_二仰下_一、奉_レ得_二貴意_一候。柔順之生質は柔順に參候が一ト通り誰も心得候事に御座候へ共、小生了簡は少し相替り、猛勢にいたし度被_レ存候。尤猛勢と申候ても一がいにては無_二御座_一候。第一氣力を脩養いたし候が尤御大切に御座候へば、平生利害之心斷きり此道に打はまり候様に手を附參り度奉_レ存候。且又武稽は尤心體を養候事にて、劍鎗或は炮術二者深力を盡し修勵仕候方重々可_レ然奉_レ存候。彼の山野に狩し水におよぎ候様の事も重々肝要成る筋にて、別て御大家様にて御座候へば此武事は尙更御修勵被_レ成度存候。孟子浩然之氣の養を外よりいたし候には武事は重々良法にて御座候。左候へば筋骨も強壯に相成、夫よりして氣力も附候は存外之一助にて御座候、如何々々。種々御話之筋

御座候へ共舊冬來外邪にて打臥、明日飛脚相立候て數通相認申候間右迄拜呈、餘は春長く可申上候。已上。

三月十四日

横井平四郎

岡田準介様

(松平慶民藏「山澤文書」)

四九 荻角兵衛へ

安政元年四月七日

小楠・荻
在熊本

(荻の如何なる人物なるか
は二六〇頁の説明文参照)

拜呈仕候。近日は御出在と承り、最早御歸府に相成申たる哉如何と奉存候。私も昨日初て外出仕候。昨晝御雇着と承申候間二ノ丸(長岡監物)に參り申候處新堀(下津休也)に紙面參り居河内留守にて御座候へ共久馬・典次郎(下津休也)男(山形、休也の弟)に懸合見申候處、江戸之事情散々之成行。老公御引入就ては二ノ丸も浦賀總帥御斷之都合に相成、どふともこふとも可申様無御座、痛心之至に奉存候。依之隱居に急に歸りに相成候様昨夜人を立申候。何に今日中には歸りと相考申候。今夕は新堀にて御咄合申度存候間、御歸府にて候へば御出懸可被成候。此段拜呈仕候。以上。

四月七日

横井平四郎

荻角兵衛様

(長東保藏)

五〇 吉田悌藏へ

安政元年四月二十五日

小楠在熊
本
吉田在江戸(カ)

一書拜呈仕候。上々様益御機嫌能被遊御座、奉恐悅候。隨て貴家愈御安康に被成御座、珍重之御事に奉存候。先以春分は從江府御書狀被成下、忝拜見仕候。御母堂様御病氣如何被成御座候哉定て御甘快之御事と奉存候。折角御出府之處早々御歸國殘念千萬に奉存候。御甘快之上は再び御出府可被成、今程は御出懸に相成可申想像仕候。御許御同社中彌以御盛事と奉存候。此許相替り不申、無事に罷在候。諸君へも此節書狀さし出得不申、可然御傳聞奉願候。い才之事は別紙に相認置申候。先御見舞迄早々申上縮候。以上。

四月廿五日

横井平四郎

吉田悌藏様

別紙

水老公之御模様も實に意外に御座候、如何成行可申哉、案勞此事に御座候。田宮(彌太郎)えは御序に吳々宜敷奉頼候。甚以殘念に御座候得共天下之爲嫌疑をさけ候事に候へばいたし方も無御座候。以後御在府中相變候儀も御座候は、柳川之方迄御通路幾重にも奉希候。弊藩之方は阿閣・肥前兩侯より御引立被

一書を呈仕候。先以上々様益御機嫌能被遊御座、恐悅之御事に奉存候。次に賢丈御一家彌御安康に被成御座、珍重之至に奉存候。久々打絶書状も呈不申、御模様も相分不申、何角案勞之事共に御座候。御社中諸賢彌益御盛大之御事と奉存候。此許同社何ぞ相替不申無事に罷在申候。

小楠在熊本 吉田在福井
簡書のへ藏佛田吉りよ楠小
(藏るて田吉)

下候へば都合可宜相考申候。右之處は藤田へも頼置候事に御座候間、御含に申上置候。田宮杯も心に懸吳候様御頼被下候様祈申候。唯々何事も君上之御一心少しひらけ不申候ては御左右に人を入込候事も何分出來兼申候。其御志を被立候一段實に野生誠實薄き處より力におよび不申不忠之至恥入申候、何分御氣永く御力被添下候様奉希候。頓首。

同時

よそならず思へはいと頼なり心にかゝる御代の行末

御汲取可被下候。

至密。

(川喜田久太夫藏)

五一 吉田悌藏へ 安政元年九月二十日

小楠在熊本 吉田在福井

然ば兄左平太儀久しく相煩居申候處養生相叶不申、去る七月十七日に病死仕候。依之小生名跡相續願置申候處當月十四日に知行無相違番方に組入被申付候、此段御吹聴仕候間諸君へも可然御致聞奉願候。是迄浪人に決定いたし居、五十に向たる身分世事相勤候儀は眞以迷惑に奉存候。乍然人事之變態不一定事にて、今日は又今日之當然を盡し可申事に御座候。此段御吹聴迄如此御座候。頓首拜。

九月廿日

横井平四郎

吉田悌藏様

尙々時分柄御厭被成度奉存候。御兩親様御替り無御座御壯健に被成御座候と奉存候。乍憚宜しく奉願候。何も別啓に相認申候。以上。

別啓

近來は江戸表之事情一切分り兼申候處和議は彌以固まり候ものと被存候。然處老公又々御登營に相成候と承り、寸斗解兼申候。勿論今日に相成今更戦に被引返候事は事勢に於て出來申間敷、先和議は和議にして致し方無御座、旗下列藩之因循は是非共被引起度。廟堂之御主意相立候より、老公御出方に相成候筋にて御座候へば誠に目出度御事に奉存候。若又左様之根本に起り候にては無之、御備筋

御改正、軍艦・鐵炮等之御用意迄にて御座候へば夫は天下への御申譯にて、彌以困弊之筋に成り行申深
 勞心仕候。先達て藤田(中略)より監物迄紙面遣し候へ共さし控候故か一向事情申越無之、定て 尊藩へは御
 承知と奉存候間何卒御申越可被下候。扱又今日之事勢和戰之ニツは先さし置き 老公奉始 尊藩・
 尾公御一致之上は此道を明にする處に被盡御心一度御事に奉存候。然ば 老公は申上に不及 尊
 藩・尾公より列侯方に被對最早御遠慮は入り申間敷、脩己治人人道之大義理を御諭被成、御互に講
 學仕る處に參申候へば列藩も漸々起り立候御方も必定可有御座候。此講學盛に成候へば人才も上り
 弊政も改り士氣も起り可申、此外に何之手段も無御座儀と奉存候。必竟和戰之ニツを争しは今日に
 至りては不見識と奉存候。勿論又列侯御應對御遠慮は無益之御事に奉存候。此趣は先達て監物より藤
 田へも申越置候。いまだ返事は參り不申候、如何合點に相成申たるや。此講學之筋にて候へば 廟堂も
 さして御疑惑に相成申筋にても無御座候、如何御所存にて御座候哉、相伺申候。

惣じて和と云ひ戰と云ひ遂に是一偏之見にて時に應じ勢に隨ひ其宜敷を得候道理が眞道理と奉存候。
 既に墨夷に和を許候へば英夷にも何にも許さねば成り不申候へば墨夷に許さるゝ時に一決するが戰
 之道理なり。最早墨夷に許し大計を誤たるなれば今日之勢必ず和を絶之論は事勢を不_レ知と可_レ申か。然
 れば墨・英等之夷に處するは應接之人其人物を撰び道理之已_レざる自然之筋を以て打明け咄合、聊たり
 共彼が無理成る筋は論破いたし、又聞へたるは取用ひ、信義を主として應接する時は彼又人也理に服せ

ざる事不能、扱此上にも無理を申立なれば、不_レ得已戰に及候に我義也彼不義也、決して萬國を敵に取
 るの道理無之、是我が道を四海に立る國是に決し候へば今日に至り和戰之ニツを争事とは存不_レ申、定
 て 尊藩之思召此所に落着と奉存候、如何、拜聞仕度奉存候。様々拜話仕度奉存候へ共、此節は略仕
 候。以上。

九月廿日

横井

吉田様

追啓

別紙書狀相認置候へ共いまだ發脚無御座候内大坂之變申參り、扱々痛心之至に奉存候。去冬魯夷長
 崎に參候節交易之場所は大坂と申出居候へば極て此處に出候事と此許にて咄合候處、果して其通りに
 參り申候。下田は墨入込み、長崎は英、大坂は魯、各場所相極候ものにて、來春迄には北海にはフランス
 必定參り可_レ申、四方敵を受、如何成り行可_レ申哉。 廟堂御決定次第治亂存亡どふとも相成可_レ申、扱々
 かゆき所のかゝれざる事に御座候。 尊藩御處置承り申度奉存候。何様別紙にも拜呈仕候通り今日に
 至り候ては、内は講學を以て列藩君臣を一致せしめ、外は應對之人物を撰び自然之理を以て夷人之心を
 服せしむる此兩端内外之所と奉存候。此段追啓仕候。以上。

十月三日

横井平四郎

吉田 悌藏 様

(吉田てる藏)

五二 吉田悌藏へ (別啓)

安政元年十二月十日

小楠在熊本
吉田在福井(カ)

別 啓

水一條被_レ仰下、忝存候。余程開運之機と相考申候。第一 當公思召大替と申候ては何より以目出度御事不_レ過之と存候。此上は御登一條も決て御急ぎ無_レ御座候。彌以 御父子様御同心に御成り被_レ成、賢丈思召通り小人を責めず荒を包み大量を御修養被_レ成度奉_レ存候。左候へば小人反側を懷き候もの、心何と無く安らかに相成、漸々と思召之通りに參り可_レ申、當公角く思召御替り被_レ成候へば奉_レ始_レ老公_レ其外水風之大はやりの面々色々御手段を御附被_レ成候様に相成共_{トモ}いたし候ては又々塞り可_レ申、是は甚以氣遣仕候。岡田江戸_(詰カ)執に相成候段、此岡田は定て天狗黨と被_レ存候。今迄姓名も承り不_レ申、藤田能登守杯之様成る少しはやはらか成る人物にて御座候哉、萬一血氣派之一にて御座候へば此節大事之時に當り恐くは事を破可_レ申、如何と案勞仕候。兎角水府之所置は奸黨之者共恐懼之心を和げ諸君子憤怒之策をおさへ、一國之黨派何と無く波立不_レ申様に 兩公御心を被_レ盡候へば、御登杯は申に不_レ及根本之病消亡致、御開運に相成申事必然之勢と被_レ存候。如何々々。

十二月十日

吉 田 様

横 井

(山口透藏)

五三 伊藤莊左衛門へ

安政元年十二月二十三日

小楠在相模町
伊藤在津奈木

御紙面忝々致_レ拜見候。月迫に相成何角御多用と存申候。扱相願置候講徳永御申談じ一口御加り千萬忝候。御庇にて困窮を凌大慶此事に御座候。五十に迫老書生不_レ圖家督相續、大破の餘を受け誠に困窮の仕合、痛心御察可_レ被_レ下候。乍_レ然諸友の助にて無事に越年いたし大に仕合に存候。御手許もさぞかし御心配の事共に被_レ察、御互に迷惑なるは此俗事にて御座候。乍_レ去世話は十分の上にも届き候様に致さねば勿論なり不_レ申候得共、此一事より心を被_レ取候は扱も不_レ勇不_レ義之俗漢にて、我が輩は些_{スコシ}は高尚なる人物と自讃いたし候。御一笑可_レ被_レ下候。

一 四郎弟事御申越、且白鹽焔製方の事致_レ承知候。是は來春四郎出府直と事情承り候上にて無_レ御座候ては御天守方に内談出來不_レ申候。左様御承知可_レ被_レ下候。當冬は熊本御家中町何も殊の外困窮、且在中何方も不_レ怪詰まり、困窮の聲のみ承り、扱々心外の至に御座候。御許御同様の由氣之毒千萬、御心配と存申候。何も來春日出度萬々可_レ申述、先此段拜復申縮候。已上。

十二月廿三日

莊左衛門様

平 四 郎

尙々乍末御大人様に可然御傳致可被下候。困窮は勿論に候得共、家内無事何も申分も無御座。越年いたしは大に悦申候。御許も御同様と拜賀々々。

(渡邊季基藏)

安政二年

五四 立花壹岐へ

安政二年三月二十日

小楠在熊本
立花在柳河

三月八日之貴書忝々拜見仕候。先々先頃は御枉駕被成下厚忝候。然し何之風情も無御座。恐入候次第に奉存候。御出立には無余儀用事にて罷出も不仕、御無禮御海容奉希候。扱池邊君も十五日に御出府重々目出度奉存候。御許彌以御盛事之段珍重此事に奉存候。頃日は鮫島歸り池邊君兄弟御出會之段藤左君よりも御申越に相成申候。此許にも一兩日は滯留、拙宅にても寛話仕候。段々江府之事情も承り申候處不_二相變_一依然たる光景痛心之至に奉存候。水老も全く和議相唱へ被成候段鮫島咄にて承り、(水戸齊昭) 同人も重々同意にて老練之見識と申事に御座候。已に去春和に決し候は全 老公御一言と申事にて、梁

川星巖杯甚殘念がり申候は不見識と鮫島は申候。私杯は依然たる舊見、今日に至り候ては彌以其心得にて、竊に天下之勢を見候處朱子之所謂天下之正義不破_二流俗_一而破_二君子之私心_一と申は中々名言と奉存候。扱々不_レ及_二是非_一事に御座候。必竟は水府之學一偏に落入り天地之正理を見不_レ申處より、其流義之大節義を却て失ひ候様に罷成り恐敷事に御座候。和漢古今之事を吟味いたしても能く知れ申候。恥を忍び和を乞候て扱後日に中興仕る事は決て無御座候。且古今聖賢之論一として是を是といたし候事は無御座候。是全利害之私心にて實に慨嘆之至に奉存候。總じて水府如_レ此上は天下知名之士大抵は是に付應いたし鮫島同様に罷成、不思議成る了簡に變じ智術之計策を尊び候様に成行くは此學根底無き者_(三、四字不明)□□にて御座候。如何被_二思召_一候哉。今日は今日にて候へ共後日筆を取り候者水府を如何書き可_レ申哉。義公以來之節義も水之泡と相成可_レ申候。譬へ今日勢彼に敵し不_レ申、水府を始天下有志者正氣之下に敗死いたし申候ても少も不_レ苦事に御座候。其正氣に感じ後の人必中興仕る事は必定にて、我が身の私を見る處にては無御座候。先頃も拜話仕候通り天下知名之士は非常之折柄は却て利害を挟み何之役にも立不_レ申候事は後漢の末杯にても相知れ申候。中興之人は一向に名を知れ不_レ申存外之人物にて御座候。此處は御互に重々可_レ恐事にて、實に心肝に銘し百回も自省不_レ仕ては難_レ叶、深く私心を去り本來固有の正心を守り天地の大義を聊たりともは_(二字不明)□□付け不_レ申、成敗は見る處にて無御座候。然ば今日之一言深く慎み大道を堅守仕外は無御座候。何分御考可_レ被下候。萬縷御座候得共拜復迄

仕候。以上。

三月廿日

横井平四郎

立花壹岐様

尚々津留君へ可然御致聲奉希候。其外諸君へも同様奉願候。

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

五五 伊藤莊左衛門へ

安政二年八月十日

小楠在沼山津
伊藤在津奈木

德永歸郷にて一書致拜呈申候。御全家愈御安康珍重之御事に御座候。拙家老少相替不申御懸念被下間敷候。轉宅以來は次第に有附き致大慶申候。將又老後一男を得大慶此事に御座候。一昨日里方より歸り母子共に安穩に罷在申候。御家事御心配之段何角想像いたし候。酒之方うれ申候哉、さぞ御痛心察入申候。兎角御家も難事多く、此上の處喜十・四郎の二子彌以一致に相成り御世話に候へば凶も吉と成り禍は福に變可申候。此處吳々祈申候。江戸表の事長崎の事等は兩德永より御承知と存じ、略いたし候。此許も何ぞ相替り申儀は無御座候内鐵炮は大分都合宜しく相成申候。此許銅山も官府申談、近日より取り懸り申筈と存候。在宅以來は誠に閑散にて心事寛りと有之、時々詩杯も作り申候。近作定て郡太寫し歸り候と存申候。今朝德永歸り折節來客にて早々に筆を取り申候間拜復迄いたし申候。餘は

後雁に呈可申候。以上。

八月十日

平四郎

莊左衛門様

尚々鹽いわし吳々宜敷御頼申候。山崎不破方が返て都合宜敷、御遣し可被下候。以上。

(淇水文庫藏寫本)

五六 立花壹岐へ

安政二年九月十七日

小楠在熊本
立花在柳河

八月十六日之御狀先日到着、將又昨日之御狀今晝到着、忝々拜見仕候。先々秋冷之砌、愈御安泰に被成御座、珍重に奉存候。然ば池邊氏御往來之御扣寛々と拜見仕候。何も扱置同氏御苦情之至り實に想像仕候。幕府 尊藩御事體臣子疾痛之至り、兎角之申様無御座候。然處此節御知せの御狀にては天下之有様も聊打替り候ものと被考、愁眉を開き候方かと奉存候。老公御出處之高論至極御同意にて、此節は嚴斗御建言に相成御さしはまり御政務筋御改正に相成候か、左無くては御出無之方に御決定候か、何れ兩端之御處置に候はでは徒に閣老之使令に御成り被成候迄にて天下之大權は二三之閣臣に有之實に何之益も無之、如高諭一條三條之美事有之候ても天下に對しての申譯にて、根本之處は依然たる舊習面目却て弊害と奉存候。惣じて今度之 老公に被仰渡海岸防禦御軍制之一筋にて、御

政務之筋は御相談之筋も有^レ之との御辭令は打^(不明)し考候へば^(矢張の意)表向之事にて 老公を深御信用と
 は見へ不^レ申、主は御手許に有^レ之客として 老公を御用被^レ遊候御事情と奉^レ存候。此御事情にては中々
 老公御力を被^レ盡候筋には相成申間敷、扱々残念に奉^レ存候。何分如^ニ高喻^ニ十分に御建言被^レ成、兩端之落
 着重々至極之御所置と御同意奉^レ存候。將又近々簡易之筋に御革正藩々武備之虛實御吟味之被^ニ仰出^ニ、竊
 に考申候處簡易と云は諸大名御官位御伊達道具等を御取り除け或は大節儉位之御處置にて中々今日
 之有様に相成りさしたる關係には相成申間敷、追々御講論之根本之地に基本相立候筋とは見不^レ申候。
 藩々武備之虛實是又外之事にて、諸藩君侯之御心打替り弊政引改人才舉用之筋とは至り不^レ申候。大炮
 坏製造訓練等行れ候迄之筋と奉^レ存候。是等は今日に至り江戸表西洋法坏之訓練盛に行れ候勢に候へ
 ば、諸藩も其流行に従ひ今日之習弊人物にて申譯之仕事に仕る事に候へば中々藩々士氣之振興は決て
 出來不^レ申候。徒に軍用意迄に落着仕り、萬一其場に至り必定敗軍は相違有^レ之間敷、近比夷人之情實種
 々及^ニ吟味^ニ候處中々以前一ト通り考候とは雲泥之相違にて實に恐敷事に御座候。勿論兵端さし迫り候
 筋とも存じ不^レ申候。遠大深謀之所存にて尤邊地坏を亂暴侵奪坏仕る者共にては決て無^ニ御座^ニ候。委細
 は火急に認は出來不^レ申候、不^レ遠言上可^レ仕候。好き筋に相成候へば好きに付て愁は相増し、天下への註
 文は山よりも多く海よりも深く、偏に根本より起り不^レ申候ては一向に嬉しく心底には相成り不^レ申候。
 扱々志士之苦心無^レ限之至に奉^レ存候。

池邊君水戸^(貞田)・藤之^(藤田)二氏御深交重々大慶此事に奉^レ存候。藤田^(貞田)小生を一筋者と心得候段重々尤と一笑仕
 候。

池邊君御留守居之選舉是は甚笑止千萬、大に氣遣仕候。何分御力を被^レ盡度千萬奉^レ祈候。 尊藩御内情
 御苦情千萬に奉^レ存候。他はどふでも宜く。 君公御一心迄にて此間に晴陰有^レ之候ては何も六ヶ敷實に
 案勞申上候。乍^レ然年内中には御模様打替り可^レ申候。基本確立仕不^レ申候ては好きも頼まれ不^レ申惡も捨
 られ不^レ申候。徒に波浪にゆられ候舟の心地仕候。御老中始諸役人打替り候段是は重々恐悅に奉^レ存候。
 姓名承り申度御知せ奉^レ願候。
 池邊氏御往來之御扣は返上仕候。
 池邊氏へ書狀さし出候筈に御座候へ共此節は火急にて出來不^レ申候。何れ不^レ遠相伺可^レ申候。何も大略
 奉復申上候。い才は後便に萬縷呈上可^レ仕、早々頓首。

九月十七日

横井平四郎

立花 大夫

膝 下

尙々長州君御歸國御安康に被^レ成^(柳澤家老十時慶門)御座、珍重御事に奉^レ存候。將又主計君より頃日御出之節御書狀
 被^ニ成下^ニ、忝々奉^レ存候。兩大夫君に此節は奉呈不^レ仕候間宜しく奉^レ願候。小生も無事に罷在日々小兒

被_レ成候半實に笑止に奉_レ存候。然ば此一所の違と申は全躰心術の大違にて決て天下第一等の事を被_レ成行_レ候御心底とは存じ奉らず、成否の上より見候半却て小人之邪氣に觸れ事を破に至り可_レ申候。是を以成否は天也と御心得被_レ成候は、甚以御了簡違と奉_レ存候。惣じて正大明白と申も眞僞二つ有て、世之所謂慷慨者抔は唯一偏に事を爲さんと欲し無理有理をわきまへずしてひたすら其事を遂げ得んと懸り候は、是其人不见識なるのみならず、其心術專に功名之上に馳候て義理正大之筋を表に押立候輩にて、事こそ替れ戰國山師者共と同様之輩にて今日に於て深く恐るべき事に有_レ之候。此種之僞物にこり正大明白之道をいやり候は必ず水府に限り不_レ申、公に天下老練之士之通患と奉_レ存候。將又水府に於ては舊年之禍亂に御こり被_レ成一鹽此病深癩いたし、深く残念に奉_レ存候。

一 老公諸大名を御誘掖無_レ之所御高論御同意に奉_レ存候。是則前條心術之御曲にて、成否利害之上に御心有_レ之候間此一條尤以御憚り被_レ成候。只今之御心術にては譬諸侯に御手を被_レ付候とも極々之隱密にて、或御内狀御遣し被_レ成候か又は殿中杯にて隱語等之御咄有_レ之かの御智術に出申候。既に此筋の事は二三ヶ條之其證據有_レ之却て人心を御失ひ被_レ成候。其事又世間に流布いたし候。智術之益なきのみならず可_レ恐事如_レ此明白に有_レ之候。天下之事は 幕府に有_レ之、幕府之事は 老公に有_レ之、今日之天下大根本之御身にして如_レ此之御心術之曲は誠に頼み無_レ之事に奉_レ存候。池邊氏之御見識は此御心術を見被_レ申候にては無_レ之かと奉_レ存候。然ば如何に列侯を都させられ候様に御建白に相成候とも中々御取用

には相成申問敷、譬御得心候とも御誘掖之筋前條隱密之御手段に出候て正大明白に押出され候には參り申問敷、残念至極此事に奉_レ存候。要_レ之水府之君臣人傑之天授に候得共、如_レ此心術之曲は必竟學問之偏所より出候事にて深大切に奉_レ存候。是等之愚存も藤田存生に候へばどふぞ一度は、届度罷在候處、此節之落命實に力を落申候。最早誰に向て心中を盡可_レ申哉、誠に寂然たる光景に奉_レ存候。

一 老公此節之御出現に付て池邊氏に御申越條々之内、水府之見一所破れざる所有_レ之、罪を公邊に懸け自分隱然として顯不_レ顯之病御座候。此所長大息之御説至極御同意に奉_レ存候。先頃も津田山三郎紙面遣し、専公邊御誠意無_レ之所を嘆息申遣候。小生は左様のみ存じ不_レ申候。勿論諸閣老大權を 老公に被_レ讓候筋には勢決て參り不_レ申候、其罪有_レ之は申迄も無_レ之候。然るに 老公に於ては御心中を奉_レ察候天下之大權を御一人に御引受被_レ成候共、天下之急危を御一身にて御救被_レ成度との御志は恐は薄く可_レ有_レ御座候。やはり諸閣老と共に天下之事を御謀被_レ成、誰主に成り申もの無_レ之所に御心有_レ之候と奉_レ存候。然る所以前條申候通り利害の御心主に相成候故、御一身にて天下之目的目に御當り被_レ成候事實に深く御避被_レ成候御心中と奉_レ存候。然ば 廟堂 老公を御專任無_レ之と遺憾は天下有志士之念願にて、水府の老練家は却て是を深く恐れ候事情と奉_レ存候。池邊氏よりも何共天下に先立候處何か遠慮有_レ之、又は山之絶頂に登り上りも下りも出来不_レ申様之勢と申參り候。池邊氏は津田同様やはり罪を 廟堂に懸け專に御任用無_レ之其名ありて其實無_レ之虎に騎之勢と見被_レ申候得共、是は例の水府之智術にて進退

固窮に見を懸け候て、天下有志者の責をのがれ申所にして、是則心術之曲御誠意之立不_レ申所と奉_レ存候。此隱微に至候ては天下之有志者恐らくは見破申問敷、水府之術中に落入罷在候は残念に奉_レ存候。

一 惣じて人道は知識を本として致知力行之養を以て磨立候は第一大學之教明白に有_レ之、申にも不_レ及候。去れば中庸に申候通り自明易誠が自然之道理にして、何事に處候ても我が了簡明白に有_レ之聊も疑惑無_レ之筋に候へば我が心も能其事に一途にはまり他念無_レ之候。其はまり候心が則誠にて、此外に別に誠と申心は無_レ之候。水府君臣御身に於ては伊尹之所謂我は天下之先覺なる者也と申御任底之御心に御譲可_レ被_レ成様は無_レ之候得共、必竟御誠意立不_レ申しては天下之經綸綱領條目本末緩急之次第に至る迄分明一定之大聰明無_レ之よりして、自然は利害之心に御引落され被_レ成候と奉_レ存候。將又此君臣之御令名天下に轟人才響望_三泰山_一の如く有_レ之、御應接被_レ成候へば何も御下風を仰ぎ御一言をも難_レ有奉_レ存候位にて、誰ありて一人寸鐵をつき立候者無_レ之より自然御氣高に相成り、天下之人才は我一人と君臣共に被_レ思召_一候は、無_レ餘儀_一勢とは申ながら今日御心術の弊病と相成り、御聰明を塞ぎ候筋と奉_レ存候。其故天下之人々御求被_レ成候御心は一向に見へ不_レ申、天下之人才愛せられ候も御使令被_レ成度御心に出申候。扱々残念之至に御座候。

一 夷變以來 廟堂御所置之失策、彼の十三條約定を初として大抵は國躰を辱候事のみに候得共、是は泉州・伊州初諸當路流家之仕事にて、老公被_レ成_三御座_一候得ば天下之有志者此 公を頼に罷在候故

心膽を落候に至り不_レ申、今に至り 老公御處置天下之人望に叶不_レ申下等之失策に共出候ては最早何之頼も無_レ之、必定人心瓦解可_レ仕、自然々様之勢にも相成候ては天下之事再び爲すべからず甚以憂勞いたし候。其故小生はひたすら水府を氣遣ひ笑止にも存候、日夜心を苦申候。水戸君臣に此一點之赤心は通じ申度事に御座候。

一 今日之 廟議高論の通り大節儉之事・武備を嚴にする事・糧食を貯事此三條に出に相違無_レ之、是を以て富國強兵の實政と相心得候は誠に嘆息之至に候。全躰天下之事第一等をさし置き二等三等にて行候事は古今其例無_レ之、高諭一々敬服仕候。誠に此三條を申候へば節儉も武備を嚴にするも糧食を貯るも事は相替り候得共同じ節之仕組にして、全く表向之事に御座候。今に列藩君臣依然たる舊面目之人物にして大節儉行れ可_レ申哉。武備を嚴にするの實事行れ可_レ申哉。糧食之貯行れ可_レ申哉。一日百回の號令を被_レ出果は刑罪をいたし被_レ威候とも、其君の心も改り不_レ申候其臣之不肖も替り不_レ申候て何之實事か行れ可_レ申か。徒に責を塞て表向之手數迄相成り候は必然之勢と奉_レ存候。將又今日窮乏之列藩にて強て大砲を鑄り軍艦を造又は糧食を貯候へば其勢民に取らざる事能はず、忽に民百姓之大害と相成り候は是又必然之勢にて甚可_レ恐事に御座候。惣じて是等之拙議は 廟議必竟江戸一府之事に心有_レ之、天下列藩に懸りあまねく治平を求むるの心無_レ之故、天下之事情を得られざるに出候事にて、誠に笑止に奉_レ存候。

一 列藩君心を御誘掖御感動被_レ成、列藩各其弊政を改君子用ひられ小人斥られ、一新改正之治に向候様に御配慮被_レ成候事は今日之第一御急務に候は高論之通重々御同意に奉_レ存候。然る處此外第一之急務有_レ之、尤今日之大切成るは天下之人才を江戸に被_レ召寄_一候事にて有_レ之候。總じて天下人々望を懸け重んじ候所は人才之在る處に有_レ之候。人才 朝廷に有_レ之候へば 朝廷重く、野に有_レ之候へば野重く、江戸に有_レ之候へば江戸重く、水府に有_レ之候へば水府重く、尊藩に有_レ之候へば 尊藩に向望いたし、拙藩に有_レ之候へば拙藩に向望致、皆其有る處に人心は向望いたし候ものにて是自然之勢にて候。然ば今日之大急務之御處置、天下人才之悉名顯候者總て江戸に被_レ召寄_一、天下之政事當今之急務御誠心を御打明し、老公を初諸閣老三奉行に至り候迄貴を忘て御講習被_レ成候へば天下の人言を求め天下之人心を通じ天下之利病得失を得候事は此一舉に有_レ之候。勿論其人々相互之講習討論は尤盛に行れ面々所見殊候共、遂には一本之大道に歸し可_レ申候。是則舜之開_二四門_一達_二四聰_一之道にして天下之人才と天下之政事を共に致し、公平正大此道を天下に明にするは此外に道は無_レ之候。勿論一國之執政大身たり共少も無_レ御遠慮_一被_レ召寄_一候は當然之御事にて、扱其正義議論は現實に御政事に御施行被_レ成候へば、列藩深猶之俗說弊風自然に氷解いたし正大之風に變化いたし候は不日之勢と奉_レ存候。是其大略を述候事にて精細の事は略申候。

一 地震大火に付て御高論中在府大名御歸國并に奥方御女中國に歸され候事一々御同意に御座候。

一 此機會に因て御旗本之面々江戸二十里限り在宅せしめ、江戸へは勤番交代之事。
一 江戸市中之者江戸生之外總て其國々に歸可_二申付_一、町奉行より精々吟味之上公領は御代官私領は國主・郡主受取て夫々家産に付しむべき事。

但大丸・松坂屋等之諸國之豪商共たな見せ一切停止之事。

一 御城御女中總數壹萬餘人と承申候。古後宮三千と申候得共三倍にも至り弊事之第一にて、此節御女中盡く歸家可_レ被_レ仰付_一、是閨門よりして政を一國天下に推及すの第一之御所置にて有_レ之候事。
一 大將軍家御城御出に相成何方にても御陣中之御住居御政事被_レ聞召_一、是古人非常之變に所する所_レ謂郊に慮する御處置之事。

一 諸大名家屋一切破却、在府中小屋住居之事。

一 諸大名以來は一年に百日之在府にて、往來は出陣之格にて參勤之事。

一 大坂を初豪家之輩諸大名之借金十ヶ年疊置候事。

右之條々御改正に相成候へば江戸内之人數十之六七は省可_レ申、將又天下列藩無用之費一時に相改り、今日之大貧國を變じ大富國と相成候は三年を不_レ待して掌を返すよりも易き事に有_レ之候。

十一月三日

(小楠遺稿)

安政三年

五八 立花壹岐へ

安政三年五月十五日

小楠在熊本
立花在柳河

一書拜呈仕候。梅雨之候愈御安康可被成御起居、珍重之至に奉存候。先以爾來は打絶書狀拜呈仕り不申御無沙汰に打過申候。然ば三月末に候哉御家老職被蒙仰候旨承り眞に以珍重之御事、爲此道爲邦家奉敬賀候。天下列藩衰運之末季大抵何方も士君子閑地に届し候内、執事此節之御登用は聊有志之士は深大慶仕、大に望を懸け候へば關係尤も大に有之、決して尊藩一邦之御事のみにて無御座候。就ては小生十餘年來之御親交、別て懸念罷在候へば中情不能不献一言候。舊見之腐廢恥しく候へ共御用捨可被下候。先日池邊氏御取遣に相述候所謂一徳即國是、國是即一徳二ツ無之の書は自然は御一覽被下候と奉存候。和漢古今明君賢主と奉唱候御方必ず其時之人才は御登用被成候へ共、始終御信任君臣一徳と申候は未曾無之事に候。是其人君之不明たるは申迄も無之候へ共、其君子も又不明の過り免れず候。如何となれば古之聖賢は殊に出處之間を重じ、其君心明白確定萬一も動かざる所を見届されは決して身を出し不申候。即伊尹之於成湯、傅説之於高宗、太公之於文王、或は武侯之於昭烈の如き其初相遇之際君臣始終之一徳既に相定候故身を出候て、如彼天下之大事を成就し得候事

に候。後世之賢人君子と被稱人元來三代之道に明らかなり不申候。君臣一徳國是一定にあらずしては邦家之大事は決して成就し得ざる事を實に眞知いたし不申に因て容易に身を出し候のみならず、其初君之誠心を開導し國是之大本を定るに心力を盡すことあたはずして既に政事の上に取り懸り或は號令制度を出し或は改正之新政を爲し紛々多事に候處、元來其君心とは契合不仕候へば民心に徹する所其君之政事にあらずして其執政之政事にて有之候。是其民心を感動すること不能のみならず却て民心を失ひ候は必定にして、又終に疑を其君に取り國事を誤り候に至り候は古今有爲之人傑之通患にて有之候。且夫君子いまだ位を得ざるや當今之弊事を見て日夜心を傷しめ、流俗之物議に觸れて不平を起さざることを不能感慨無量許多之愁苦不可言狀黄山谷所謂一日十二風波時、朱子所謂志士心腸百回斷、然るに一旦登用を得る自非聖賢功名之欲動かざること不能、於是本をさし置き末に懸り候は其勢然らざることを不得、是後世有爲之人傑道を失ひ天下國家を誤候所以に候。執事以爲如何。方今天下知名之諸君子平生此道之正大を唱、其趣向大に流俗に異が如に候へ共或は事變に處し或は登路に當り候へば等之道はとも行れ候事にて無之、聊今日を小補するに志し不覺俗見に落入平生之言總て地を拂ふに至候。是其立志三代之道に無之候故所謂古今天地人情事變之物理を究ず格物之實學を失ひ其胸中經綸全く無之、扱現實之大事に當り候ては茫乎として其所置を得ず、既に事理に明ならず何を以て君心を開き同列有司之人を導き可申哉、俗見に落ざること不能は當然之事に候。朱

子云士君子壯年盛氣未_レ得_レ志也感_レ憤時事_一如有_レ爲者大與_二流俗_一異、一旦得_レ志潰_レ方爲_レ頑自以爲_二識見_一、深悔_二往日之正議_一可_レ笑之甚。水府君臣覆轍目前に有_レ之、執事以爲_二如何_一。

天地之間第一等之外二等三等之道無_レ之、此處真知いたし不_レ申候より或は政事之末に懸り或は小補之俗見に流れ 其尤甚しきに至り候ては全く利害之私情に落入、却て士君子之正言讜議を拒絶いたす様にも相成可_レ恐之至に候。古人真に道を知り候人は決て第二等に落し不_レ申、必ず第一等を成し行事にて有_レ之候。其第一等と申は夫之君臣一德國是一定之所にて有_レ之、夫故古人は深く出處進退を重じ動れば身を退候は道之行るゝと行れざると事の成ると成らざると義理利害明白に徹底仕候故、其進退にて國家之治亂と相成申候。一國第一等之人才用られ候へば必ず第一等之治を爲すべきことに候。若其勢不_レ可_レ爲候へば身を退き道を講じ天地之常經を立る事に候。第一等之人被_レ用候て第一等之治を爲すこと不_レ能又身を退ること不_レ能、是を知道之君子と云ふて可ならんや。執事以爲_二如何_一。

右三條其實は一條に歸し特に過言之至に候へ共、古人相警戒する時は勿_レ習_二丹朱之傲_一とも申候へば不_レ顧_レ憚建言仕候。其外經國之事に於ては執事平生之思召拜聞仕度、其上愚存拜呈可_レ仕奉_レ存候。二十年來天下之知名之諸君子平生頼みに存候面々事變後之光景は總て利害俗見に落入候は御案内之通に御座候。誰之歌にて候やらんはかなきものは人にぞありけりと申如く實に嘆く可き事には候はずや。去れば今日心を述べ思ひを盡す人は執事と池邊氏にて候へば心之底をた_レき、止まれざるの誠を盡す小生一

片之孤忠御察可_レ被_レ下候。他は萬事略仕候。以上。

五月十五日

横井平四郎

立花壹岐様

尙々徳富太多助 尊藩に罷出、池邊氏御高話拜聞仕候間一兩日は留在可_レ仕、御返書奉_レ待候。以上。

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

五九 伊藤莊左衛門へ

安政三年七月十三日

小楠在沼山津
伊藤在津奈木

烈暑甚敷御座候處御全家愈御安康珍重之至に御座候。拙家も老人始め相替不_レ申御安意可_レ被_レ下候。扱四郎弟歸りに刀拂之儀相願候處御心配被_レ下、いまだ可_レ然相手も無_レ之、就ては三百五拾目之處御取かへ被_レ下御厚情忝々拜謝難_二申盡_一御座候。あり様當月は先代三年忌にて盆仕舞誠に困窮に御座候處御蔭にて苦界を逃れ大慶此事に御座候。御家事も此節之拜借にて御都合宜しく御座候段何より悦入申候。此上隨分御心配有_レ之度重々祈申候。此段迄さし急ぎ拜復いたし候。何も後便追々可_二申述_一候。以上。

七月十三日

平四郎

莊左衛門様

(洪水文庫藏寫本)

六〇 立花壹岐へ 安政三年十一月十日

小楠在熊本
立花在柳河

當月七日之御書狀忝々拜誦仕候。時節御安泰に被_レ成_二御勤、珍_レ重之御事に奉_レ存候。被_二仰下_一候次第夫々拜承仕候。

御國情一條昨夜より池君御咄巨細承り、誠御苦心之程奉_二敬思_一候。隨て□□_(欠字)之了簡得斗池君に御咄合

申候間、御同人より御聞可_レ被_レ下候。□□_(欠字)は長州君御出方は最以大慶仕候。來春は西東御引分れに相成

候へば大に御都合宜しく、將又後之權臣退付坏は案外事にて全御利運之吉兆奉_レ賀候。池君侍讀思召之

趣御同人之所置い才に拜聞、よ程及_二詮議_一申候。然處是は池君之所置穩當かと奉_レ存候。江戸より御都合

次第に御呼登、行先之爲甚可_レ宜御事情と奉_レ存候。い才は御同人より御承知可_レ被_レ下候。來春御出立前

には何分拜謁いたし度、どふなりと都合宜しき様御斗ひ可_レ被_レ下候。

池君一晝夜之咄合久振に面白覺申候。老生近況無異に罷在り、心事萬緒池君より御聞可_レ被_レ下候。是迄拜復仕候。以上。

十一月十日

立花 壹岐 様

横井 平 四 郎

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

六一 吉田悌藏へ 安政三年十二月二十一日

小楠在熊本
吉田在福井

一書拜啓仕候。御兩家 上々様益御機嫌能奉_二恐悅_一候。隨て貴家被_レ成_二御揃_一御安康奉_二拜賀_一候。先以

七月十九日御認之御狀遲着仕忝拜見仕候。被_二仰下_一候次第御厚情之至。小生よりは誠に法外之御不沙汰

に罷過幾重にも御海容之程奉_レ希候。如_二高諭_一天下之大勢變動いたし、行末之勢も最早前致され何に

高枕仕事に奉_レ存候。扱他はさし置、鈴木君御不幸先達て柳川より申來誠に驚愕之至絶_二言語_一申候。既に

一書を呈し御吊詞可_二申上_一心得に罷在候處、此節之御書狀にて細々之御模様承り、本多・淺井兩君を始

連々之御不幸何とも可_二申上_一次第無_二御座_一候。御一藩之御運のみならず實に天下に關係いたし申候。賢

兄御心中奉_二察入_一候。將又水府二田_(戸田・藤田)失亡無_二是非_一至にて、角有名之面々不幸も天運共にても御座候らは

ん心細き事に御座候。藤田へは段々意見申遣候筈にて、既に草稿相認罷在候中凶變相聞、別て残念に奉_レ

存候。二田失亡いたし候ては水府に申遣候相手無_二御座_一、意見狀も其儘にて封じ置申候。來春にも相成候

へば清書等も仕り御手許へ差出、思召も承り可_レ申候。尊藩建學世上に專御盛事を唱候事と相聞、追々

仰山に承り聊不審に存居候處、此般之御書狀にて何も安着仕候。村田君より被_二仰越_一君上御會業等御

相手に御出被_レ成候段誠に大慶千萬に奉_レ存候。君上御見識彌益御長進被_レ遊候と奉_二存上_一候。恐多申

上事に候へ共兎角三代之象を御養ひ遊すては後世之學に落候間、書經坏は御平常被_レ遊_二御精讀_一、自然に

堯舜之氣象御うつり被_レ成度御事に奉_ニ存上_ニ候。三代以下之氣象にては決して天下之治化は出来不_レ申、此處に於ては尤以御大切に奉_レ存候。尊藩御同社中來春にも至り九州筋長崎表等之事情御見聞として御出し方は被_レ爲_ニ出来_ニ間敷哉。左候へば拙藩にも暫御到留、近年聊存じ付候筋等御咄合申度願望に御座候。心緒萬端書中に付盡し得不_レ申、先奉報迄仕、餘は春風寛々可_ニ申上_ニ候。以上。

十二月廿一日

横井平四郎

吉田 悌藏 様

猶々時節御自愛被_レ成度奉_レ存候。小生轉居被_ニ仰下_ニ忝奉_レ存候。一昨秋家兄病死、甥共弱年にて不_レ得_レ止家督相續仕候。近年種々之病災等にて家事甚不如意罷成、城東二里之地沼山津と申所に轉居仕候。其後一男兒を得悦び罷在候内去冬夭亡、引續十日餘にして妻死去、誠無類之不幸御憐察可_レ被_レ下候。沼山津は山水之佳勝地にて塵俗之累も無_ニ御座_ニ、日夜同社と講學迄に罷過申候。尊藩之御事は日として御噂不_レ申は無_ニ御座_ニ候。二三輩は聊進候者も有_レ之樂申候。前條御同社九州御出方は吳々御配意被_レ成度、左候へば極て博文之御一助と奉_レ存候。別て小生一社御待申候事に御座候。

別 紙

御大人様去十一月五日御遠行被_レ成候段誠に以驚入候御事奉_レ存候。於_ニ賢丈_ニも先年御子息様御失ひ被_レ成、此節之御不幸連々之御事にて御心中奉_レ察候。

御老母様御病後彌益御壯健に可_レ被_レ成_ニ御座_ニ候。愚母年明候へば七十に罷成り、近年色々病氣打重り餘程弱り候へども兎や角と仕り罷在申候。知命之年に至り老親御座候は誠に仕合にて、來春は賀祝仕等に御座候間、御閑暇之折御高吟被_ニ成下_ニ度重々奉_レ願候。以上。

十二月廿一日

横 井

吉 田 様

(小楠遺稿)

六二 村田巳三郎へ

安政三年十二月二十一日

小楠在熊本
村田在福井

村田は名は氏壽、號は文峯又は慧堂。福井藩士。嘉永六年米艦の來航に際しては精銳五十人を率ゐて江戸に出て銃砲隊の訓練に従事し、米艦再來に當りては同艦探偵役を命ぜられ、能くその任務を盡くした。安政三年には明道館訓導を命ぜられ藩侯文事の相手をしてゐたが、同四年小楠招聘につきては春嶽の内旨を齎して熊本に來り小楠をして應徴せしめた。その後橋本左内と幕府儲嗣問題に奔走し、元治元年堺町御門の變には監軍として諸兵を指揮し、敵彈に傷づいたが戦功あり。慶應三年慶喜の大政奉還に關しては春嶽の意を承けて斡旋し、戊辰の役にも戦功があつた。

一書拜呈仕候。先以 御兩家 上々様益御機嫌能_レ遊_ニ御座_ニ、奉_ニ恐悅_ニ候。隨て賢契愈御安康に被_レ成_ニ御入、珍重之至に奉_レ存候。然ば七月十五日御認之御狀當月に至り到着仕、忝々拜見仕候。縷々被_ニ仰越_ニ候趣忝く、小生よりは久々寸紙も拜呈不_レ仕、御無禮御海容可_レ被_ニ下_ニ候。

横井小楠遺稿

天下之形勢一變いたし、東地震動水藩二田失亡彼是御慨嘆之段、誠に御同情に奉_レ存候。夷變以來は別て心を潜め天地之情勢を默觀仕候へば、三百年にも及候太平之人情一旦義氣に發し兵亂と相成候は決て無_レ之事にて、必ず苟安姑息無事太平に歸し候は自然之勢とも可_レ申哉。今日と相成り候ては更に前日之所置を以て議すべき事とも存不_レ申、今日は又今日之所置大に有_レ之事に奉_レ存候。扱其所置に於ては深く三代之道に達し明に今日之事情に通じ、綱領條目巨細分明之大經綸有_レ之大有識之君相にてましませずして、いかで此落日を挽回し玉ふべきや。和漢にて明君賢相と稱候位之人にては中興之治は出來申間敷時運かと存候へば遺憾無_レ限奉_レ存候。

尊藩建學之御事被_レ仰下、御事情い才承り御尤に奉_レ存候。如_レ命今日に當りて尤以第一義と奉_レ存候は此道之講明に有_レ之、所_レ願は上下人心此道を信じ他岐旁蹊に迷ひ不_レ申、愚夫愚婦之佛を信じ候程に相成候へば萬弊萬害憂に不足事に奉_レ存候。然處我 皇國是迄大道之教拂_レ地無_レ之、一國三教之形御座候へ共聖人之道は例の學者之弄びものと相成、□□は全く荒唐無經些之條理無_レ之、佛は愚夫愚婦を欺のみにして、其實は貴賤上下に通じ信心之大道聊以無_レ之、一國を舉全無宗旨之國躰にて候へば何を以て人心を一致せしめ治教を施し可_レ申哉、方今第一義之可_レ憂所は、萬弊萬害何も扱置此所にて可_レ有_レ之候。惣じて西洋諸國之事情彼是に付て及_レ吟味候へば、彼之天主教なるもの本より巨細之筋は知れ不_レ申候へ共我天文之頃渡候吉支丹とは雲泥之相違にて、其宗意たる天意に本き彝倫を主とし扱教法を戒律と

いたし候。上は國主より下庶人に至る迄眞實に其戒律を持守いたし、政教一途に行候教法と相聞申候。大抵其學の法則は經義を講明するを第一とし、其國之法律を明辨し其國之古今之事歴より天下萬國之事情物産を究、天文・地理・航海之術及海陸之戰法・器械之得失を講究し、天地間之知識を集合するを以て學術といたし候由。魯西亞國を以て申候へば比達王中興より當時迄殆二百年餘に至り其邦内政令能行治平相續き申候。國王年中之三之二は邦内を巡見し民間之利害政事之得失を察し、供人僅八十人に不_レ過別段に行在所と申も無_レ之、行懸りに官舎或は民屋に止宿いたし至て手輕事と承申候。其學校之法は一村の童男女より教を入、其内之俊秀を一郷之學に擧、其より一郡其より一部々々よりペートルヒユルクの都城之大學校に入候由、當時學校生員一萬に餘り、政事何ぞ變動之事總て學校に下し衆論一決之上にあらざれば決して國王政官之所存にて行候義は相成不_レ申、將又執政大臣等要路之役人は又一國之公論にて黜陟いたし候由、是等之事總て其宗旨之戒律之第一義と承申候。將又民に取之年貢は十之一分にて有_レ之、此外は聊も取り不_レ申、其故民間殷富いたし候。扱經濟之道は第一土地より掘出する金・銀・銅・鐵等之諸物、將又工職を集工作場を立其地々々之產物にて諸物を造り是以天下に交易致し、是等之利を以て國用と致し申候。是を要するに其政事全其教法に本き來り候故上下人心趣向一致致し邦内を舉異論無_レ之由に承申候。是等之政事西洋諸國小異は有_レ之候へ共大抵皆同じ筋に相聞、魯西亞に次ではアメリカ新造之國にて別て盛大之由に承り申候。

近代編纂之海國圖志、アメリカ之部は其國志に因て著し候間餘程明白に有_レ之候へ共、魯西亞は殊の外大略にて事情を得不_レ申事かと被_レ存候事。

士に通じ候は康熙以前よりの事に候へ共夫迄は陸路之通信迄にて海路未だ開け不_レ申候故アジャ洲中
二宗旨有_レ之聖人之道・佛氏之道と申迄にて未だ其道之全躰は承知いたし不_レ申、我寛政之頃より海路
開、漢士・天竺杯に使節を遣し國躰事情を察し、先天竺に遊學生を遣し數年留在せしめ其地之學問・政事
之情實を見申候處、當時天竺はモゴル一統之政事衰廢致し一として見る所無_レ之、將又佛氏之學を研究
致候へば其宗意些之條理無_レ之誠に荒唐無經にして一切人道に關係致し不_レ申甚以驚駭いたし、如_レ此之
宗意にては其政事之道なきは當然と存候由、隨て漢士に遊學に遣し燕京に留在委細國躰を見申候處、其
折柄乾隆之末年にて是又政道衰運に傾、進士及第杯も賄賂を以舉候位にて其政事之無道を驚申候。又學
者之所_レ學は經書を見文詩を作候迄にて、其道たる何の趣意たる事不_レ相知、聖人之道とは簡様之筋に
て候哉、全佛氏之道と人道に關係不_レ致は聊も相違無_レ之、アジャの二宗旨愚昧之甚しき、其故其國總て
政道を失ひ世々内亂止不_レ申追々他國より取られ候も必竟人道之明なり不_レ申故にて深く痛心に存候
由。其後尙又燕京に遊學に遣し、聖今三十五六年前後の由此度は專聖經を研究致し書經・詩經・論語之三部を其國之文字
に翻譯致し國都に持歸、其大學校之詮議に懸け候處第一規模之廣大なる經綸之明齊なる修_レ己治_レ人政
教一致なる所に深く驚駭致し、三千年之古如_レ此之道明なる堯舜之聖德に於ては誠に奇異の思をなし、
其奉る所之天主之教と全く符節を合候と論決致候。然處後世之漢人如何成故に如_レ此之大道之本意を誤
り唯々書を読み文詩を作候を學問と心得候哉、後世治道衰廢人道亂候は全堯舜・孔子之大道を失ひ候故

にて有_レ之候へば當今漢人深く此處を省察致し、無用之文學を相止三代の大道再び其士に明なるに於て
は其國之中興掌を返すが如し、若又此大道を明にすること不能して其私智に任じて國を治めんと欲せ
ば是獸を海に獵し魚を山に漁に同じ何ぞ其愚昧之甚しきやと、右之經書を開板し此趣向之序を致し漢
士に送遣候處、林則徐杯取り傳深感嘆致し候由。右之序中我聖人之道と彼が天主教と符節を合すると申
候へ共此には大に論ずる旨も候へ共此節はさし置、先彼等が道は一國無_レ貴賤一統其道を奉し實地に
被_レ行宗門を以て治道と成し二に分れ不_レ申候へば、彼より日本・漢士杯を見候ては序中に申候通り實に
道なき國躰に相違無_レ之、於_レ是深可_レ憂之第一は西洋通信次第に盛に相成、諸夷陸續入り來り候へば彼
等教法政事自然に明に相知れ候に就ては、我邦人之中聰明奇傑之人物是迄聖人之道を知り不_レ申者彼
我政道之得失盛衰之現實を見候ては不_レ知不_レ覺邪教に落入候は十年廿年之間には鏡に懸て見るが如
し、佐久間修理杯は既に邪教に落入たるにて相分り申候。條理は邪教を唱ふるには無_レ之候へ共政事戦法一切西洋之道明なりと唱、聖人
之道は獨り易の一部のみ道理あると云と承る。是彼邪教に落ちたるの實境なり。
總て事之善惡共に世に行候は必ず人傑之唱へ立る故にて候へば三代之道に明ならず三代治道に熟せざ
る人は必ず西洋に流溺するは必然之勢にて候へば、今日之大に憂所は何も扱置此道之外は無_レ御座事
に奉_レ存候。扱又此道に付ては此四五ヶ年來は聊講明仕候筋も御座候へ共、此度は何もさし置申候。定て
新得之御發明可有_レ御座、後便拜聞仕度奉_レ存候。此段迄拜復仕候。

十二月廿一日

横井平四郎

村田巳三郎様

尚々時分柄御自愛可_レ被_レ成候。此節は諸君に書状さし出得不_レ申可_レ然御傳致奉_レ希候。以上。

(村田英彦藏)

村田は右書面を表装して横巻となし、自らその末尾に左の文を記してゐる。

此書は小楠横井先生安政三年辰の十二月氏壽に贈られし所なり。茲時春嶽公勵精圖_レ治興_ニ學校_ニ修_ニ海備_ニ一切に邊警を憂ひ専ら國事に盡力せられしかば、達議俊豪の人を求め共に謀らんとせらるゝに急なりき。公は前に先生を欣慕し玉ひしが、此書を一讀せらるゝや之れ余が大に望む所なりと、遂に翌四年三月氏壽に命じ先生を招聘せらるゝに及ばれたり。されば此書は偶然にも公と先生が尋常ならぬ知遇の媒介者と爲り、先生の名望も一層盛大に至りたりし。

明治二十年一月二十日

村田氏壽記

此の跋文に據ると、右書面は春嶽が小楠を招聘せんとする最近の動機となつてゐる。

安政四年

六三 立花壹岐へ 安政四年二月十三日

小楠在熊本(年月につきては九四九頁池邊立花在柳河(藤左衛門への書簡説明文参照))

西原歸郷_(正右衛門、小楠門生)にて拜呈仕候。先以過日は遠路御來訪被_ニ成下_ニ厚忝拜謝難_ニ申盡_ニ奉_ニ存候。然し何之風興も無_レ之恐入奉_レ存候。御歸途雨に相成り御氣削被_レ成たると奉_レ存候。定て高瀬當り御止宿と奉_レ存候。扱段々御高話拜聞、久振に散_ニ鬱情_ニ大慶此事に奉_レ存候。何も扱置今日之勢三代之道を明にする外は無_レ之、此

處に於ては御互之大任他に譲り不_レ被_レ申、乍_レ然過高之病は不_レ免候へば尤以自反脩養可_レ仕事に奉_レ存候。監物_(長洲)よりさし出候書附は至極同意に御座候間千萬御玩味被_レ成度奉_レ存候。包_レ荒之量を養之道は第一知識に有_レ之候へ共、又生質之上に脩養仕り不_レ申ては難_レ叶、剛乾之御生質に候へば深く御自重之處萬々奉_レ祈候。

沼山四時軒期年_(尊)、賢堂之御書は御寓意と奉_レ存候。右に付ては拙意も御咄し申上度奉_レ存候へ共座中を憚り無言に罷在申候。

拙藩否塞之甚しきは御案内之通りにて、自然越藩より招に預り候へばいか様成る禍起り候も難_レ計事情之處深く御考へ被_ニ成下_ニ度奉_レ存候。幕府より天下之士を被_レ召候事に候へば無_ニ異議_ニ事に候へ共、越藩よりと申ては極て六ヶ敷相成り、計られざるの禍を引き起し其事も又行れ不_レ申筋に成り行可_レ申、吳々御勘考之程奉_レ希候。過日之御禮旁拜呈仕候。乍_レ憚御自愛千里御旅行被_レ成度、何も近々御取遣可_ニ申上_ニ候。頓首拜。

二月十三日

横井平四郎

立花壹岐様

膝下

(壹岐文書・立花親雄來翰寫)

六四 池邊藤左衛門へ

安政四年五月二十五日

小楠在熊本
池邊在柳河

池邊は柳河藩士にして小楠の高弟。同藩にて所謂肥後學—小楠の實學—の盛となりたるは此の人の力である。藩にても重用され、維新後も朝官に任ぜられて財政のことに功があつた。
此の書は池邊が、小楠に越藩招聘に關する春獄の内意を傳ふべく熊本への途中柳河に立寄りたる村田巳三郎と俱に小楠を訪ひたるに關してのもの。

一書拜呈仕候。先以頃日は御來臨被_レ成下、久振に拜話を得大慶至極に奉_レ存候。御歸り御氣削被_レ成と奉_レ存候。

扱彼一條種々思量仕候處さして異存も無_ニ御座_一候。御咄合通りに先安着仕候。村田歸り候へば定て江戸之様に參り候事に被_レ存候。左候へば直様御懸合にも可_ニ相成_一哉、又は秋にも至り可_レ申哉、夫はどふとも支へ不_レ申、唯御懸合之仕方此方家老に直に被_ニ仰聞_一候は餘りをつこふかと被_レ存、先越之御家老より此方家老に直に懸合相談いたし候義當然と奉_レ存候。扱又越前守様より寡君に御直書にて被_ニ仰越_一候事可_レ宜奉_レ存候。左候へば家老より御直書并に越前御家老懸合之趣申遣し熊本にて詮議相成候筋に參り可_レ申、其先きは又其先之活法にて先右之通之御懸合當然と奉_レ存候。村田歸りに罷出可_レ申候間此段得斗御咄合被_レ成度奉_レ存候。

一 梁川星巖事村田に咄合仕候。是は今日の事にて無_ニ御座_一候。後日成行出來候上之事に御座候。村田

も其了簡にて可_レ有_ニ御座_一候。

越公天下に御懸りは世子之事も何もかも先一切御見合被_レ成度御事に奉_レ存候。第一越公十分に御見識相立天下第一等之御身と御成り被_レ成不_レ申ては何事も無用に相成、却て弊害を引き起し可_レ申、今日之處御一己御修養のみにて其外は總て御さしやめ、何事も御手を被_レ出候儀御無用に奉_レ存候。越公果して御聰明御開被_レ成候上は尾藩之君臣御開被_レ成、尾・越二藩眞に此道明に相成候へば水老を御開導被_レ成、三藩大道明に相成不_レ申ては天下之事は決て行れ申問敷、一ト通りの御明君位之御身にては三藩御合躰は必定六ヶ敷御座候。左候へば世子之御事も何もかも御さしやめ御一己御修養之外無_ニ御座_一と奉_レ存候。此段村田に御咄合被_レ成度奉_レ存候。御歸り後種々思量拜話山海に御座候へ共何も扱置、此段迄得_ニ貴意_一申、村田に宜く御傳可_レ被_レ下候。已上。

五月廿五日

(小楠遺稿)

六五 村田巳三郎へ

安政四年六月一日

小楠在熊本
村田在肥前

一書拜呈仕候。津留に御託之御狀、忝々拜見仕候。烈暑中御旅行御氣削可_レ被_レ成、其のみ想像仕候。縷々被_ニ仰下_一候次第、御厚情之至り却て赤面仕候。誠に久振りに拜話仕、近來之鬱を散じ大慶仕候。扱薩之事

情被_レ仰下_レ候通りにて、全水戸と同一般之病症中々六ヶ敷勢と奉_レ存候。必竟天授之御聰明は全御明君に相違無_レ御座_レ候へ共、聖賢之道御合點無_レ御座_レ候故此末之處彌益險阻隱辟、遂には不可_レ致事體に相成は必然之勢、扱々笑止千萬に奉_レ存候。肥前は水・薩程には痼疾いたし不_レ申候へ共功利之病甚敷、士人心術之趣向尤以卑陋に相成り、一切虚心之處無_レ之候間此道之御咄合は出來中間敷被_レ存候。要_レ之三藩方今之御明君にて被_レ爲_レ在、却て如此弊害に相成候へば、此道之外に治術無_レ之は分明に奉_レ存候。
(招聘につきて)御内談一條に付て御別後段々勘考仕候處御座候て、此節河瀬典次肥前迄遣し申候。い才は典次より御咄合可_レ仕候間左様御承知可_レ被_レ下候。將又池邊氏迄申談置候趣も御座候間、折角之事にて柳川迄御立寄御咄合被_レ下候へば重々宜敷事に奉_レ存候。此段迄拜呈、餘は略仕候。已上。

六月朔日

横井

村田様

尙々遠路御厭被_レ成度奉_レ存候。吉田君初諸君に書狀拜呈不_レ仕候間宜敷御傳可_レ被_レ下候。已上。

(村田英彦藏)

村田は小楠招聘に關する春嶽の内旨を傳ふべく來熊し、それから鹿兒島・長崎・佐賀に到り、佐賀で橋本左内の書狀に接して歸國の途に就いたが、右書面によると村田は此の旅中津留某に托して書を小楠に寄せ薩摩の事情など報じたものと見える。小楠の書面中の御内談一件云々につきては前記池邊への書簡(六四)を参照せよ。

安政五年

六六 越前の大阪留守居役へ 安政五年三月三日 小楠在熊本

小楠越藩の招聘に應ずることになりたるに付熊本出發及び大阪着の豫定日を報じたるもの。

一書拜呈仕候。いまだ得_レ拜顔不_レ申候へ共愈御安康に被_レ成_レ御勤、珍重之御事に奉_レ存候。然ば私儀越前守様御頼に因て福井表に罷出御用相勤候様越中守様より御申付有_レ之、當月十二三日頃此許出立仕筈に御座候。左候へば當月廿七八日比迄には大阪に着可_レ仕候。就ては何角御難題に罷成可_レ申、可_レ然御配意被_レ成下_レ度重々奉_レ頼候。將又此一(下記吉田及び村田への書面)封至急に福井表に相達候様御取斗被_レ成下_レ度、重々奉_レ頼候。此段迄相願申度、餘は不_レ遠拜顔之上萬々得_レ貴意可_レ申奉_レ存候。以上。

三月三日

横井平四郎

時存

越前

大阪御留守居中様

(村田英彦藏)

六七 吉田悌藏・村田巳三郎へ

安政五年三月三日

小楠在熊本
吉田・村田在福井

一書拜呈仕候。先以 御兩家 上々様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御事に奉存候。隨て御兩所様愈御安康に被成御起居、珍重之至に奉存候。然ば去月廿八日 尊君様御頼に因て、其御許に罷出御用相勤候様筋々申渡有之、不肖之身實以深恐入奉存候得共、去秋村田君御光來之節御咄合之趣眞以 尊公様御誠志奉感戴候て不願不束御請申上候事に御座候へば、無異議罷出候事に決定仕候。然處越中守様當月六日御發駕にてさし合御座候と聊之用意も仕候間、當月十日より十二三日比此許發足可仕候。左候へば當月廿八九日比迄には大坂に着可仕候。尤門人一兩人連候て罷出可申左様に御承知可被下候。先年不圖罷出、奉別以來は再會難期存じ罷在候處、去年村田君御來訪被成下候上今日再御許に參上仕、諸君御講習仕候は眞以人事之變易意料之外に出候て可感事に奉存候。何様不遠拜顔之上積る御咄合重々相樂申候。此段迄拜呈仕候間諸君に可然御傳聞奉願候。以上。

三月三日

横井平四郎

吉田悌藏様

村田巳三郎様

(村田英彦藏)

六八 櫻井純造へ

安政五年四月三日

小楠在京都
櫻井在信州上田

櫻井は信州上田藩士にして小楠の門生。學を好み國事に盡瘁す。官は宮内大書記官に至つた。本書は小楠が安政五年はじめて春嶽の招聘に應じて福井に赴く途、中京都にて橋本左内に面會したる際、櫻井に關し何事か依頼するところがあつたと見えてそれを報じたものである。

一書拜呈仕候。時節愈御安居珍重之御事に奉存候。隨て小生相替不申依舊罷在、御懸念被下間敷候。然ば小生事福井公より御招に預り彼表に罷越、今日京師發程仕候、此段御爲知仕候。扱賢兄如何御起居被成候哉、御模様承り不申何かと案勞仕事に御座候。於京師福井御家中橋本左内に出會諸事咄合申候。橋本は直に江都に發足、今日東北に相分申候。賢兄御事、才橋本に咄合置申候間、御寸暇も御座候へば江戸に御登り橋本に御出會御咄合有之候様吳々奉存候。尤御急ぎ御出府可然重々相祈申候。此段得貴意度、餘は何も略仕候。以上。

四月三日

横井平四郎

櫻井純藏様

尙々勿々相認、亂筆御海容可被下候。

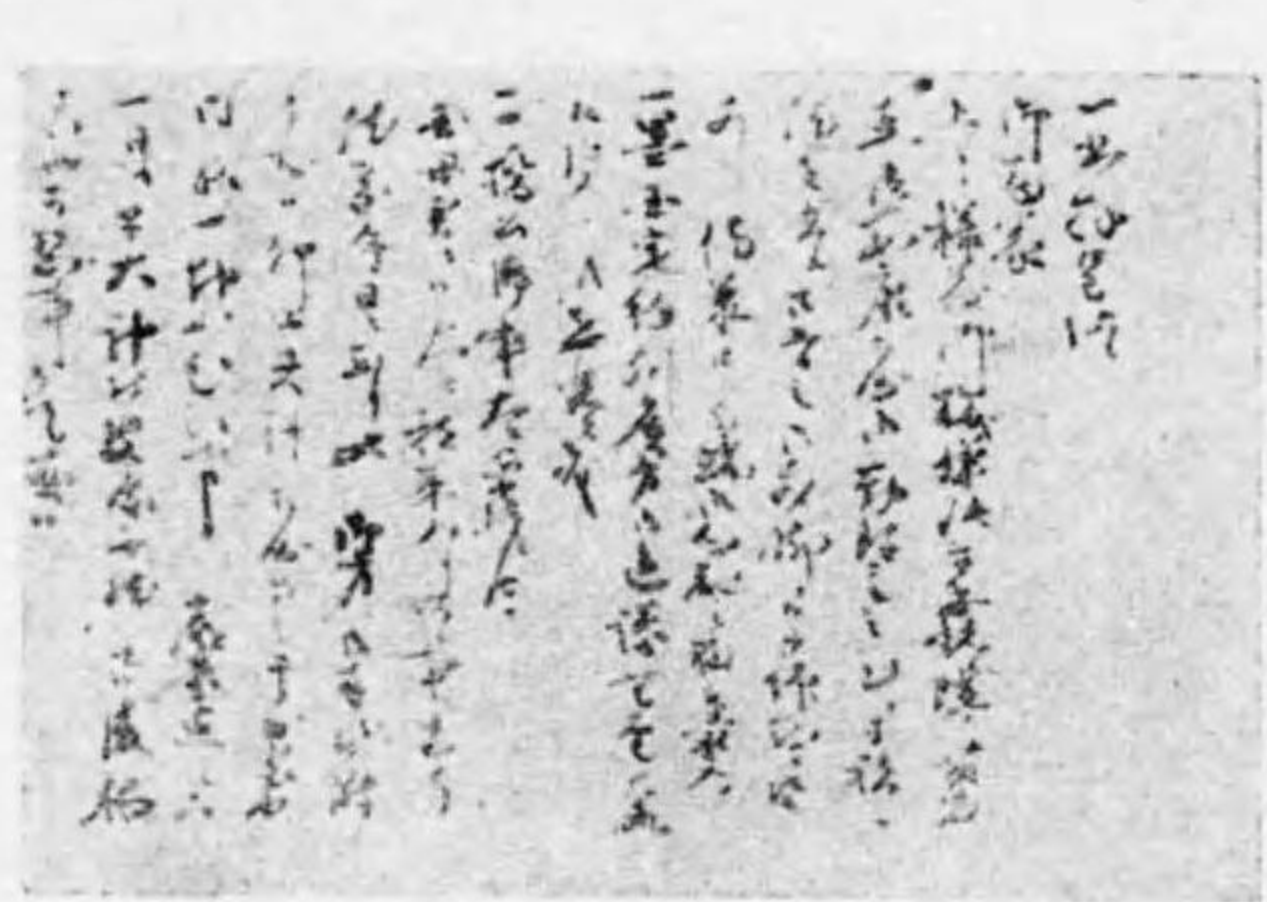
(村田英彦藏)

六九 橋本左内へ

安政五年四月十一日

小楠在福井
橋本在江戸

左内の何人なるかはあまり有名なれば贅せぬ。
此の書は小楠が右「櫻井」への書簡の説明文にある如く京都にて面會したる左内に、着福後書き送つたもの。



りよ楠小

一書拜呈仕候。愈御安康に被_レ成_二御旅行、珍重之御事に奉_レ存候。先以於_二京師_一は數日御難題に罷成厚忝々、拜謝難_二申盡_一御座候。乍_レ然寛々得_二拜話_一大慶此事に奉_レ存候。扱三日奉別以來道中無_レ恙七日に御城下に參着、同行何も申分無_二御座_一候。御安心可_レ被_レ下候。於_二賢兄_一定て同日御發程と奉_レ存候。御急之事にて別て御氣削被_レ成候と奉_レ存候。小生今般は非常之御取扱にて、難_レ有内深痛心仕候。此許御執政初諸君子ト通り御話合仕、就中村田・長谷部兩君は兩三度寛々拜話、毎々御噂仕申事に御座候。

扱御内話之條々村田君へは夫々及_二御内話_一申候處一々御_二□□_一にて、定て御同人よりいさるは被_二仰越_一候と奉_レ存候。水老公一條尤御火急之要事にて別て御心配被_レ成候と奉_レ存候。當月末・來月初迄は御左右相達可_レ申、屈指御待申_二□□□□_一事御痛心可_レ被_レ成、夫のみ村田君と内話

仕申候。此節は格別言上之筋も無_二御座_一候。先京師之御禮且は無事に落着仕候迄荒々拜呈、餘は後便萬縷可_二申上_一候。已上。

四月十一日夕認

横井平四郎

橋本左内様

猶々時下御厭可_レ被_レ成吳々奉_レ存候。御同行之諸君に別呈不_レ申、可_レ然拜謝奉_レ希候。以上。

(横井時靖藏寫本)

七〇 橋本左内へ

安政五年五月八日

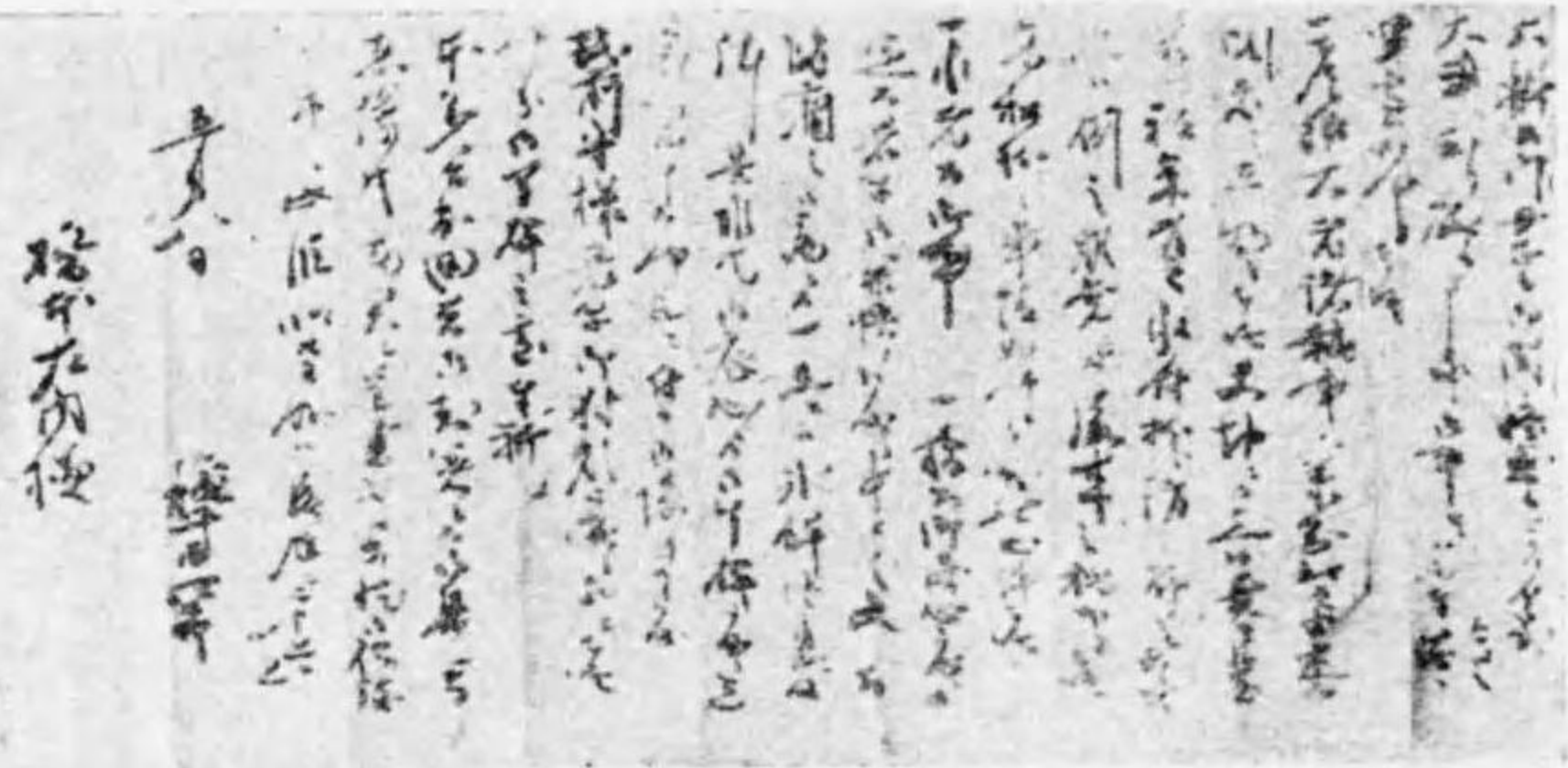
小楠在福井
橋本在江戸

一書拜呈仕候。御兩家 上々様益御機嫌能奉_二恐悅_一候。隨て賢兄愈御安康被_レ成_二御勤、珍重之至に奉_レ祝候。然ば去る廿五日之御飛脚にて被_二仰越_一候次第夫々傳承仕、萬端御心配之程奉_二察入_一候。

一 墨國定約列侯方御違議無_二御座_一、大略相決候段恐悅に奉_レ存候。

一 一橋公御事大に案勞仕候。

國母君には大に邪氣入り居候事に被_レ考、然る處今日に至り此 御方に御手を被_レ附候儀は却て失計に



(藏彦英田村)簡書のへ内左本橋

相成可_レ申、其外宮中同様一切かまひ不_レ申 廟堂迄にて一日も早大計被_レ決度、不_レ然しては後禍甚以可_レ恐事に奉_レ存候。或は 大樹公御母子之御間に疑惑も可_レ有_二御座_一哉、今日之大事に至り聊もさし支之御事とは不_レ奉_レ存候。賢慮如何と奉_レ存候。

一 彦根大老、諸執事も承知無_レ之由定て閣老之立物と奉_レ存候。夫切にて候へば責て宜敷、萬一邪氣有_レ之水府杯を防之筋にも出候儀に候へば例の朋黨にて後來之禍本と奉_レ存候。高松杯之事情如何に候哉無_二心許_一奉_レ存候。

一 水府公御事 一橋公御得心被_レ成候段定て最早御開悟に相成候事に奉_レ存候。此 公沈痼之御病にて一旦には氷解仕申間敷、然し是非共御底心より御了解被_レ成候迄參り不_レ申ては何かにつき御障り可_レ被_レ成候。越前守様最早御對顔被_レ遊候かと奉_レ存候。何分御了解之處奉_レ祈候。

本多君・村田君御到着にて御集會想像仕候。兩君に呈書不_レ仕、可_レ然御傳致奉_レ希候。此段畧呈、餘は後雁に可_二申上_一候。以上。

五月八日

横井平四郎

橋本左内様

(村田英彦藏)

別啓

先便に 越前守様より御書拜戴仕、被_二仰下_一候次第身に餘り難_レ有仕合に奉_レ存候。今般中根・平本の兩君迄御禮狀拜呈仕候事に御座候事。

橋本様

横井

(村田英彦藏)

七一 横井牛右衛門へ

安政五年六月十五日

小楠在福井
牛右衛門在熊本

牛右衛門は肥後三横井家(小楠とその祖を同じくせる)の一の當主で、世々肥後藩に仕へたる小楠社中の人。本書は小楠が應招第一回の福井入をなして間もなく其の近状を報じたもの。

一 書拜呈仕候。時分柄御袋様初皆々様御康壯に被_レ成_二御座_一、珍重之御事に奉_レ存候。隨て小生何之申分も無_二御座_一壯健に罷在申候、御懸念被_レ下間敷候。扱江都の事情一變いたし安場歸り後追々飛脚到來不_レ可_レ爲之勢と相成申候。必竟 西城一條因循家明君を忌候より事起り、有志諸公手を束致し方無_二御座_一候。和漢古今珍しからざる事とは乍_レ申今日之時節に到り餘り成る事と痛心仕候。乍_レ去朝夕に變動仕る時節に候へば此上如何參り可_レ申哉、全くさじを抛候事とは見へ不_レ申、越公尤御痛心御配慮不_レ淺事に御座候。此許御家老近日歸着之筈にて其上い才相分り可_レ申候。追て得_二貴意_一可_レ申候。

此許事情先得_ニ貴意_ニ申候通り、且安場歸郷定てい才御承知と奉_レ存候。一體之仕懸け水府杯より参り、何事も一ト息に取り懸り急迫に相成人心不處合に御座候處全く病症にて、必竟は學術之正路を得不_レ申故に有_レ之、御家老初諸執事能々申談じ萬事人情を得候筋に引き返し、彌以根本を大切にいたし本末體用次第寛急之筋合不_ニ相戻_ニ様大體何方も得心に相成り、夫より大に都合宜敷只今之處は學校中有志者は申に不_レ及武人少年輩に至る迄一統道に向ひ候勢にて、會業杯我も_レと罷出候事に相成餘り大勢にて届兼候間近日制止を加へ、容易に出方相成不_レ申様に都合を付け申候。此上兩三人之重役近日歸國之筈にて此面々講習落着いたし候へば先上下一致いたし候事勢に御座候。残念成る所は君公御滯府必竟は江戸之大事にて御國は被_ニ差置_ニ候處彼表前條之次第にて一も二も御取り失ひと申ものにて御座候。江戸表御見切之上は定て當秋御歸國も可_レ有_ニ御座_ニ候、夫のみ相祈申候。君公御下國に相成候へば此一藩は丈夫にすわり可_レ申責ての事と奉_レ存候。

(末嶺小嶋の弟)仁十郎より申遣候出立前諸雜費入ぬ不足分御心配相願申候由何分可_レ然御世話被_ニ成下_ニ候様吳々奉_レ願候。此許滯在中五十人扶持御助力にて暮し方餘り候程に有_レ之候間、當冬被_レ下候十三石借は宿本に不_レ殘遣申候筈に付夫にて返上仕候様に申遣候。千萬御配意被_ニ成下_ニ度奉_レ願候。

江戸表より格別之御特恩にて諸獵漁御止川御留場無_ニ遠慮_ニ罷越候様申参り候由に付、鯉取りに兩度青鷺打に一度あ_レ取に一度参り申候。流石御留所にて毎度獲物澤山にて御座候。近日あ_レい漁に尙参り候筈

にて網杯取りそろへ申候。網はまさ網と申ものにて殊之外宜敷、熊本瀬打網よりは一倍以上も取れ申候。先度は二百四五十も取れ申候。然し歸り候ても寂寞たる旅館にて寸斗面白無_ニ御座_ニ候、御察可_レ被_レ下候。種々拜呈之儀山海に候へ共何もさし置、右之段迄言上、餘は付_ニ後雁_ニ申候。以上。

六月十五日

平・四郎

牛右衛門様

尙々此許梅雨今以晴不_レ申、殊之外雨勝にて在方杯_{ザイ}程氣遣申候氣候も近日蒸氣相催しかた_{帷子}びら相用申候。御國如何と推し量申候。江戸・上方何も同様只今通りにて恐敷事に被_レ存申候。久右衛門様・村上杯可_レ然御致聞奉_レ希候。以上。

再白「ゲヘル」製造此許并加州・大野三藩出來、根段は此許五兩貳步加賀・大野六兩にて御座候。就_レ中大野甚以宜敷出來、近比「ミニイル」の遠丁打も出來申候。大野は小藩には候へ共内山七郎右衛門弟柳助と申人殊之外人傑にて當時專被_レ用、蝦夷を開き方に甚だ力を入れ先日典次_{河邊}を遣し内山に應對いたしい才承り申候處中々趣向廣大驚入申候。蝦夷之地は是迄承り候とは大に相違いたし、先氣候も格別奥羽之地方と相替り不_レ申、野菜類杯は十分出來米むぎの品出來不_レ申迄に御座候。是も奥羽より廻り申候てさして迷惑にも至_レ不_レ申候由、産物は第一馬尤も宜敷一日に二十里位荷馬いたし候ても疲れ不_レ申候。其外海魚は無_レ限有_レ之候。大野にて此節「スクウネル」十九間之船江戸前に

て製造いたし最早船おろしもいたし隨分宜敷出来いたし、益前には敦賀に廻船いたし候筈に御座候。左候へば直に乗出し蝦夷之様に廻し候積にて大惣之貨物廩に日々待居申候。君公も非常之御人物にて西洋流訓練御自身に日々操り廻しに相成候。當四月御出府の處御供中具足箱・鍵は一切さし止に相成、何も殊之外の簡易にて御座候。具足は一切廢し御家中具足總て拂出しに相成申候。是にて御察可_レ被_レ成候。將又銅山數箇所鉛山一箇所何も殊之外宜敷、典次參り見申候。銅石一割七歩付き重々宜敷御座候、ならし候へば七歩位と承り申候。鉛も同様、是は大なる産物に御座候。此段付呈仕候。以上。

(横井時靖藏寫本)

七二 下津休也・荻角兵衛・元田傳之丞へ

安政五年六月十八日

小 楠在福井
下津・荻・元田在熊本

下津は名は通大、通稱久馬、隱居して休也、蕪雨はその號。荻は名は昌國、通稱角兵衛、號は麗門。元田は名は永孚、通稱傳之丞、後八右衛門。茶陽又は東野と號す。三人俱に小楠の親友にて肥後實學黨の領袖。(下津及び元田の小傳は『横井小楠傳』第十九章、十一、_口に、荻のは同書第十三章、二にある)

一書奉呈仕候。時候愈御安康に被_レ成_レ御座、珍重之御事に奉_レ存候。隨て小生相替り不_レ申壯健に罷在申候間御懸念被_レ下間敷候。然ば江府之事情先便呈上仕候通りに御座候處、先月廿二日飛脚到來、情勢殊之外打替り候。必竟 西城一件各々希望有_レ之、(佐倉藩主堀田正睦)櫻閣京師入洛大失計にて、(上田藩主松平忠俊)其留守上田閣(肥州藩)案南紀を主張被_レ

致、彦根同道より御側宮中下地總て幼君を利し英主を忌候處にて、大躰一統一橋公へ恐れ、南紀を立る勢に相成り、櫻閣歸府之後は先如何とも不_レ可_レ爲事情に御座候。依_レ之流俗又々勢を得、朋黨之名目を唱へ、有志者渾て一網に被_レ打込_レ申候。勿論只今起り候ものにては無_レ之、下た地久敷隱伏之病症陽發致し、其根本は水老(齊昭)に關係いたし、御案内之高松杯大(松平親胤)に取り持、當年御滯府扱々遺憾之至に御座候。乍_レ去最早七を抛候容躰と難_レ申候へ共、先は極々難事之勢御推量可_レ被_レ成候。

水府大風波、先は破亡之極と可_レ申候。全躰老公先書にも得_レ貴意_レ候大偏執之上近年は御肝氣甚敷、何も無理之理究迄にて有_レ之、是迄順從之君子黨と被_レ稱候内兩端に相分れ、とても老公にては國は治り不_レ申、且又天下之禍を被_レ成候と申處に心付、段々異論相立候處、一切御取り用無_レ之のみならず大に憤怒に相成り候より、此面々當中納言公へかた持致し、御父子各々黨脈相立、内輪大惑亂に御座候處、一橋公西城御入之勢にて双方勢を見罷在候。然る處此事六ヶ敷相成り候間、忽に火事打揚げ、どふもこふも致し方無_レ之容躰、依_レ之是を被_レ押込_レ候奸黨之面々當公方に相成り總て一致之色を露し、老公方は至て僅少にて、又々老公へ押込候手段十分に手を廻し申候。追々御咄合申候通り總て老公之無理にて、國家を覆亡被_レ成候は全く學術之曲に因り候事にて深可_レ恐事此許にても夫のみ講習仕候。右之通りの事に因て天下知名者水府推尊之心は次第に消亡致し氣の毒に御座候。此許之事情は定て安場より荻君御承知と奉_レ存候。其後相替り不_レ申候。一統人心漸々居り合候勢に御座候。近日重役兩三人歸國之筈にて、御家

老以下何も相待講習仕筈に御座候。是等會心一致之上は先は上下異論無之、扱君公にも江戸之模様により候ては當秋御歸國にも相成可申、夫のみ何も奉待候。惣じて事に懸り候事は如何にも押延し、來年にも又來年にも少も苦しからず、君臣上下大道明に情意相通じ一致いたし候根本尤以肝要にて、其上人情を察し自然之理に順ひ事を爲し候へば何も風波も無之すらりと被行候は必然之事に御座候。是等之條理は大分明り申候間四五輩之人物は出類之人も出來仕候。必竟是迄が水府の餘毒にて、例の文武節儉之押懸け大に人心を失ひ居候處、當路之面々實は致し方無之折柄にて、拙議も無異義被行候ものに御座候。扱も水毒は恐敷事と奉存候。種々様々言上之筋御座候得共何もさし置、前條光景打替り候迄拜呈仕候。以上。

六月十八日認

横井平四郎

下津 休也様

荻 角兵衛様

元田傳之丞様

尚々諸賢御自愛可被成候。休也様御病氣如何案申候。時節隨分御愛養被成度奉存候。御地氣候如何に候哉、此許梅雨今以霽れ不申氣候殊之外不順、昨日杯は一と重に羽織を懸け候位、今日は又帷子、筒様之變化甚以恐申候。江戸・上方共に殊之外雨勝又不順之由、九州筋如何と案申候。元田

君御舊作御草稿此許にて段々拜見いたし度申出候面々有之、乍御面倒御認め御送り被下候様吳々奉頼候。何分御急ぎの方奉待候。已上。
(小楠遺稿)

七三 横井牛右衛門・同久右衛門へ

安政五年七月十六日

小楠在福井
横井兩人在熊本

久右衛門も牛右衛門と同じく肥後三横井家の一の當主で、肥後藩に仕へ小楠社中の人。本書は春嶽遺厄の因由と其の後の越藩状況と自己の福井に止るに至りし経緯とを報じたもの。

一書拜呈仕候。時節愈御安康被成御座、珍重に奉存候。小生相替り不申無異に罷在申候間御放念可被下候。然ば去る五日越公御隱居被仰付、誠に未曾有之大變事絶言語候。右に付ては御國許さぞかし紛々たる事にて可有御座と相察し態と典次を差歸し申候。右條大略を申候へば昨十五日薄暮御奉行長谷部甚平參り、只今早飛脚到着早は六日に到着之書成るが河文にて及延引去る五日 此方様福山侯御召にて左之通り被仰渡。

松平越前 守え

思召之御旨も被爲在候に付隱居被仰付急度慎可罷在候。

松平日向 守え

松平越前守事 思召御旨被爲在候に付隱居被仰付候急度慎可罷在旨被仰出候家督之儀

は無相違其方え相續被_二 仰付_一候。

松平日向守

家老共

松平越前守儀隱居急度慎可_二罷在_一旨被_三 仰付_二之_一松平日向守え家督相續之儀被_三 仰出_二候處日向守事未年若之事にも有_レ之家柄之儀に候へば家老共申合せ萬端相慎諸事入念可_二申付_一候。

此外一橋公御登城御差留御叱、尾張公御隱居御慎、水戸中納言殿御登城御差留御叱、前中納言殿御閉居駒込之邸に御移住被_二 仰付_一、誠に以前代未聞之大變事之段申聞候。扱右内情之次第は江戸越前之御役方より此許御役方迄是迄追々様子申來、其概略申候へば全く 西城建儲之事と推察被_レ致候。去年已來建儲之儀段々相起り、廟堂は申に不_レ及御側衆大輿大抵皆 紀州公に屬心之處 紀公御年僅に御十三歲之上天下大變動之砌御幼弱之御方にては諸有志者一切服從不_レ仕、幸に一橋公御年長にも座_サし殊に非常之賢明に被_レ爲_レ在候へば是非此御方御建儲に可_二相成_一と幕府之執事岩瀬肥後守・長井玄蕃頭列頻に心配に相成、越前守様には御家門之御事尤以難_レ被_レ默止_一別て御心配被_レ成候。其上 京師よりも御年長にして賢明之御方を撰び建儲いたし候様被_二 仰出_一も有_レ之、旁以 紀州にては相成不_レ申、然處彦根大老御出後必死と 紀州に決定いたし、既に不_レ遠被_二 仰出_一に相極候。然處去月廿四日尾州公・水戸公御父子御一同に御登城、大老初諸老に御逢被_レ成違 勅之筋御詰問に相成

違 勅と申は外國之事に付き從_二 京師_一被_二 仰出_一候筋と 幕府之御建議相違いたし候に付當春堀

田閣老上洛候得共不_二相決_一、其後は迄 幕府より何之御答も無_レ之、此節亞墨より英咭喇唐土に打勝近

々江戸海に大軍艦にて乗り入候段相違候に因て閣老連署にて危急に相迫り 叡慮之通り戰に決候て

は百敗之勢に付亞墨申出之通り條約取結に決定被_レ成度段執奏迄言上に相成、御老中方之上洛は無_レ

之候に因て餘り輕蔑成る被_レ致方を御責にて、和約之筋を惡敷と申にては無_レ之候。

將又建儲之事既に 紀州に御内定之上は勿論御異論は無_二御座_一候へ共未だ 勅答も無_レ之、其上外夷來

迫之砌り 儲君被_二 仰出_一候ては甚以御不都合に可_レ有_レ之今少し相延し候て可_レ然との被_二仰談_一なり。

此朝越公には彦根大老之邸に御出前條之筋々嚴敷御議論に相成御歸邸之處、老公より今日御登城に因

て御登營可_レ被_レ成旨申來候。則御登營久世閣老に御逢御討論被_レ成候。

此舉は老公より尾公に被_二仰合_一候事にて越公には一向に御承知無_レ之候。其上老公には十年振に此日

御逢被_レ成候。

右之通り兩端黑白相分大混雜に相成候より御召無_レ之御登營と申に罪名相懸り、此節之御處置と此許一

藩沙汰仕候事に有_レ之候。

此許右即夜執政初諸有司に至る迄評定相決し、鷄鳴諸士呼出し申聞、一統鎮靜いたし相慎罷在候様尤

君公より御直書も到來一人たりとも江戸表に罷上申間敷被_二 仰出_一候に付彌以思召之旨相守候様大御

番は御番頭夫々支配方等しまり方一切朝六ツ半比迄に相濟、市中在方同斷なり。士人は申に不及下々に至候迄一統悲涙に差迫り誠にあわれ至極之至に御座候。將又君德之人心に深漬いたし候事尤以可_レ見事に御座候。

今晝執政松平主馬小生旅館に參り此節之大變に因ては定て歸國之所存も可_レ有_二御座、然處是迄厚き示教に預り一統人心も居り合候事に就き是非共留此上之世話仕り吳候様、尤江戸表よりは此大變事のみ申來其儀に不_レ及候へ共越前守様・日向守様（存疑）・日向守様（茂昭）必定其思召にて可_レ有_二御座、御側用人秋田彈正明日出府いたし候間此趣は彈正直に言上之筈に申付候段折入頼談に付、此砌罷在候身に有_レ之候へば御用に相立候儀は如何にも相勤可_レ申段及_二返答_一申候。

此大變熊本にて定て紛々たる事と相考、老人共も氣遣可_レ仕態と典次差歸し事情言上仕候間い才直に御聞取可_レ被_レ下候。此段迄拜呈、餘は何も略仕候。以上。

七月十六日晚認

平 四 郎

牛 右 衛 門 様
久 右 衛 門 様

（横井時靖藏文書資料）

七四 宿 許

へ

安政五年七月二十九日

小楠在福井

春嶽隠居謹慎を命ぜられたるに付、熊本にて忌むべき風評起り老母はじめ留守の者や門生・友人などが徒に心を痛めることありてはと河瀬典次を懇々歸熊せしめたが、猶老母の心を安めんとて誓き送りしもの。宛名の至誠院は小楠の兄左平太の未亡人、いつは兄左平太の長女、つせは小楠の室である。

六月十日之御狀相達、難_レ有_二拜見仕候。

先以奉_レ始_二 御母様益御機嫌能奉_二恐悅_一候。隨て私儀相替り不_レ申壯健に罷在申候間御安心可_レ被_レ下候。然ば此許大變に付ては典次罷歸り二三日内には着仕り可_レ申委細御承知可_レ被_レ成、誠に非常の大變に御座候へ共御家中町・在共に人情惣て居り合候間少も氣遣ひ無_二御座、さすがに明君の御德義と感心仕候。就ては私事晝夜彼是と心配仕、近日漸く閉日を得、既に一昨日は南川と申御留川（船）にあい漁に參り近日の鬱散仕候。是も重役の面々より頻にすゝめにて罷越候事に御座候。江戸よりも追々飛脚到着にて様子承り候へば、此節の事にて天下の心彌以中將様（存疑）に歸服仕計に御令名きびしき事にて、とても長く此通りにては決て濟不_レ申、何に不_レ遠御開運可_レ有_二御座、必定之御事と奉_レ察候。

當年御暮方之儀は典次にい才申聞置候間御承知可_レ被_レ成、略仕候。此節は替り申儀も無_二御座_一候。此段迄申上候。以上。

七月廿九日

横井平四郎

御母様

至誠院様

おいつどの

おつせどの

尙々此紙面は典次御許出立後に着仕り可申候。典次歸りに御土産可被下、夫のみ相待申候。何に九月節旬前後と相考、何も承り可申と大に相樂み罷在申候。以上。
(横井時靖藏)

七五 永嶺仁十郎へ

安政五年八月八日

小楠在福井
仁十郎在熊本

仁十郎は小楠の實弟、出で、永嶺氏を嗣ぐ。此の書は前記の如く春嶽幕府の譴責を受けし時隨行の門生河瀬典次をして歸郷、事情を通せしめ、續いて通知せしものである。

六月十八日の御狀到着、忝致拜見候。御兩家 御尊長様方益御機嫌能奉恐悅候。隨て拙者無異に罷在、御安心可被下候。然ば此許大變に付典次歸し當月三四日頃は到着と被存候。何も夫々御承知と存候。扱々意外之大變は申迄も無之、江戸表よりは追々飛脚參り探討之趣承り候へば中將様御名因之彌益御盛にて、御旗本大名家中は申に不及市中之者迄感服致し、無限之御高名と申事にて御尤千萬に

奉存候。將又京師・大坂尤以御名譽盛大之由、流石に人心の靈妙不可壓事に御座候。於中將様は殊之外御恐敬にて御尤め以來は終日御上下にて御座間も奥御座敷に御引き移り、八歳と十歳に相成候定府の子供兩人御側に被召置、右兩人之讀書手習等自身に御示教被成、御讀書御詩作等にて御暮被成候。江戸詰御家中聊も申分無御座候。近日此許御家老松平主馬出立致候筈にて、是は以來之御仕置筋等彌以是迄通りに不替相勵候心得等御示教有之候事と存候。此許は去月十五日以來漸々人心居り合、御家中町・在共に此節に至り別て御德義に奉服候。是迄は却て御政事向に付ては色々申崩候者も有之候へ共誰の歌にや有る時はありのすさみににくかりき無くてそ人は戀しかりける」と申意にて、今日に至り實に御誠心顯れ申候。必竟は御隣藩加賀・勝山・鯖江等何も困窮よりして市・在に大惣のかゝり物有之、市・在誠に困窮無限暴政にて、既に金澤は當春黨民起りし上去月末に又々相起り、四千人餘御城下許に押懸け豪商六軒一夜に打崩し申候。其起り豪商之者共役人に賂を入れ米を買致し候に付て米價一時に沸騰致し候を憤り候事にて有之、其末町奉行等の役人數人役さし除に相成候て漸く治り申候。右之通り隣藩は散々之暴政之處、此許はかゝり物杯は一切無之のみならず、御役人種々心を盡し、賄賂等は末々之役人迄一切に嚴禁致し候位にて、晝夜のかわりと申もの故今日に至り御德政相顯れ一統服從致し候。御家中には中將様御直書被下、細々被仰聞有之候上、執政初諸有司志を合せ大に心配も致し候間人情大に居り合申候。去月廿四日よりは一統平常通りに相心得候様達有之、當日より

文武館稽古も始り申候。拙者も十五日以來は晝夜心配致し、執政を初諸有司萬事之相談之上明道館中役輩諸生晝夜來訪にて誠に困り入、漸昨今聊間暇も得候間、執政より沙汰にて御留川鮎漁に兩度も参り候位にて萬事御察可被下候。尤執政御役人は何と無く出漁等は相制し出浮不申、拙者は別段と申事にて御座候。借又執政初之申談此分にて鎮靜致し候時節にては無之、本より又御政事改正抔致し候筋にては尙以無之、今日は先づ間暇の時と申すものにて、此時に於て後來萬事之筋急斗講究致し彌益自己銘々の知識心得を相究め、後日の開運を相待可申と一統申談候間、近日來は執政初中々勃興致し、日夜講習前日より一段の盛大に相成り、面白き勢に御座候。拙者宅にて熊澤集義和書の會相始め、執政諸有司其外も参り種々討論、何時も鷄鳴迄は咄合申候。憂愁中の樂事と何も悦申候。

江戸表外國之事典次承知迄は畧致し、英使至て尋常にてハルリス條約之通りに相濟去月廿一日歸帆、フランス不遠参り候筈なり。ハルリス日本に心を盡候は誠に無限之至り感じ入申候。流石亞墨利加之國躰世界第一にて有之候。魯・英・亞を初外國の事情は熊本にて見込候筋と少も相違無之候故略す。

外國御奉行出來 (編者註、安政五年七月八日新に
新かれ同日左記五名任命)

是迄御勘定奉行

箱立奉行

下田奉行

永井玄蕃頭 (尙志)

堀織部正 (利熙)

井上信濃守 (清直)

御目附

田安御家老

岩瀬肥後守 (忠勝)

水野筑後守 (忠勝)

此中井上を除け、外は幕府中之人材、何も中將様に心服、此節一揆を立候に隨從之人々也。夫故彦大老よりは大に惡まれ、既に罰をも可蒙人々にて候へ共外國應對は此面々にて無之候へば一切出來不申に因て當分此職に被命、此後は如何成り行可申や難計事に御座候。其外は相替り候儀無御座候。先此段拜呈致し候。以上。

八月八日

平四郎

仁十郎様

尙々典次も當月末には御許出立致し候事と被存、來月半には委細御様子承り可申と大に相待申候。以上。

附紙

水府は老公御附迄引替へ候様被命、將又太田丹波守・鈴木石見守再び執政可被申付旨御沙汰有之、此兩人は奸黨之大將なり。當中納言公此節は存外の憤發にて、兩奸被用候事嚴敷被相斷、未だ落着は承り不申候。何に次の飛脚にて知れ可申候。老公附安島彌次郎は當公附と成り、何某とか申者水戸より参り老公附と成り候由、此ものは惡敷者にては無之と噂承る。尾張は下た地一致致さず田宮彌太郎

専ら君公一味なり、竹腰は君公と別種なり。此君臣相離れ候より色々の申分さし起り居候處に此節の大變參り甚以六ヶ敷有之候處、成瀬當年十九歳大に議論を發し何も無事故相鎮、田宮は御隠居附と相成り候。成瀬は後來頼み有る人物なり。此許にては左様之混雜一切無之、流石に君徳感心致候。

別 啓

御袋様些御中氣之段誠に以て笑止千萬、何角御心配察入申候。定て御一旦之事とは存じ候へ共御病氣柄にて重々御氣遣敷存候。

御隠居様初可然御致聞被下度相願候。

御母様金子の御申越委細承知致し候。此節差上申度候處典次歸りに付一切無餘相成、當月は殊之外貧困にて何に來月は差上可申候。此段付呈致し候。

八月 八 日

平 四 郎

仁 十 郎 様

再啓。別紙泰吉・牛右衛門に御序に御見せ可被下候。

(小楠遺稿)

七六 嘉悦市太郎外三名へ

安政五年八月二十五日

小楠在福井
嘉悦外三名在熊本

市太郎は嘉悦、五次郎は山田、一平は安場、泰吉は内藤を姓とし、四人共熊本人にして小楠の門生。

嘉悦は名は氏房、通稱ははじめ市太郎後に市之進、小楠門下四天王の一にして識の人。維新前後藩政に與り朝官に任用せられ後殖産育英に盡くす所多く、政黨勃興するに及び改進黨の領袖となる。

山田は名は武甫、小楠門下四天王の一にして徳の人。戊辰の年徴されて熊本藩の會計權判事となり、後少參事に轉じ、英學校・醫學校等の創立に力を盡くした。明治七年教習縣令となつたが同縣の廢せらるゝや官途を辭して歸郷し、實業界に入りて實業を興し後には政黨を組織し進歩主義者の泰斗となる。

安場は後保和と稱し咬菜軒と號した。小楠四天王の一にして知の人。明治維新後は諸縣の大參事となり、熊本縣の權大參事の時代には藩政改革及び廢藩置縣を完成した。其の後歐米を視察し議官・縣知事・北海道長官を歴任して男爵を授けらる。

内藤泰吉も門生中の傑物で小楠塾に起臥して醫を寺倉秋堤に學び、小楠の越前行の後はその留守宅をあげかり、小楠の第四回の越藩應招には江戸及び福井に隨行し、小楠の參與時代にはその病氣看護に従事するなど小楠門生中彼程久しく且つ深くその師に侍した者は少ないであらう。明治維新後軍醫として東北に出征し、軍務官病院副頭取になつたが明治三年肥後に醫學所の設立せらるるやその校長格となり、爾後肥後西洋醫學の開發振興に巨大なる足跡を印した。

一書拜呈仕候。時分柄諸賢愈御安康珍重之至に奉存候。隨て小生相替り不申無異に罷在、御懸念被下間敷候。扱此許大變は河瀬歸郷にて夫々御承知と奉存候。爾來はさして相替り申儀無御座候。尤外國

水戸杯之事情は仁十郎迄申遣し置申候間彼方より御承知可被下候。此許は彌以都合宜しく、此節にて一段と講學相進み、執政初諸有司日々集會心術第一之處尤以銘心仕候。夫故有志は勿論一統大に競立存外之好都合に相成、易に所謂貞なるは吉と申地に參り申候。近來は熊澤集義和書會業相始り、毎も鷄鳴に至り論談面白事に御座候。安場君御承知之長谷部・村田尤以長進にて、流俗輩杯にくみ候心底は聊以

無_レ之中々正大なる心中に相成誠に悦申候。此節は一旦は俗論も起り候へ共右之次第にて有志者之面々聊も心を動し不_レ申、其上人情に合ひ不_レ申事柄は一切取り除候心組にて、水府流之文武節儉之弊政夫々相改候筈に申談何方も無_レ異儀事に御座候。是にて一體御承知可_レ被_レ下候。

山田君御説二通一々敬服、既に一兩輩には見せ申候、何も感心仕候。

典次も今比は打立居可_レ申、來月末には參着と大に相待申候。小生事も此大變に付ては他に不_レ被_レ申事ながら彌以一番之信を取り、俗人有志之差別無_レ之依頼之勢にて日夜應接にのみ苦み申候。只今通りにては來春早々歸郷之模様相見へ不_レ申、こまり入申候。

安場君御承知の漁獵當時は御停止にて何も出來不_レ申、最早雁の聲大分いたし來月末御停止明早々出懸申筈に御座候。雁・鳧は大惣の鳥勢何に不_レ思寄_レ大獲物可_レ有_レ御座_レ相樂申候。得_レ貴意_レ度儀山海に候へ共例の筆不調法にて略呈仕候。已上。

八月廿八日

平 四 郎

市 太 郎 様

五 次 郎 様

一 平 様

泰 吉 様

尙々他之諸子に可_レ然御傳致可_レ被_レ下候。前文仁十郎紙面御覽被_レ下、餘り御口外は御用捨可_レ被_レ下候。已上。
(高木第四郎藏)

文中二ヶ處に「安場君御承知」とあるは、安場が小楠の福井入に隨行ししばらく同居したからである。

七七 宿 許

へ

安政五年九月三十日

小楠在福井

弟仁十郎の計報に接し歸郷を思ひ立ちて認めたるもの。

去月十九日典次紙面二十三日到着仕候。奉_レ始_レ 御母様益御機嫌能奉_レ恐悦_レ候。先以仁十郎事流行急症にて十七日死去之段承り候て前後忘却、唯々夢の様に御座候て何とも可_レ申上_レ様無_レ御座_レ候。乍_レ然御母様御明らめ被_レ遊益御壯健に被_レ遊_レ御座_レ候段誠に以難_レ有思召にて當惑之心も相制し罷在候内、廿五日夕方竹崎着にて萬事之御様子も具に承り責て安心仕候。就ては私事當年中被_レ仰付_レ候事故何分引き上罷歸り申度候間此許重役迄其趣申談、十一月・十二月の二ヶ月引き上げ來月末にも御暇被_レ下候様取り斗吳候様及_レ相談_レ候處、此許にては私今暫居不_レ申ては都合不_レ宜筋も有_レ之、至極尤之儀とは存候へ共一ト先江戸に相伺 中將様御父子様之思召に因て龍ノ口にも被_レ及_レ御相談_レ候上にて無_レ御座_レ候ては不_レ相叶_レ早速急飛脚さし上可_レ申旨にて翌二十六日に飛脚出立申候。右之次第にて如何落着可_レ仕哉何に來月十五日前後には相分可_レ申候。歸郷に落着仕候へば來月末・霜月初此許出立可_レ仕、其期に

至り尙可申上候。不幸之告來り候より諸士晝夜入替々々旅館に相詰誠に厚き介抱に預り、夫等にて心を慰申候。御許流行急症は沼山津杯は絶果候段大に安心仕候。此許も次第に輕少に相成最早何にても無之、其上醫者大心得一人も只今にては死し不申大に安心仕候。此節は段々申上候事も無御座候。先此段迄申上縮候。以上。

九月晦日

横井平四郎

御母様

至誠院様

おいつどの

おつせどの

尙々典次も病氣と承り如何と被案候。竹崎參り候て大に宜敷事に御座候。私來月にも歸郷御免許に相成候へばさ(辨)かき原幸八・阿部又三郎被差越候筈に御座候。扱先き觸は南關より小川迄遣し(先夫人の家)可申、源左衛門に御咄被成置可被下候。乍然歸郷出來可申哉心遣仕候。縁家中には紙面遣し得不申、可然御申傳可被下候。以上。
(横井時靖藏)

七八宿許へ

安政五年十一月九日

小楠在福井

一書奉呈候。奉始御母上様益御機嫌能遊御座、奉恐悅候。隨て私事相替り不申無異に罷在申候間聊御懸念被下間敷候。扱典次も五日に到着、御許の事共い才承り大に安心仕候。竹崎兩人に相成萬端大に便利宜しく、日夜咄しいたし暮申候。私事先便にも申上候通り一旦歸郷仕度願望申立候處、龍ノ口の方も(細川齊護)太守様へは御存寄不被在、此方様御頼み通り來年尙又御遣し可被遊旨、然し熊本に御懸合の返事いまだ參り不申、近日には相知れ可申との御返事三淵殿より松平主馬方迄返事有之。尤松平は江戸出立當月末には此許に參着、其節は分り可申候との趣、此節之飛脚に申參り候間何に都合により候ては來月中旬頃にも此許出立可仕候。然しいまだ落着いたし候事にては無之、其時に至り尙可申上候。右之通りにて正月迄には出立仕り可申候間左様に被思召可被下候。
(奉吉)此許御家中兩三人も同道仕り可申候間、塾中作事等の事竹崎・河瀬より内藤迄申遣候間御承知可被下候。新宅爐等之事是又同斷、其外是より申上候程之事も無御座候。罷歸候てさし支へ無之様何も御見込に御世話被成下度奉願候。
おいつ衣類は染方等夫々申付候。將又土産物杯段々用意仕候。此節は何ぞ言上之筋も無御座候。何も松平歸國之上い才可申上候。何に不遠、懸御目可申、樂さ無限御座候。以上。

十一月九日

平四郎

御母様

横井小楠遺稿

二七七

至誠院様
おいつどの
おつせどの

尙々此節は外に書状も遣し不申、何方にも可然御傳へ可被下候。以上。

(横井時靖藏)

七九 嘉悦市之允へ

安政五年十二月十九日

小楠在大阪
嘉悦在京都

市之允は肥後藩士、使番・鐵砲頭、京都留守居を勤め、文久元年十二月隠居。小楠門下の氏房は其の嫡男。本書は小楠が越藩に招聘せられてから第一回の歸熊途中、大阪から京都留守居なる嘉悦に書き送れるもの。

一書拜呈仕候。愈御安康に被成御勤、珍重之至に奉存候。然ば私儀去る十五日福城出立今日大坂に着仕候。此節は是迄之御禮に上京罷出申心得に御座候處、途中より外邪相患、何分歩行出來不申候て乍心外御無禮仕候。誠に段々御難題に相成厚忝々、拜謝難申盡奉存候。乍此上熊本・福井兩方取遣書狀御届方之儀萬々奉希候。明日は乗船仕筈に大樂御察可被下候。此段御斷御禮迄申上度、餘は從熊本拜呈可仕候。何も略仕候。以上。

十二月十九日

横井平四郎

嘉悦市之允様

尙々時分柄御自愛可被成候。櫻田氏に別呈不仕、可然拜謝御同様被仰述可被下候。以上。

(赤星陸治藏)

安政六年

八〇 宿許へ

安政六年五月十四日

小楠在大阪

第二回の招聘に應じて越前に赴く途中、大阪よりの書面。

從大坂呈上仕候。被遊御揃益御機嫌能奉恐悦候。隨て私事去る四日晚方下關出船仕、相應之風筋にて十二日に大坂に着仕候。上下夫々何之申分も無御座壯健に罷在申候間御安心被成可被下候。大坂には段々用事有之中二日程到留仕、明十五日に此許出立仕筈にて、福井には廿日に着之積に御座候。既に福井屋敷より早便にて申遣候間彼方にては十六日にも知れ申、定てにぎぎ敷相待候事と奉存候。播州舞子にて田浦武膳に逢申候。定て武膳罷出可申上候。左平太・倫彦に約束之下緒を遣し申候、大小さび不申候様手入可致候。殊之外多用にて細々申上候事出來不申、何も不遠福井より萬々可申上、先大坂着迄呈上仕候。以上。

五月十四日

横井平四郎

二八〇

御母上様

至誠院様

おいつどの

おつせどの

尙々出立前左平太に申聞候事を失念仕候、此度養子願いたし置候間不遠相濟可申候。左候ても私存念御座候間やはれ是迄通り叔父・甥之心得にて可罷在、養父・養子は表向迄にて御座候間左様御申聞可被下候。以上。

(横井時靖藏)

右書状を受取りて母は左の書面を小楠に送つてゐる。

母より

文にて申入候。いよく御かわりなく御つとめ被成、何により御めで度御うれしく悦申す事どもにて御座候。留守内も私も初外に子共までもみな何の申ぶんも御座なくくらし申候、御あんしん下され候。さ候へばくらしより大坂よりの御手紙相届候。舟中つゝがなく候段うけ給り大きに、あんしんいたし、悦さつそくみきども上申候。留守何ぞ心ほそき事は御座なく候へども長々雨ふりに付度々大水にわこまり入おそろしき事にて御座候。水あそそれはくそまつなる事にて御座候。所々かへねくへあとつち斗にてさいゑんも出来不申、ふじゆうなる事にて御さ

候。なすびもいまだなり不申、すいくわ、うり何程に御さ候や、これを子共初のこらすたのしみにて居申候。暑に入よふく四五日天氣はれ上申候。其御もとは何程に御さ候や。次第にあつさに相成すいぶん御いたみなき様御つとめ被成候、夫のみく私もし事も朝夕いのり申す事どもにて御座候。私もし事もたべ物よふじん第一にくらし我身からだを日にくともりいたし候ほどくらし居申候、すこしも御きづなき様御つとめ御ほよふ第一御くらし被成候。いろく申遣し度事山々御さ候へども目わるくふでふかないゆへ、御あんしんのため私もしふでにてあらく申残し候。

六月二十四日

はより

平四郎殿

尙々水道もいづれもかわり不申候。

(横井時靖藏)

文中小倉よりの小楠の手紙は見當らぬ。

八一 嘉悦市太郎へ

安政六年五月二十二日

小楠在福井
嘉悦在熊本

一書拜呈仕候。愈御安康に被成御入、珍重之至に奉存候。随て小生海陸無別狀一昨廿日に此許到着仕候、御安心可被下候。先日出立前は追々御來訪、忝々奉存候。
御大人様去月十九日かに御出立被成定て早々御到着と奉存候。久し振之御休息にて御歡娛想像仕候。
乍憚可然様被仰上可被下候。

横井小楠遺稿

二八一

到着昨今晝夜來客にて誠に寸暇無_三御座候。此許一體無事安穩にて御座候。江戸表も 中將様御月代。御庭廻り等御免に相成申候。京師を初め囚人江戸にての御吟味尤去年降 勅之一件に關係いたし、初發 寺社御奉行板倉周防守殿御吟味懸り被_三 仰付、然處板倉公は至極寛宥の所存にて大老と合ひ兼直に御 役御免、其跡何某殿_{姓名} 是又板倉公同様之了簡之由にてどふか寛宥之沙汰に落着いたし可_レ申相聞申候。尤近來に至り水府安嶋彌次郎被_三召捕_二御預人に相成候。安嶋は老公御側御用人、當時は御役御免にて罷 在申候。水は中々嚴重にて誠に大困窮にて御座候。越前は昨春橋本左内上京いたし候迄にて、其以來江 戸邸よりも御國許よりも一切京師に懸り合無_レ之候故、降 勅之一件に關係いたし不_レ申候。其段は漸 々明白、幕府もよ程疑惑解申候由、橋本も都合三度御呼出し有_レ之迄にて何之御模様も無_レ之、是は不 遠無事に相成可_レ申候。

外國交易一條 幕議今以落着不_レ仕候。金川を改め横濱にいたし度との相談アメリカ合點いたし不_レ申 候。是も必ずマケ公事と被_レ存候。何に江戸前開港不_レ遠候間、其節は落着可_レ仕候。

此許よりの宿狀大坂松屋に頼み仕出し候處大に都合悪しく、届方及_三延引_二候のみならず或は紛失も仕 候間去秋末比よりは京師に達御大人様方御難題に罷成申候。此節も尙又御難題に罷成申度櫻田へは頼 み遣し、賢兄御名當にて仕出し申候間近比以御難題千萬に奉_レ存候へ共沼山御届方吳々奉_レ希候。尤沼山 へは其旨申遣候。熊本通ひの節は御宅に罷出候様心得させ申候、吳々奉_レ頼候。着足下にて甚多用にて何

方にも書狀出し得不_レ申候。坪井社中可_レ然御傳致可_レ被_レ下候。此段迄、何も近々拜呈可_レ仕候。已上。

五月廿二日

平 四 郎

市 太 郎 様

尙々御母堂様初御惣容様吳々宜敷奉_レ願候。_(石五郎)三岡初何も無事にて罷在申候。已上。

(岩崎左文藏)

八二 宿 許

へ (追啓)

安政六年五月二十七日

小楠在福井

この本文は見當らぬ。第二回應招福井入をなして間もなきもの。

追啓仕候。此許梅雨よ程強く御座候處昨日より漸々晴に赴、最早格別之雨には相成不_レ申事に被_レ存候。 着以來來客打續一向に寸暇無_三御座_二候。然し大分居り合申候。

至誠院様御羽織并内藤はおり染直し今日こふ屋に遣し申候。七月には府中之面々熊本に參り申候間其 節にさし上可_レ申候。

壽加に約束之帷子二重染もぐさがすり手に入遣し申候、餘りよすぎ可_レ申候。何分奉公十分相はげみ可_レ 申御申付可_レ被_レ成候。此段迄追啓仕候。以上。

五月二十七日

横 井 平 四 郎

至誠院様
おつせどの

(横井時靖藏)

八三 宿許へ

安政六年六月十九日 小楠在福井

一書拜呈仕候。先以奉_(從者)始_ニ御母様_ニ被_レ遊_ニ御揃_ニ益御機嫌能奉_ニ恐悦_ニ候。私も聊相替り申儀無_ニ御座_ニ候。水野下々迄壯健に罷在申候間御安心可_レ被_レ下候。唯々晝夜寸暇無_ニ御座_ニ誠_ニに多用多客にて困入申候。明日にて着以來三十日に相成、夜九ツ前_(十二時)に寢候事纔に一夕有_レ之、其餘はいつも八ッ比_(午前二時)に相成申候。夫故例の酒もとんと元氣付迄にて腹内宜しく何之申分も無_ニ御座_ニ候。近日に驚うち坏に出浮申候筈にて其用意仕申候。三岡熊本御用被_ニ仰付_ニ八月初に此許出立仕筈にて御座候。下關に少は引懸り可_レ申候。何に九月中には沼山津に參着可_レ仕候。榊原は江戸御留守居助役被_ニ仰付_ニ去る十六日に此許出立仕候。歸着以來纔に三十日餘罷在り、又々東方に參り申候。染直しもの夫々出來仕居候へ共三岡罷出候節に差上可_レ申候。左平太・友彦彌讀書・習書出精と存申候。書物類土用ぼし失念無_レ之様、具足も同様、且又鐵炮・刀等手入間斷無_レ之様存候。小法主彌元氣宜しく盛長可_レ仕、出立以來五十日餘に相成今比は足も丈夫に相成奔り廻り可_レ申候。此許つむぎ嶋大分出來中々

上品にてお(姓)いつ(姓)杯に見せ候へば飛び上り可_レ申候。三岡參向之節乍迷惑_(泰吉)一反進じ可_レ申候、相待可_レ被_レ申候。此節内藤列に紙面仕出不_レ申候、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。何も略呈仕候。已上。

六月十九日

横井平四郎

御母様

至誠院様

おいつどの

おつせどの

尙々昨今はよ程暑に相成申候。御許さぞかしと奉_レ存候。乍憚御自愛被_レ成度、夫のみ奉_レ存候。八月九日御仕出しの御状は先日到着仕候。彌十郎道中より又々お(馳)これ煩ひ、漸四五日起き上申候。其外は誰も病付不_レ申元氣に罷在申候。以上。
(横井時靖藏)

八四 矢島恕介へ

安政六年七月二日

小楠在福井
矢島在江戸

矢島は越藩士で、安政四年明道館都講となり藩政にも參與した。

去月廿四日の御状相達、忝拜見仕候。先以 御兩家 上々様益御機嫌能奉_ニ恐悦_ニ候。隨て愈御安康に被_レ成_ニ御勤_ニ珍重之至に奉_レ存候。扱今般罷出候儀に付縷々被_ニ仰下_ニ忝々奉_レ存候。如_レ命人事萬變一とし

横井小楠遺稿

二八五

て不可_レ期、唯々御自愛專一に奉_レ存候。九州之趣且此許之様子等は榊原氏より夫々御承知可_レ被_レ成略仕候。御許 廟堂之人才一に如_レ高論_二推量仕候。正俗共に一偏に落入互に相争候世界にて中々中正之條理分り可_レ申様無_レ之、二千歳之氣習無_レ致方_二次第に御座候。乍_レ然西洋面々追々入込候へば不_レ遠人情世態漸々分り可_レ申、是のみ樂可_レ申候外には誠に所分無_レ御座、困入申候。尤今日に至り内は水府之亂、外は外國に被_レ押懸、_一廟議誠に大困窮に候へば自然と他人の了簡を聞度心得には相成居可_レ申、然し夫れとおし出し候事は夢々有_レ御座_二間敷、有志者心得罷在候事に奉_レ存候。
(藤左衛門)千本氏御壯健に奉_レ存候、可_レ然御傳致可_レ被_レ下候。御許殊之外之大暑之由、此御許は去夏通りにて雨勝に有_レ之、格別暮し兼る程之暑には相成不_レ申、三ノ丸例の蚊夥敷晝も出候て仇を成し大困窮に御座候。何も替候儀は無_レ御座_二候。拜復迄艸々、餘は付_二後雁_一申候。

七月 二日

平 四 郎

恕 介 様

尚々御端書之趣忝々、故郷老母初何も健強にて罷在、安心仕候。例の御好物は如何定し行れ候事に奉_レ存候。小生近日た_レんが_レい_レ差起り一滴も給られ不_レ申、雷菴先生門下と罷成御一笑可_レ被_レ下候。
(後力)
來禁酒、下_レ今相續き珍重に御座候。此御許に罷出候節大坂にて丹釀相と_レのへ、三國廻しの手數致し置候處近日に着いたし候趣平瀬氏より別に相承、(長谷部甚平)丁度長谷氏も小生同様た_レんが_レい_レにて引入に相成居候間一絶を贈り申候。

同病一句不_レ把_レ杯。閑分_二茶品_一亦悠哉。呵々何事酒魂動。人道丹釀入_レ港來。

(小楠遺稿)

八五 宿 許

安政六年七月八日 小楠在福井

沼山津之者罷歸り候間一筆申上候。被_レ遊_二御揃_一益御機嫌能奉_二恐悅_一候。隨て私事相替り不_レ申下々に至り候迄壯健に罷在申候間御安心可_レ被_レ下候。此許梅雨後日々雨勝にて漸今日晴候て暑中之模様と相成申候、夫故是迄格別之暑さにては無_レ御座_二候。御許定て今程は格別之暑と被_レ存、奉_レ始_二御母様_一如何御暮し被_レ成候哉奉_二想像_一候。左平太・友彦は日々川にて暮し可_レ申、又法主申分無_レ之壯健に盛長いたし候事と何かと思ひやり申候。
四五日以前に書狀差上申候てい才之事は認置き申候。其内においつに紬嶋遣し候段申置候、其嶋一兩日中に手に入り申筈にて及_二吟味_一申候。十分宜敷品可_レ遣候間三岡參りを相待可_レ被_レ下候。
三岡は八月末にて可有_レ之候。
最早盆も近まり日の過ぎ候は扱々速成ものにて來月仁十郎一周廻に相成、何角思召被_レ出候御事に奉_レ存候。何ぞと存候へ共夫も出來兼、二朱一つお鶴(仁十郎の姐)に遣し申候間菓子にても何にても供へ吳候様御傳へ可_レ被_レ下候。

網田燒茶出し出立前に頼み置候處出來兼、嘉悅出立之節相頼送り吳候様安兵衛(河橋)に頼み置申候。然處此許

にて先づ不用にて御座候間留守に御留置き被_レ成候様に奉_レ存候。い才の事は先便に認申候間何も略仕候。以上。

七月八日

横井平四郎

御母様

至誠院様

おいつどの

おつせどの

(横井時靖藏)

此の手紙の一隅に老母の筆にて「藤四郎持参手紙」とある、文中冒頭の沼山津の者とは藤四郎であらう。

八六宿許へ

安政六年七月二十五日

小楠在福井

一書奉呈仕候。秋暑之折柄奉_レ始_ニ御母様_ニ被_レ爲_レ成_ニ御揃_ニ益御機嫌能奉_ニ恐悦_ニ候。隨て私儀相替り不_レ申、下々迄無事にて御座候間御安心可_レ被_レ成候。

五月廿五日・六月十日之御狀一同に到着拜見仕候。其砌迄は大坂狀着仕り不_レ申、藤島着にて大坂迄之様子御承知被_レ成候段、大坂狀は其節^(前出)三淵殿下りにて有_レ之右家來に頼永嶺當にて遣し申候、定て到着と

奉_レ存候。五月之洪水驚入り申候。綠川・加勢川筋所々堤切有_レ之水害夥敷御座候段々承り笑止千萬に奉_レ存候。此許も雨は大分強く御座候へ共左程之大水は出不_レ申、水害は一切無_レ之候。當月初よりは漸々晴天に相成、よ程之暑さにて御座候間田畑共に十分の出来と申事にて御座候。三岡石五郎外に奈良茂登作兩人御國許・長崎之御用にて來月三日比にも此許打立申筈に御座候。大坂・下關にも段々用事御座候間途中引き懸り可_レ申、長崎仕舞候て御國には罷出候筈にて、何に九月中に到着と奉_レ存候。おいつ奉書嶋先便に申遣候通り三岡に頼み置候間不_レ遠着いたし可_レ申候。其外富田・萩・須佐美等の註文も同様にて御座候。

熊本引き出之事私罷歸候上と一通御咄合申置候へ共相應之屋敷御座候へば一刻も御打立被_レ成度奉_レ存候。右に付て三岡に内談仕置候間三岡着之上金子は御相談可_レ被_レ成候。將又身分相應之屋敷に候へば餘りせ_レば^(狭く)有_レ之とも行れ不_レ申候間三百石以上之屋敷にて無_レ之ては難_レ叶事に付、過坪之處は越前より御頼にて書生相詰候筈に付身分相應之屋敷にては何分行れ不_レ申段、牛右衛門杯より屋敷方に内談いたし候へばさし支無_レ之様に取り斗可_レ申事と奉_レ存候。三岡に内談は此節金子百兩程と咄し合置申候。其外は彼の三十兩も有_レ之候間拾五貫目位之屋敷は買れ可_レ申候。其上普請作事等は安兵衛杯に御相談何方よりぞ御かり被_レ成候て不_レ苦候。只今之沼山津屋敷はうり拂候方可_レ然、どふぞ相應之相手御座候へかすと奉_レ存候。根段は其御許之御見込にて少々易く御座候て一刻も早く除き方可_レ然被_レ存候。熊

本之場所色々考候へば坪井・山崎杯餘りまん中は中々客にたまり不_レ申候事にて却て邊鄙之方可_レ然か、左候へば本山古庄屋敷は随分廣く有_レ之、只今之處に表座敷に玄關等作り續き候へば住れ可_レ申哉、屋敷之外に二段位之地も添ひ居候由是も恰好と被_レ存候。土藏は無_ニ御座_一様に承り候間格別根段も高くは有_ニ御座_一間敷被_レ存候。いまだ除き不_レ申候へば御懸合被_レ成度奉_レ存候。然し餘り高く不_レ釣合に候へば夫はいたし方無_ニ御座_一相止候方當然と奉_レ存候。自然根段も相當に候へば御求被_レ成候方可_レ然奉_レ存候。沼山津之屋敷はどふなりと成り行付き可_レ申候、いかにも御世話之程奉_レ希候。御求に相成候筋に候へば屋敷之東西南北之廣狭より家居之處委敷圖面にいたし一刻も早く御遣し可_レ被_レ下候。左候へば作り續仕方杯此許にても相考へ差圖いたし差出し可_レ申候。其外安藤屋敷可_レ然候へ共當時奉職之事にて除け不_レ申と被_レ存候。其上家居よ程古く殆ど百年にも相成候と承り申候蒲池喜太衛門普請の由處柄宜敷候へば藏も有_レ之拾五貫目より下直にはうり申間敷、左候へばとりつくろいに取り懸り候へば所謂古家の造作と申ものにて中々大事に相成可_レ申候。然し是も是よりの了簡にて敬不_レ破之助杯了簡も可_レ有_ニ御座_一御聞合被_レ成度奉_レ存候。其外は心當無_ニ御座_一、其御許にて御相談之上可_レ然屋敷に候へば決して此許迄御取り遣には及不_レ申、御取りきめ被_レ成候方勿論之事に御座候。沼山津屋敷はうり拂候方重々可_レ然、別莊之事は私歸り候上何方にぞ見立可_レ申候。右之通りにて牛右衛門・敬之助杯に御相談可_レ然様御取斗可_レ被_レ下候。右之段迄拜呈仕、餘は略仕候。以上。

七月二十五日

横井平四郎

御 母 様
 至 誠 院 様
 お い つ どの
 お つ せ どの

尙々いまだ殘暑強_ク何イッレに來月中旬比迄仕付候へば冷氣に相成候方と奉_レ存候。随分々々御病氣無_ニ御座_一様御保養專一に奉_レ存候。私も何も申分無_ニ御座_一至て壯健に罷在申候。彌十郎おこれ漸_ク近日快く相成候へば尉從者作引き續同病相煩一日越にふるひ申候。然し至つての微邪にて何に近日に落し可_レ申、此許はおこれ殊の外行れ候へども至ての微邪にて丁度葦北邊之模様と同斷にて御座候。中將春政様御事公義向にて殊の外御解方に相成、既に當月初越前守様御老中方御廻勤御免許の御願被_レ差出_レ候間何に不_レ遠内に平生通りに御成り被_レ成候事に相樂罷在申候。此段附呈仕候。以上。

(横井時靖藏)

八七 荻角兵衛へ

安政六年八月四日

小楠在福井
荻 在熊本

一書奉呈仕候。秋暑之砌愈御安康に被_レ成_ニ御勤仕_一、珍重之至に奉_レ存候。随て小生無事依_レ舊罷在申候間御

安心可被下候。先便にも略得貴意候通り三岡石五郎外に奈良茂登作同道來る九日に此許發足、下關に暫到留長崎に參り、此處用向濟候て熊本に罷出候筈にて途中引き懸り可申、何に九月末・十月初には熊本に參着可仕候。此節は貿易之用事に付て長崎表重に罷越申候。御國許にて是等之咄合は何方も遠慮いたし閉口之相談仕候間定て何方にても右之咄合は不仕事に御座候。然處賢兄には内實御打明し萬事御見込承り申心得に御座候間左様御含にて無御遠慮被仰談一度奉存候。三岡はよ程此等之筋には熟し罷在り見込も一定仕候。江戸表之事情も夫々御承知可被成候。とても如此大變動之世界貿易之事は着眼之大事と奉存候。何分得斗御咄合被成下候様萬々奉祈候。此段迄拜呈、餘は略仕候。已上。

八月四日

平四郎

角兵衛様

尙々時分柄御自愛可被成候。五月洪水之事申參候。扱々大變驚入申候。此跡拂除方非常之御手入と奉存候。ハカマノ扱は尤大變如何 廟議落着可仕哉、拙意にては水田は一切相止め上メン下メンの香水迄之趣向にて脩覆有御座度、左候へば兩所に新村所々出來、荒茫之野原御開被成候へば後はいか斗之大利かと被存候。布田當りにて百丁・二百丁之水田實は何之利益とも難申、畑にて置き候方却て後日之仕合と奉存候。然し是は爲識者可言俗吏之非可_(下津休也)知處也、呵々_(新堀)。

元田列に可然御一聲奉希候。已上。

横井平四郎

荻角兵衛様

(一瀬彌太郎藏)

八八 甥左平太・倫彦へ

安政六年八月四日

小楠在福井
二甥在熊本

小楠第二回の應招にて福井に至りし時の往復書。書込が小楠の書信。

書入申遣候

一筆奉啓上候。時下益御機嫌克可被遊御座、恐悅之御義に奉存候。御道中九日經りの御船にて先月十二日大坂御着岸之由、重疊目出度奉祝候。此元祖母様初皆々いたし候。兄弟壯健珍重々々、大分はか取悅申候。此上尙以出精無間斷様祈申候。御無異に御過被成候。私共も不相替出精仕、通鑑三十卷目を讀居、倫彦は史記讀て讀み終り申候。尊慮易被思召可被下候。大小鐵炮、繪并書物之手入無失念様に存候。定て日々遊扱大坂より結構之下緒二懸御土産として披爲拜領、重疊難有頂戴仕候。先は御旅中御伺之稽古と被存、倫彦水練達者に相成候と存候。隨分々々何事も心懸け出精第一にて有之候事。且御禮迄申上度如是御座候。已上。

六月二十五日

横井倫彦

横井小楠遺稿

二九三

横井左平太

御伯父様

八月四日認

平四郎

左平太殿

倫彦殿

(横井時靖藏)

八九姪逸子へ

安政六年八月五日

小楠在福井
逸子在熊本

六月廿五日之御ふみ相達致_ニ披見候。奉_レ始_ニ御祖母様益御機嫌能其外小兒に至る迄壯健相替り不_レ申候段大に安心いたし申候。此許下々迄壯健何之申分も無_レ之安心可_レ被_レ下候。坂口・竹部一同に奥さま(不渡敬之助(横井牛右衛門))歸りに相成扱々笑止千萬に候。且又坂口御袋さま熱病如何と案じ申候。平生元氣に候へば定て快方と存申候。又雄元氣宜しき段安心いたし候。出遊びにて却てよろしく可_レ有_ニ御座候。足も今程はよ程丈夫に成りし事と被_レ存候。

先便に申遣し候袖嶋此節三岡に頼み廻し候間不_レ遠到着いたし可_レ申、氣に入候へかしと存候。

其許ころりは流行いたし不_レ申候や。此許は近日少々づゝ有_レ之候へ共格別之事には無_レ之、安心可_レ被_レ下候。久々雨も降り不_レ申、殊之外暑にて候へ共十五日後に至候へば秋冷に相成可_レ申、今暫之間暮し兼

申候。此段迄申遣度、何も後便に可_ニ申入候。以上。

八月五日

平四郎

おいつどの

(横井時靖藏)

九〇宿許へ

安政六年八月五日

小楠在福井

前記六月二十四日付の母よりの書状(二八〇頁)を受取りてから認めたもの。

六月二十四日之御書状到着、難_レ有拜見仕候。先々奉_レ始_ニ御母様被_レ遊_ニ御揃御機嫌能奉_ニ恐悦候。隨て私事聊も申分無_ニ御座無_ニ事罷在申候間御安心被_レ成可_レ被_レ下候。

坂口・竹部兩奥様離縁扱々笑止千萬驚入申候。尤竹部は私出立前より甚以氣遣しく、私も離縁可_レ然と咄合申候位にて今更何とも可_レ申様無_ニ御座候へども、坂口は眞以驚入申候。是迄之模様夫婦之間是と申子細も見へ不_レ申十分宜しく御座候間、元田列より却て笑い申位にて候處にわか離縁に相成、千里外より承り候ては何とも合點參り不_レ申、敬之助も若者ながら一人物にて卒爾成る男にて無_レ之、彼は一切合點參り兼何に唯事にては有_レ之間敷、外に餘症を生じ候ものと相考申候、扱々笑止千萬之事に御座候。五月之洪水近十年無_レ之大水承り候て驚入申候、何に今以其跡そふち御座候事と奉_レ存候。先便七月廿五日比

申上候熊本御引出此許にて嘆願いたし候處勿論子細無之、來る九日に三岡石五郎出立三岡は大坂に五日斗り下關に十日斗夫より長崎に参りに廿日斗も到置夫より熊本に参り候節にて熊本に罷出候事は九月末か十月初に相成可申、三岡い才承り金子百兩程は引出之用意に持參仕候間其前に屋敷御吟味被成、相應之所御座候へば一刻も早く御引き出被成候様奉存候。大抵考候處拾五貫目位之屋敷御求被成候へば三岡持參之百兩外に出立前の殘金三十兩御座候間丁度其段之屋敷は買れ申、左候へば其上之造作或は作り續き等に五六貫目も入り可申、是は安兵衛坏に御相談御かり被成候様奉存候。沼山津屋敷は可然相手御座候へば安くにも御うり拂被成可然奉存候。是も五貫目程には相成可申哉。引き移より普請造作迄二十貫目餘り懸り候へば十分之屋敷と奉存候間其御心得にて御吟味被成度奉存候。尤可然屋敷御座候へば此許迄御取遣は決して御無用にて、其御許にて御決定被成御引き移被成候方重々宜しく奉存候。先便に本山古庄方之事申上候。彌十郎事(從者)三村傳之助手許に居候間追々古庄には参り一ト通り覺へ候を承り申候處、家之立様御勘定頭の了簡にて私引き移り候へばよ程立て替へ不申ては難叶様に被存候。然し彌十も十分には覺へ不申あらましの次第にて御座候間得斗御しらべ被成、都合宜敷と見へ候へば御決定御引き出被成度奉存候。其外何方たりとも至極宜しき屋敷は此許に御懸合に決して及び不申候、御見切にて御引出被成度萬々奉存候。とても千里を隔候て御取り遣は馬鹿らしき事にて少も御懸合無之様萬々奉存候。沼山津はうり拂ひ方可然奉存候。屋敷坪百五十石にては何分治り不申、其儀は越前より追々書生等御頼にて

罷越候間増坪願にて相濟み可申候。三岡着之上御相談可被成候。尤此許其筋も夫々御役方相談いたし置候事に御座候。

坪井觀音坂下小原舊宅も拂候様に覺申候。是は家のほねは随分宜しく、作り續き等いたし候へば可然被存候。小原拂の節は十貫目位かと覺申候。藏も御座候。

安藤屋敷は拂候にては有御座間敷、所柄は十分宜しく御座候へども極々古家にて如何と奉存候。

山崎内にては木野屋敷拂共いたし候へば可然奉存候。是は隼太坏建方かと被存候。

右之外一向心付き不申、本山古庄屋敷所柄は可然見込申候。一ト間坏は必ず建續候覺悟にて御懸合被成度奉存候。内藤も本山にて候へば近邊に屋敷を立長々居住も出來可申候。乍去餘り過當の根段にて候へば作り續等もいたし候事にて御止方可被成候。先は此段迄拜呈仕候。餘は後便に可申上候。以上。

八月五日

横井平四郎

御母様

至誠院様

尙々此許近來は雨一切降り不申、殘暑殊之外強く暮し兼申候。御許如何と奉存候。然し今より十日餘も暮し候へば必ず秋冷に相成可申候。

御母様御食等彌以御養生被_レ成候段恐悅千萬に奉_レ存候。私も酒杯十分制當仕、何方に參り候ても五七杯迄にて相止申候。夜酒も同様に御座候。夫故腹合も極々宜しく、三度々々の食も少し待兼候位に御座候。

坂口御袋熱病如何に候哉案勞仕候。兼て元氣人にて必ず御快方かと奉_レ存候。

昨年のコロリ病京・大坂邊流行此許も近日少し有_レ之、いまださしたる事にては無_ニ御座_一候。此許は醫者殊之外上手にて大抵生き方に付き申候。其上格別之事にても無_レ之、御安心可_レ被_レ成候。熊本如何と案し申候。沼山津方角は昨年もやはり不_レ申、定て當年も同様かと奉_レ存候。

屋敷は何方に御定め被_レ成候も吳々も此許に御懸合に及び不_レ申、さし圖は坪數より間數等一切委敷御認させ被_レ成急々御送り可_レ被_レ下候。此段迄略上仕候。以上。

追 啓 (一)

追啓仕候。平瀬より御約束仕置候御拜領之花葵御紋附黒色染にして羽織出來、此節三岡持參にて御座候。是は此許官府より御進物に御座候。牛右衛門・敬之助離縁に付紙面遣し申筈にて候處殊の外多用に仕出得不_レ申候間宜しく奉_レ希候。右兩人には屋敷之事は御相談被_レ成度、私よりも頼み越申候段被_レ仰向_レ可_レ被_レ下候。以上。

七日

平 四 郎

至 誠 院 様

追 啓 (二)

返すく先便申上候かんざし出來、三岡に託し御銘々様にさし上申候事。

追啓仕候。本山古庄屋敷は在地にて御座候哉、承知不_レ仕候。在地にて候へば御見合可_レ被_レ成候。將又餘り御急ぎ被_レ成候へば宜しき屋敷手に入兼可_レ申候。今年より來春に懸け随分御吟味被_レ成候方重々可_レ然奉_レ存候。私も様々用事多く歸國も來春には必ず相成可_レ申候。是非歸國まへと申にても無_ニ御座_一候。重々御吟味再び屋敷替へいたし不_レ申候様吳々奉_レ存候。

小原舊屋敷は出立前に拂候様に承り申候。觀音坂下は家居少し狭くは御座候へ共私(新屋)や坏作り續長屋等脩覆いたし候へば元來骨柱は宜しく御座候間相應之屋敷と相見へ申候。其上汲水も有_レ之是又便利にて御座候。藏も御座候て小原拂候節拾貫目位と存申候間格別高くも無_ニ御座_一候。何分御吟味被_レ成度奉_レ存候。

三岡九日に打立に相成府中迄參り候處其跡にて老母はまた六十に
は不相成コロリ病發り候間其夜引き返し段々養生いたし候へば漸々快き方にて大悅にて御座候。此上變さえ無_ニ御座_一候へば活路に相違無_ニ御座_一候。兒玉かん齋四五日相煩ひ同病にて昨日果申候、是は療治手おくれにて甚以殘念千萬いたわしき事にて御座候。當月朔日比より流行にて町家坏には是迄二三十人斗も相果候へ共御家中は至て少く八九人も相果

申候。只今通りにては格別のはびこりには至り不_レ申仕合にて御座候。何に今より十日斗もいたし候へば相止可_レ申、然し食養生等末々に至り候迄嚴重に仕、肴類は一切給不_レ申、其上半井仲庵・笠原良策杯十分之良醫有_レ之手おくれさへいたし不_レ申候へば決てころしはいたし不_レ申誠に仕合にて御座候間御安心可_レ被_レ成候。御許之儀一向沙汰承り不_レ申、どふかこふかと案申候、何分々々御自愛專一に奉_レ存候。先此段追啓仕候。以上。

八月十一日

平 四 郎

至 誠 院 様

(横井時靖藏)

右二通の追啓が八月五日付書簡のものでなく其の後の書状のものならばその本文は見出し得ぬのだ。右文中快復しさうであった三岡の母は薬石効なく八月二十七日死去し、三岡は九月十八日に福井を出發して九州に向つた。

九一 大木三作へ

安政六年八月二十六日

小楠・大木
在福井

大木三作は前出三寺三作のことである。

近日は十分之秋冷に相成、愈御安康奉_レ賀候。扱御養方御引越、何角御世話被_レ成候と奉_レ存候。將又當分御引入に御座候へば御暮し兼可_レ被_レ成候。先日より御見舞に書状呈上可_レ仕之處、何角押移御無禮仕候。

流行病も今暫之事にて、随分御自愛可_レ被_レ成候。小生も唯々自養迄に罷在り、御懸念被_レ下間敷候。右御見舞迄略呈仕候。以上。

八月廿六日

横井平四郎

大木三作様

(長野幹藏)

文中「御養方御引越云々」とあるは三作の自筆履歴書に「安政六年(時年三十九)瓜葛の親を以て出で、大木氏(福井藩士祿百五十石)を嗣ぐ」とあるそれを云つたものである。

九二 榊原幸八へ

安政六年九月十一日

小楠在福井
榊原在江戸

榊原は越藩士で明道館學諭、小楠在福中よくその面倒を見た。

先便御書狀被_レ成下、忝々拜見仕候。先々秋冷之砌愈御安康被_レ成_レ御勤、珍重之至に奉_レ存候。於_レ此許_レ御留守様御替り無_レ御座、隨て小生依_レ舊無異に罷在申候間御安心可_レ被_レ下候。然ば兩執政御出府にては追々御咄合御座候事と奉_レ存候。御許諸君子御都合宜敷御座候段重々恐悅に奉_レ存候。兩執政も廿日比は御許御打立之御模様之由、何に不_レ遠得_レ拜顔_レ可_レ申候。此許之處は相替候儀も承り不_レ申候。唯々惡邪流行、誠に猛烈成る勢にて大に恐怖仕候。近日は漸々退除、何に十五日比にも到り候へば全く消散と被_レ存

申候。其御許は極々輕邪之趣に承り、萬々目出度存候。

水府一件等御聞書御送り被_レ下忝々奉_レ存候。扱々笑止千萬絶言語_一申候。乍_レ然以前風説承り候處にては三家之藉を下_レ御知行半減等之。幕議有_レ之趣に候處、今節之御仕置にては全く御家臣に罪を懸け候て、兩公之處は寛典に相成候様に相聞、責ての事かと奉_レ存候。安島列は誠に痛々敷事に御座候。京師囚人一條は何れ不_レ遠内落着可_レ仕候。右等落着之上にては、中將_(春嶽)御開冤も被_レ仰出_一候御事と被_レ存、何分指屈御待申上候。定て内輪之事情御聞繕被_レ成候御事と奉_レ存候。

加奈川交易等は彌以不都合之成り行にて可_レ有_一御座_一候。とても今暫之處は何も行れ候儀は六ヶ敷、扱々困窮之世界と奉_レ存候。清朝英との違亂如何相成り申たる哉、彌以戰爭之用意にて同盟列國申合候次第に御座候哉、風説にては英の女王も此度は出張、不_レ遠江戸海にも乗入候杯之趣も相聞、難_レ信次第に御座候へ共彼方にては二三年前魯王も佛に參り、英・佛は互に往來いたし候事英國史に相見へ、春秋之會盟之模様_一に御座候へば清・英戰爭と相成候へば必ず女王出張も可_レ致事と被_レ存候。此一條無事に治り候へば先は太平にて御座候へ共、戰爭に成行候へば日本必定之困窮と被_レ存候。如何之事情に御座候哉、御聞出之趣被_レ仰下_一度奉_レ存候。何も拜復迄、餘は付_レ後雁_一申候。以上。

九月十一日

榊原 幸 八 様

横井 平 四 郎

尚々時節御自愛之程萬々奉_レ祈候。小生も當節柄にて精進潔齋に罷在候。最早不_レ遠邪氣消亡可_レ仕、夫のみ相待罷在申候。矢島・千本諸君彌以御平安と被_レ存、御致聲可_レ被_レ下候。以上。

(松平慶民藏、榊原文書)

九三 下津休也・荻角兵衛へ

安政六年十月十五日

小楠在福井
下津・荻在熊本

小楠越前に在つて長岡監物(米田是容)の計報に接し悲痛に堪へざるも、絶交の間柄なれば心事を下津・荻兩人に書き送つたもの。

一書拜呈仕候。時下愈御安康に被_レ成_一御起居、珍重之御事に奉_レ存候。先以久しく御無沙汰に押移、御海容可_レ被_レ下候。然ば八月十日に候哉監物殿被_レ致_一死去_一候段申參り誠に驚絶仕候。扱々人事不定吉凶變態總て意外に出申候。於_レ御兩君_一別て御痛情之程奉_レ察入_一候。小生事御案内之通り近年間違_(アイダ)に相成候儀は唯々意見之相違にて其末は色々行き違に相成、時としては何やらん不平之心も起り候へ共於_レ全體_一舊相識之情態相替申様も無_レ之、平生之心は依然たる舊交したはしき思を起し候事は於_レ彼方_一も同然たるべきかと被_レ存候。況哉千里之客居にて此凶事承り、不_レ覺舊情滿懷いたし、是迄間違之事共總て消亡、唯々昔なつかしく、思はれざる心地に相成落涙感嘆仕候。誰之歌にて候哉

あるときはありのすさみににくかりきなくてそ人は戀しかりける

心情御推察可_レ被_レ下候。本より絶交之事に候へば二ノ丸_(長岡家)に弔詞申進候子細無_レ之、御兩君迄心緒拜呈仕

候。過ぎ去りし人は呼べども不可返、休也様へは別て御自愛專一に奉存候。小生も歸省暫之間は何も遊びに日を暮し候へ共、御國出立後は例の酒も制禁仕、此許に到着後尤以嚴禁を加へ、何方に參り候ても小酌五六杯に限り遂に微醉にも到り不申候。夫故腹工合も殊之外宜敷、近年に無之壯健に相成申候。此段爲御安心付呈仕候。何も御弔詞迄申縮候。已上。

十月十五日

平 四 郎

休 也 様
角 兵 衛 様

(熊本縣教育會上益城郡支會沼山津分會發行「横井小楠先生」)

九四 長谷部甚平外五名へ

安政六年十二月二十三日

小楠在熊本
長谷部外五名在福井

長谷部は諱は恕連、南村又は菊陰と號し、若きより藩に仕へ、累に諸奉行に歴任して藩政の内外に參與劃策し、小楠は彼の才識を激賞してゐる。千本は監察、土屋は執法、出淵は監察、高田は執政、村田は明道館幹事兼目付役で、皆越藩の有力なる人達。

一書奉呈仕候。各様愈御安康に被成御勤、珍重之至に奉存候。先以出立之砌は不一方御配意被成下、御厚情不淺御禮難申盡御座候。途中山野大雪にて案外急がれ不申、九日夜に入大坂に着仕候。十日・十一日風筋悪しく空敷滞在、十二日朝舟を出し大に順風を得百三十里之處三日にて十五日之朝下關

に着仕候。夫より晝夜不別急ぎ下り十八日に沼山に到着仕候。然處老母儀養生相叶不申、去月廿九日相果申候。誠に残念千萬中情御察可被下候。

奉別後は定て御出會種々御咄合御座候事に奉存候。誠に無存懸御別申候て、途中には御許之事のみ何角存出申候。歸着の上は不幸にて引入徒然に相暮し、何之事柄も無御座候。弔客杯に應接仕、日を送り申候。三岡氏先月此許被參、只今は長崎にて何に正月は又々被參候筈に御座候。其上得斗事情も承り、何角咄合申度相待申候。此節はさして拜呈申候儀も無御座候。右御禮且不幸御知せ迄言上仕候。餘は追々得貴意可申候。以上。

十二月廿三日

横井平四郎

長谷部 甚平様
千本藤左衛門様
土屋十郎右衛門様
出淵 傳之丞様
高田孫左衛門様
村田 巳三郎様

尙々御連名御免可被下候。此節は牧野氏(主殿介)・平瀬氏(兼作)に書狀仕出し不申候。甚平様より御致聲可被

下候。其外御懇意の諸君には可然奉希候。以上。

(松平慶民藏「千本文書」)

萬延元年

九五 宿 許

萬延元年四月十九日

小楠在福井

第三回の招聘に應じて福井入をして間もなき時の書面。前記書面に於て見る如く昨年十二月母危篤の報に接して歸國したがすでに死亡後であつたので、此の手紙からは母上様の宛名が無いも淋しいが、之に代つて二甥左平太・倫彦が宛名に加はることになつた。

一書奉呈候。被遊御揃益御機嫌能被成御座、珍重之御事に奉存候。私も何之申分も無御座、唯々日夜多用之上來客おびたしく中々困入申候。閏三月十一日の御狀去る十日に到着、難有拜見仕候。出立後は來客も少く御座候由、何角おさびしく可有御座候。又法主元氣宜しく候段悦入申候。何分乳は彌以のませ不申方重々可然奉存候。

倫彦より松虫も取り候段申入り悦入申候。此上新宅の西窓下之諸木(墓)かすらや草や取り方頼入候。其外大小・書物等之手入同様の事。くつわ・押懸け扱馬具段々買ひ求申候間何に幸便之節さし送り可申候。屋

敷替之事如何と奉存候、定て次之便には何とか御申越被成候と相待申候。

彌富註文何と申事相分り不申、御聞合くわしく書附にて紋形等も相添遣し候様御傳可被下候。奉書袖も先日申上候とは少しく下落いたし、只今にては一段壹兩一步内外にて御座候。

お逸註文之内當月末に幸便御座候間、染物出来いたし候丈はさし送申候。

長谷部方(正平)かすり御贈物、此許にては是迄無御座品にて殊之外悦にて、吳々御禮申上候様度々噂御座候。

泰吉・宗育に此節も書狀出し得不申、江戸表之事牛右衛門迄申遣候間、竹部(牛右衛門のこと)より借受見吳候様御傳言可被下候。此段迄拜呈仕候。以上。

四月十九日

横井平四郎

至 誠 院 様

左 平 太 殿

倫 彦 殿

お つ せ 殿

尚々此許雨勝にて不順に御座候處兩三日晴に相成、一重(肌着)はたぎ位(時候のこと)之身がんに御座候。是よりは又々雨に相成可申候。憚ながら御自愛專一に奉存候。何も申縮候。以上。

(横井時靖藏)

文中宗育とあるは小楠門下の野中宗育のことで、内藤泰吉と同じく醫師で俱に小楠の留守宅を預つて居た。

九六 熊本同社中へ

萬延元年四月十九日

小楠在福井
同志在熊本

櫻田の變一件につき水戸及び彦根の動靜を探りて報じたもの。

江都大變後今に御裁斷不_二相成_一候。其事之起りより一と通申候得ば一昨年 京都より 勅書を水府へ被_レ下候を返納致候様 幕府より嚴命有_レ之に因り發起致候。勅書は御國に老公去年御咎後は高松初三御末家(松平親胤)初より無_二之彦根方にて、専水府之御政事に被_レ携、夫のみならず當正月御老中安藤對馬守殿水府御用懸り被_レ仰出、是より彌以老公方之者共黜斥せられ候。扱 勅書之事 京師より 幕府に返納致候様傳奏より所司代迄被_レ仰出有_レ之由にて對馬守殿より當中納言殿(發給)に演舌に相成候處、水府之者共承引不_レ致候に付、尙又大老よりも直に御對談にて 京師より被_レ仰出候事に候へば返納無_レ之ては違 勅に相成候旨にて御責付有_レ之、是より水府國中議論二つに相分れ、返納之論は會澤恒藏説に本き候。去年の秋會澤より同家中豊田彦次郎に贈りし書狀。

御家にて 天朝を尊敬被_レ遊候は勿論に御座候處、御本家えも御恭順被_レ遊候思召全く義公之御遺意を被_レ爲_レ繼候御義と奉_レ存候。然處此節 天朝と 御本家と御違却之儀多く、危難を醸し萬一不慮

之儀有_レ之節 天朝へも 御本家へも御禮節を御盡し被_レ遊候儀至極之御場合と奉_レ存候。假令 朝命御座候共 御本家に弓を引候勢に相成候ては義朝の爲義を害し候類に近く候へば名教に於ても 東照宮・義公之思召に於ても如何に奉_レ存候。禮にも齊三月と有_レ之、冢子は本家之事にて高祖舊君に同様之喪服に御座候間、高祖舊君に弓を引候事は不_二相成_一次第に御座候。尙又 東照宮御保道を御立被_レ遊候他家とは御次第違に候へば萬一公邊より(此處)幾重にも御諫論如何様之御不興被_レ爲_レ蒙候共不_レ得_レ止事、決て 天朝へも 御本家へも干戈取らざる様之御決定御家中迄明白に相心得候様御仕向け、何方へ御對被_レ遊候ても御恭敬を御盡し被_レ遊候儀義之當然と奉_レ存候。假令兵を擧候ても孤軍天下之兵を受候ては所詮國家は無きものに御座候。不_レ得_レ止事候へば土地人民を御返納に至り候共義を專に被_レ遊候儀、仁之至義之盡る處にて義公讓國之御實意に相當られ可_レ然、決して干戈之手始は不_二相成_一候様に奉_レ存候。右之意味何卒 天朝へも 幕府へも兼て御通じ置に相成候様御所置御座候方可_レ然奉_レ存候事。

會澤此論至理至當間然無_レ之、老公御父子御同意にて 勅書御返納に相極候。然處大小天狗連當時五黨に分れ、大天狗、小天狗、奸黨、梅黨、立一切承引致し不_レ申、大天狗連の者共二百人程長岡江戸へと申處に出張し 勅書返納を相拒む。於_レ是當正月晦日老公より御直書にて御家中一統に被_レ仰出。

我等事昨年深愼已來國政向に携り不_レ申候へば勿論世上之事耳にも不_レ入候處、此度 勅書返納候様

傳奏より所司代迄被_レ仰出_一有_レ之候處大老より申聞有_レ之、尙又速に返納可_レ致旨直談有_レ之、安藤對馬守小石川にて中納言に面會いたし候節傳奏より所司代迄被_レ仰出_一候御書附中納言并家老共迄拜見爲_レ仕、此御書附之趣被_レ仰出_一候上は速に御返上不_レ被_レ遊候は、御違_レ勅に相成候間迅速御返上被_レ遊候様申聞候哉之由にて、早速返上可_レ仕儀には候へ共、中納言并家老初役人共は勿論家中一同名義之立候様いたし度との事にて夫々厚く手段を盡し候へども出來不_レ申候へば不_レ得_レ止事候間、勅命に依て 公邊に被_レ相納_一候と云證書を取り置き速に返納可_レ致との儀尤に存候。然處國中士民之中には 勅書返納いたし候事は一切不_レ相成_一とて、長岡に多人數出居候者之中には虚實如何に候へども我等にて一切返納不_レ相成_一様下知いたし候様又申立居候ものも相聞へ候。右は取り留たる事にては無_レ之候へども多勢長岡に出居候儀は無_レ相違_一相聞、第一往來之妨にも相成のみならず鎮撫之役人に對し否令或は上り下りの役人を妨げ彼是不作法等も有_レ之哉之由に相聞へ候處、長岡に出張いたし候へば名義之立候と云譯も有_レ之間敷、詰り家政向不行届に相當り、中納言不_レ相濟_一我等も慎之折柄對_レ公邊_一宗家敬上之素意士民之爲に取り失ひ候に相當り候へば、旁以早速引戻し可_レ申と役人共精々申諭候由之處不_レ致_一承伏_一ものも有_レ之哉に相聞へ如何之事に候。外々之義とも違ひ 天朝より返上いたし候様被_レ仰出_一候旨大老より申聞候上は速に返上不_レ致候ては不_レ相成_一、若於_レ相拒_一は 京師・公邊に對し不_レ相濟_一、家之安危にも拘り候程も難_レ斗候ては詰り多人數嚴重之處置にも至り可_レ申、左候て

は義理名分共に立不_レ申所謂血氣之勇とも可_レ申大きな過と存候。此處能々致_レ勘辨_一、篤實謹厚に必心懸け、主君家老初役人共申聞速に爲_レ致_一承伏_一候様精々談判いたし、御品無_レ滯迅速に爲_レ指上_一候様取扱可_レ申、彌以不_レ致_一承伏_一候者有_レ之節は不_レ得_レ止事嚴重申付候外有_レ之間敷候間、國中士民一人たり共嚴重申付候儀は歎敷候へば士民とても主君之舊恩を存じ我等教諭之處爲_レ致_一承伏_一候様にと存候。社稷之爲士民之爲心配之餘り申聞るもの也。

家老 共 初 へ

老公深く御心痛にて如_レ此被_レ仰出_一候處、天狗連之者共申立候次第は水戸御家之儀は 將軍家に被_レ爲_レ繼候御家柄、殊に尊王攘夷之儀は威義二公以來之御趣意にて御代々御繼被_レ遊、別て老公には是迄厚く思召被_レ爲_レ入候て弘道館記・告志篇を初め様々之尊著日本國中に傳播し兒童も奉_レ景望_一候上、外夷入港以來は明白正大之御建白毎々之御事に候。然に今日之勢 廟堂之諸有司一時偷安畏戰之俗情より彼が虚唱之勢焰に恐怖し貿易和親登城を差許し條約を取り替し繪踏を廢し邪教寺を建_レ「ミンストル」を永住爲_レ致等之件々實に 神州古來未曾有之國辱にて 祖宗之明訓孫謀に戻り候のみならず、第一 勅許も無_レ之儀を被_レ差許_一候段 天朝を奉_レ蔑如_一實に被_レ惱_一 宸襟_一候より御家之儀は兼て御依頼被_レ遊候に依て 勅許も御下に相成候へば、老公御父子に被_レ爲_レ於候ては天下萬民に被_レ對御面目無_レ此上_一御事故勅許之御受にも不肖之身 鳳詔を奉_レ受候儀誠に以一家之面目感激之至り筆紙に難_レ盡奉_レ存候。乍_レ不_レ

及幾重にも盡力仕成否は兎も角も追て言上可仕云々と被遊候儀は實以難有御受にて、御家臣之身に取りても感涙に咽候事に候へば不日に御傳達被爲有 公邊を御扶助被遊外夷を斥け威武を海外に輝し 神州之國辱を洗雪し天下萬民之愁眉を開候儀此時に有之候と奉渴望候處、存之外に御廻達之御沙汰も相止候のみならず井伊掃部頭等奸謀に被欺、今更 勅書御返納と申儀何様之筋にて可有之哉。若し又夷狄之一條今日之勢如何とも可被致様無之、とても 勅命之通りに御遵被成がたき御見込に候へば初發 勅命御拜戴之砌早速に御返納被遊右之次第御申述臣が力に及ぶ所にて無御座暫く時節を御待被遊候様被仰上候得ば是又不得止事之御所置と申べく、前條之通り 勅答既に被仰上候上にて今更御返納被遊候ては上は 天朝に奉對下は天下萬民に對し何之御面目可有之候哉。是畢竟は我藩之奸臣共 幕府之奸臣に媚び我が君上を不忠不孝に陥入奉り、人臣之罪是より大成るは無之、忠義之士國體と名義と云ふ事を相辨へ日本之大危難御家之大危急此時に當りたれば死を以て國に殉ふべしと申立、承伏いたし不申に因て二月十六日尙又老公より御直書左之通り。

昨年中納言に被下置候處之 勅返納可致旨被仰出候故早速返納可致處士民には彼是相拒み今以指登す儀を妨ぐ由、臣下として君命を不用者有之候ては不_二相濟、血氣の者共とは乍_レ申君臣之禮を取失ひ國禁を犯し不法之所業有之哉に相聞へ候處、我等申聞致承服 勅返早速に指出に相成上は存詰候素志推察致し、非常之儀何分にも寛大之仁恕可_レ申旨中納言へも可_二申聞_一也。

右に付て同月十八日鎮撫として御先手鳥居瀬平・若年寄大森多膳・御用人中村信八及御目附・徒目附等人數を率る長岡に發向之處、長岡屯之若者共申合御城下に逆寄いたし、市中に於て及_二戰爭、鎮撫之役人數人討取手負數多有之候。同廿二日老公御直書。

是迄追々直書も遣し申諭し候得共不_二相用_一のみならず諭として出張之役人え手向及_二劍戰_一之儀も有、是上は我等慎中とは乍_レ申其儘に指置候ては對_二公邊_一不_二相濟_一候間人數差出嚴重申付段可_二計_一候。

家老 中へ

於_レ是翌廿三日若年寄渡邊半介・青山量助其外御先手頭等人數五百人餘長岡に出張致候。長岡之者共は今更致方無き勢に相成此上は大老並高松を打取横濱に打入五箇國の夷人を誅戮し天下を變動せしめんと相謀、此前後より追々亡命致し離散に及候間打手之人數は不_レ及_二戰_一して御城下に引取、扱亡命は水府にて制方出來兼候付早速に 公邊に御届に相成候。右之通にて三月三日之大變も何日とは知れ不_レ申候へ共十日餘已前より何か遠からず大變起り可_レ申氣遣は敷事は 公邊にも相知れ候得共、箇様の事に及べしとは不_レ被_二存大老初大油斷_一にて有之候。此方様には朝日の夕不_レ遠一昨冬大老駕に鐵炮打懸候事は實正にて、夫より駕之内鐵張りに相成格別用心之處、此砌九條殿下九條殿は初發より大老御一味、去より駕を賜り候に因て當日は上巳之御祝日にて殿下之駕に乗り替出仕に相成候由。水府人之幸なり。水府にては老公初會澤議論に御所置定り

候間中納言殿御父子之御中も都て懇親に相成のみならず、様々黨類も大抵一致いたし候て却て僥倖にて有之候。武田伊賀御家老再勤九郎事是迄此人は何黨にも差合無之出府致候て諸事取鎮め小石川の邸中も漸々鎮靜に歸し 公邊御懸合同も宜しく相成、閏三月十八日閣老より水府御家老御呼出し御渡

先達て 勅諭御返納之儀にて是迄於御領内さし拒候者共並に今般於櫻田致狼藉候殘黨御領内に潜り居候は悉御召捕御差出被成候様可被申上候。

右は 幕府より嚴命被仰出候にては無之、水府君臣と能々御内談相熟し候上之御達にて有之候。彦根にては六日之朝飛脚到來御家老三人早速に出府、其外御家中之者共我も我もと打立大抵十に七分通り追々に出府、其内には町・在之者も罷出候。四日に掃部頭殿御家來より十七人之殘黨共御渡被下候様嘆願書差出候處内藤紀伊守殿より御家來御呼出御なだめの御書付被下、五日に上使御着・氷砂糖拜領、八日猶又御家來中に御諭し有之、十日掃部頭殿妾腹之庶子愛鷹殿嫡子願相濟、扱又彦根よりの人數追々到着致候ても致方無之事にて若者共は水戸之屋敷に押懸け鬱憤を散ぜん杯と騒立、水戸よりは却て是より逆寄に致し可申と様々の唱有之 幕庭之愁慮一ト方ならず、依之水府より人數御呼寄に不相成様御制止被仰出、御役人交代姓名並出立日等先以相達候者之外御指留之段水戸固めの七藩に被仰出、彦根も同様被仰出、右等之次第に因て兩家之人心も漸々鎮靜に相成、去月中旬頃よりは彦根之人數も追々に歸國致候。扱又彦根御領内御城下は申に不及一切旅人禁制、領内之者他所へ罷越候儀一夜

歸りの外不_ニ相成、驛所々々は申に不_レ及村々にても自身番付置嚴重に相改、其上御領内惣百姓年十五より六十迄在役人打廻り申諭候趣は二百餘年御高恩之事にて萬一變事も出來致候節は御見方可_レ申哉と一人々々請書判形致させ、太鼓鐘を禁じ異變之急報に備へ候。惣て江州は大商人夥敷關東・北國に懸け糸・麻・吳服物類中がひ致し京・大坂・江戸表に調達致し、前以其向き々々に前錢を出し買求候事にて有之、旅人の出入夥敷候處如_レ此の嚴禁にて商賈一切融通の路塞り怨嗟之聲巷に滿候。しかのみならず兼て御勝手大窮迫之處に此度之大變に付札所一切引替止り、銀札一時に崩に及び殆ど黨民も起らんとするの勢にて上下之困窮絶_ニ言語_一候。すべて掃部頭殿御仕置筋御威光を以天下を壓倒致され候故御在世之間一言も申者無_レ之所_レ謂道路目を以てするの勢にて候處、大變後は天下之人心一人として善と申者無_レ之、則江戸表落書・流言或は川柳之惡口夥敷、定て御國にも様々廻り申たるにて可_レ有_レ之候。扱々人心之恐るべきこと戒めずんばあるべからず。幕府にては松平和泉守殿御引入り久世大和守殿御再勤久世侯は昨年三藩御答之節御不_レ同意にて御引入り。に相成、人心も餘程落着當月初掃部頭殿御病死之御達も有_レ之、來月初には一件御裁斷被_ニ仰出_一候事と奉_レ存候。大變に付て 幕府江戸中等之御手當筋之御達などは定て熊本に廻り候事に被_レ存何も略仕候。右之次第にて不_レ遠に治平之勢は相違有_ニ御座_一間敷、聊安心之事に被_レ存候。此許に相聞へ候次第大略如_レ此通りにて、後日之變態は尙拜呈可_レ仕候事。

四月十九日

横井平四郎

(元田竹彦藏)

九七 宿 許

萬延元年五月一日 小楠在福井

一書奉呈仕候。益御機嫌能奉_(茂昭)恐悅_(茂昭)候。隨て私事相替り不_(茂昭)申壯健に罷在候、御安心可_(茂昭)被_(茂昭)下候。此許一體無事君上御會業も一日越程に御座候て不_(茂昭)相替_(茂昭)多用困入申候。

お逸衣類京・大坂註文追々申上候通りゑびすやより夫々取斗候筈にて何に來月中には御許に着可_(茂昭)仕候。其外本膳_(茂昭)・わん_(茂昭)杯同様に御座候。此許之註文は夫々申付置候間近日中には出來可_(茂昭)仕候。然し幸便無_(茂昭)御座、七・八月比には便義御座候筈にて其節仕出し申筈に御座候、坂口土産も同様に御座候。屋敷替如何に御座候哉、相應之所御座候へば早々御引出被_(茂昭)下度奉_(茂昭)存候。

左平太・倫彦彌以讀書等出精可_(茂昭)致事、先便にも申遣候通りくつわ四口におし懸け二ツ求置申候。又法主盛長可_(茂昭)仕、出來物杯も定てなをり候と存候。乳は彌以給_(茂昭)ざる様專一之事。

此節は別段申上候儀も無_(茂昭)御座、何も後便言上可_(茂昭)仕候。以上。

五月朔日

平 四 郎

至 誠 院 様
左 平 太 殿

倫 彦 殿
お つ せ 殿

尙々此許近來は天氣も宜しく晝内は一重にてよろしく御座候。然し近日よりは雨に相成可_(茂昭)申候。御許何程に御座候哉。又々大水共_(下モ)にては無_(茂昭)御座_(茂昭)候哉、何角案じ申候。

出立前左平太・倫彦に申聞候網之分は月に一度位能々あらひ候てほし方可_(茂昭)致候。其外刀・書物等の手入頼入候。以上。
(横井時靖藏)

九八 宿 許

萬延元年五月五日 小楠在福井

一書拜呈仕候。益御機嫌能被_(茂昭)遊_(茂昭)御座、奉_(茂昭)恐悅_(茂昭)候。隨て私事相替り不_(茂昭)申、御安心可_(茂昭)被_(茂昭)下候。然ば

大守様御事先月八日比より御不例に被_(茂昭)爲_(茂昭)在漸々御大切に被_(茂昭)爲_(茂昭)及、御内實は十七日之夕被_(茂昭)遊_(茂昭)御逝_(茂昭)去_(茂昭)候段誠に以絶_(茂昭)言語_(茂昭)奉_(茂昭)恐入_(茂昭)候。就ては 若殿様直様御出府之御様子、御國許之變動萬端想像仕候。
(江戸職ノ口部にて)

此許へは飛脚川支へにて今朝到着仕候。君上様へは御外祖父様に被_(茂昭)爲_(茂昭)當候間御手許切にて今日より御精進被_(茂昭)遊候。
(茂昭)

閏三月二十五日之狀四月十日内藤狀一同に到着、又法主迄壯健に御座候段安心仕候。此許先便申上候通り相替候儀無_(茂昭)御座、四五日霖雨降り續きよ程の出水に相成申候。御許如何と思ひやり申候。内藤紙面に

去月八・九日はよ程の出水の由、兎角近年は出水がちにて定て此霖雨には又々水あがり申たると奉存候。どふぞ可然屋敷御座候て早々御引出相成度奉存候。左平太・倫彦槍之見分に出申候由、時々出府稽古いたし可申候。先此段迄申上候。以上。

五月五日

平 四 郎

至 誠 院 様

左 平 太 殿

倫 彦 殿

お つ せ 殿

尙々今日は節句にて所々より(茅卷)ちまき澤山にもらい申候。餘り澤山にて中々給られ不申候。以上。

(横井時靖藏)

九九 富田源助へ

萬延元年五月十一日

小楠在福井
富田在熊本

富田は熊本藩士、小楠とは親戚の間柄らしい。
一書拜呈仕候。梅雨之砌愈御安康被成御座、珍重に奉存候。先以 太守様御事誠に以絶言語奉恐入候。客地に罷在候ては何角想像仕、御國許如何斗之驚動かと遠察仕候。扱御頼之品々相調申候て今便

にさし上申候、御氣に入候へかすと奉存候。奉書嶋代壹兩壹歩貳朱と三百八十文にて御座候。西洋交易より(白髪)しらが糸殊之外高價に相成、白つむぎ(袖)にいたし候ても一反上通にては壹兩壹歩貳朱位に相成、丁度去年よりは一増倍之根段に御座候。さし上候嶋は御家中にて出来いたし候品にて直に求め申候間よ程易き方にて御座候。嶋がら如何に御座候哉、入御氣一度祈申候。御染物代は別紙之通に御座候。此許一體相替り不申、君公御在國にて一日越程には御咄御會談等に罷出、其外多用來客誠に寸暇無御座、困入申候。先此段迄拜呈、餘は追々得貴意可申候。已上。

五月十一日

横 井 平 四 郎

富 田 源 助 様

尙々乍末御家内様に可然奉頼候。

(徳富蘇峰藏)

100 榊原幸八へ

萬延元年七月二十九日

小楠在福井
榊原在江戸

返々書取申候二品御註文根段御書附被下度、御留守に上納可仕、左様御承知被下度候。
秋暑之砌愈御安康被成御勤、珍重之至と奉存候。此御許一體相替り不申、御地御同様と奉存候。
幕府近況之勢彌以依然光景かと被存、就中龍・銀等へ動亂其後御制止方に相成候由に候へ共果は瓦崩之勢不可已、何方も是には至極之困窮天下之人心屬目之一大箇條誠に以笑止千萬に奉存候。其他不

相替_(春謀)私政のみ被_レ行候事にて、扱々絶_ニ言語_一申候。

中將様御開宛如何成り行申たるや、最早御時節に相成屈指之至に御座候。此時ども延び候へば今暫は時節も有_ニ御座_一問敷、如何之御事情に候哉、無_ニ覺東_一事に奉_レ存候。

此許東_(江戸・福井)・北之違亂大に好都合と被_レ存、珍重に奉_レ存候。い才之儀何方よりか可_レ被_レ成_ニ御承知_一、略仕候。

加藤氏長崎より歸郷に相成、小曾根清三郎弟何某同道にて有_レ之候。彼表之模様交易は彌以盛成事にて行末の見込も尤崎陽第一かと被_レ存候。御出崎之節三岡氏抔取極之筋只今詮議最中、いまだ決し不_レ申候へ共何に不_ニ相替_一取り續き、此より行末之事業を心懸候方に可_ニ相成_一勢に御座候。其外は此御許相替り不_レ申、一體は殊之外平穩無事珍重々々。

姪事出立前不破方嫁娶いたし、就ては色々註文困り入申候。懐刀古く相成、毎度御難題に御座候へ共手本之通り御あつらへ被_レ下候様奉_レ希申候。鏡は此ものを直に相用、されは相應之品にて宜しく御座候。將又鐵炮目鏡相用度、御許にて製候品至極宜しく御座候間是又奉_レ希候。鏡は大方竹に入れ組み有_レ之候、隨分宜しき方御求可_レ被_レ下候。此方はさし急ぎ申候間何卒御都合次第に御廻し被_レ下候様吳々奉_レ願候。此段相願申度拜呈仕候。餘は後雁に附與仕候。以上。

七月廿九日

小楠 拜

榊原 賢 君

尚々時下御自愛可_レ被_レ成候。小拙も近日瘡相煩、至て微邪に候へども暫は引入可_レ申候。餘り暑にて彼是之病も聊行れ申候。然し例のコロリ是迄流行無_レ之、當年は制禁と被_レ存申候。御許も御同様に可_レ有_ニ御座_一候、尤以大慶之至に御座候。何も略候。以上。

(松平慶民藏「雜纂」第三卷)

一〇一 矢島 恕介へ

萬延元年八月二十日

小楠在福井
矢島在江戸

八月十一日之御書狀相達、忝々拜見仕候。秋冷之節愈御安康に被_レ成_ニ御勤_一、珍重之至に奉_レ存候。此許相替申儀無_ニ御座_一、老生事去月下旬より瘡相煩餘程手強き邪氣にて御座候所、幸い一切にて再發不_レ仕、然し老年之事にて全快極て遲鈍にて今以外勤も出來兼申候。何れ來月初には全復可_レ仕御安心可_レ被_レ下候。君子所置之二條一々御尤千萬、常人にては疑惑を起し候事當然に御座候。三代以後之君二た通に有_レ之段是又御尤に奉_レ存候。要_レ之心術の工夫無_レ之故性情之上より發出致し不_レ申、大抵私見に落申候。賈生抔之如き古今の慨嘆總て文帝の用られざるを申、然るに文帝をして用ひしめば吳・楚七國の亂不_レ待_ニ景帝_一起り可_レ申、是負け候ても兄弟姪骨肉相戕彝倫之滅却なり、又勝ち候へば天下之亡滅、どちらに取りても絶_ニ言語_一申候。流石文帝天資仁愛の君にて用ひられざるは重々尤千萬、乍_レ然天下の亂は無_レ程起り候事は文帝も承知之通、何必賈誼のみ合點いたしたるにて無_レ之、天下聊有志者は總て見へたる事に

て、唯々文帝致し方無_レ之心痛に押移被_レ申候。夫諸侯を驕らしめたるは必竟文帝姑息因循の心底より此大弊を生じ出し候事にて、此時に至り文帝致方無_レ之場所に相成候。大道を見候もの有_レ之候へば文帝之心術之曲より此大弊を起し候根元に至り及_ニ講習_一、如何にも心術を正し、朝廷百官の心術に及し義理正大の政事行れ候へば七國何も異存有_レ之様無_レ之、必ず敬服致し無事に治り候は決して疑ふべき事に無_レ之候。去れば賈生が立言は扱も不仁の甚敷事にては無_レ之哉。此一條を見て凡秦・漢以來名君・名臣と被_レ稱候もの、私見たる事分明に相見申候。總じて後世の者は弊は事柄之上に生ずると思ふは古今一般之了簡に御座候。其故何の一事を議するも先き案じと云ことに相成一寸も行れ不_レ申、扱々可_レ笑事にて有_レ之候。弊は總て其人の心に生ずるものにて、其の事好き筋なれ共行れ不_レ申、上下にて云へば上之命令下に行れ不_レ申は下の人服し不_レ申故なり、其服し不_レ申は上の人之私心故其私心を怨みたるなり、外に子細は無_レ之候。孟子の所謂生_ニ其心_一害_ニ其政_一、又以_ニ不_レ忍_レ之心_一行_ニ不_レ忍_レ之政_一明白なる言なり。去れば命令法度の行るゝは其君相の心公平にて私なきより下の人服する故なり。左なきは上に私あればなり。下の服せざるが弊にて別に弊は無き事なり。如何々々。

幕廷近況の様様不_ニ相替_一因循と被_レ存候。水老調和のみに相成候かと被_レ存候。何分致し方無き事、當分はとても混亂迄にて高きに登り眺め可_レ申事に奉_レ存候。

此許齋石連亂も無事にて治り可_レ申、此段迄拜復仕候。已上。

八月廿日

小楠 拜

矢 恕 賢 契

尚々秋冷に相成暮能、隨分御自愛可_レ被_レ成候。已上。

(小楠遺稿)

1011 宿 許

萬延元年九月六日

小楠在福井

七月十一日之御狀一昨日相達、難_レ有拜見仕候。先々被_レ爲_レ成_ニ御揃_一益御機嫌能奉_ニ恐悅_一候。隨て私事も先々月下旬より瘡相煩候處一旦にて罷切申候て再發不_レ仕、夫故次第に元氣も付候て只今にては平生通りに相成り、近日より御會讀等にも罷出候筈に御座候間御安心可_レ被_レ成下_一候。此許一體何ぞ相替り不_レ申無事に御座候。

去る二日に平瀬(義作)・加藤長崎表之御用にて此許發足仕候。此節は長崎様々用事向御座候間どふで熊本に參り候事は年内中は出來申間敷、然し閑暇に相成候へば必ず罷出候筈に御座候。所々の註文反物等此便義に頼み遣し申候間長崎よりさし急ぎ熊本に廻し候筈に御座候。大坂にも下關にも四五日づゝ滯留仕候間長崎に着いたし候事は當月一ばいかと被_レ存申候。左候へば右反物類は長崎より便義次第に熊本に廻し候間來月中旬比迄には必定着いたし可_レ申候、左様御心得可_レ被_レ下_一候。

竹内手代七月七日比御許に着仕候由、さし上申候品々坂口初御氣に叶候段大慶仕候。えびすや廻しも五

月下句に大坂仕出し福井屋迄参り居候事にて最早参り着候ものと被_レ存候。竹内手代日々歸りを相待候へ共今以参着いたし不_レ申何方に引き懸り候哉、然し四五日中には必ず歸着可_レ仕、御許の御様子承り可_レ申と相樂申候。

(不候家に嫁す)お逸にん身に相成候由重々悦入申候、格別不鹽梅にも無_レ之由何寄之事に御座候。註文衣類之事被_レ仰越_レい才承知いたし、來春は早々歸郷之心得に御座候間其節持參可_レ仕候。

至誠院様當夏は御元氣よろしく被_レ成_レ御座候段何より_レ悦入申候。何やらかやら(城下にゆくこと)熊本御懸け被_レ成御世話可_レ被_レ成、此上随分御保養專一に奉_レ存候。私も年寄り候へば以前とは違ひ四度ふるい候ギャクにて大にくたびれ全快ひま取り申候。氣色向きは若き者の様にて給物等(タベモノ)も餘りは替り不_レ申候へ共此節ギャク相煩大に老體を知り申候。以來は萬端養生第一に相心得不_レ申候ては恐敷被_レ存申候。酒杯も是迄が過酒には一度も至り不_レ申候へども尙以大切に相心得、禁杯同様に仕り夜分寢前に猪口(チヨク)五ツ位に極め申候、是にて相應に酔ひ寢入申候。四五日よりは外出仕候筈にて何方に参り候ても地走(馳カ)いたし候間、一切相斷り申筈に御座候。

六月十日は大風大水さぞ_レ御世話被_レ成候と奉_レ存候。然し格別之損所にも至り不_レ申、先は珍重に奉_レ存候。(櫛)ゑん壽杉もたおれ候由柿木は別狀無_レ之、悦入申候。

追々屋敷替之儀申上候通り可_レ然出府所に御極被_レ成一刻も早く御求被_レ成度、先便申上候湯地屋敷杯は

至極宜しき様に被_レ存、定て御懸合被_レ成候と奉_レ存候。其外にも相應之所可_レ有_レ御座、只今之處は長住いたし候へば大分手入れもいたし度、嘉悦本月末頃は此許出立歸郷仕候間い才申談の筈に御座候。其御心得にて本屋之方修覆等御見つもり被_レ成置_レ度奉_レ存候。

(標本)たばこ足袋忝候。二品共にとんと切れ候處にて大に大慶仕候。山崎町たばこにても此許之物よりは遙(蓋北産標草の意)によるしく御座候。近日には竹内手代歸り可_レ申、其節はあし北参り可_レ申と相樂申候。

左平太・倫彦修行の爲紙面度ごとに遣し可_レ申、書き様等は泰吉共に承り何によらずくわしく長く様々之事書きつゞり候て遣し可_レ申候。只今通りにては文字は随分よろしく候へども文一向に出來不_レ申、きつと修行いたし不_レ申候ては不_レ相成_レ事故以來は何事たり共書きつゞり長々申遣し候様相心得可_レ申候。書様は毎度泰吉・宗育杯に見せ候て(直しのこと)なわしを受け、文字くだりやら字くばりやら重々合點いたし候様修行第一之事。

又法主大に元氣宜しく相成り見違候程に御座候段泰吉よりも申遣し、悦入候。最早(紐解)ひもときも不_レ遠事にて大坂より遣し候着物上下其外何角御世話可_レ被_レ成候。長崎廻しの書狀にも申上候通り左平太・倫彦が時は(雜談)なんじゆふにて何も出來兼候事にて此節聊仕合宜敷とて過分のひもときいたし候ては決して相成り不_レ申、一ト通りの宮參・祝酒等にてよろしく必ず_レ縁家たりとも案内申して客杯いたし候義は無用に御座候。三男三郎重々下段に相心得可_レ申候。

勇姫様(尊徳夫人)先月十八日御平産、御姫女子様御出生被_レ成候。中將様初不_二一方_一御悦にて御座候。御催しより半時斗にて御生被_レ成候由誠に御安産にて御座候。此段迄拜呈、い才は後便に可_二申上_一候。以上。

九月六日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

倫彦殿

おつせ殿

尙々此節は何方にも書状仕出し不_レ申、坂口へはお逸にん身之悦よろしく御傳へ可_レ被_レ下候。最早此頃は壽加(下平)にこり酒に作り懸り可_レ申と思ひやり申候。新宅前の秋の景色さぞかしく被_レ存候。當年は漁も成り不_レ申、御城下外にとんと出不_レ申、近日病後の運動にそろく_一と出浮申候。旅の空にてずんと面白く無_二御座_一候。却て御許之事思出し一刻も歸り申度奉_レ存候。來春は君公(茂地)三月中旬頃此許御發駕の積りに御座候間どふとぞ致し其前二月末此許出立致し度、只今よりそろく_一と羽根つくろい仕候。近日より外出致し候へば色々様々用事差支へ寸暇有_二御座_一間敷、病後不元氣之身困入り申候。何も後便に可_二申上_一候。以上。
(横井時靖藏)

1011 加藤藤左衛門・平瀬儀作へ

萬延元年九月十五日

小楠在福井
加藤・平瀬在長崎

兩人俱に越藩士、平瀬は小楠在福中錢穀出納買物等の世話役として其の居館に絶えず出入した。此の書は兩人交易の事を管して長崎に在る時に寄せたもの。

大坂よりの御家書相達候段雷庵先生より承り、先々目出度御出帆可_レ被_レ成、珍重に奉_レ存候。此許聊相替り不_レ申のみならず、近日 廟堂大に憤勵之勢可_二相成_一、乍_二病中_一夫々之心配いたし執政・參政・執法(長谷部)長谷等日々程に出會何角申談し、存外之開發珍重此事に御座候。御許之沙汰も此節第一に申談し候事にて、近々御咄合申候通り利政・仁政之分別其形は一にして黑白晝夜之相替り有_レ之、尤以國家之大關係にて御座候間 廟堂より勘定局・製産方等は推し開き國是を立候筈に有_レ之候。右之通に付其御許にても深く御思惟、此條理に聊たり共變り不_レ申様萬々祈申候。(小曾根)清三郎定て子細之御講習に相成候事と奉_レ存候。何分此條理明白胸中私欲之念を斷、正々成る處に參り候様萬々奉_レ存候、可_レ然様御致聲可_レ被_レ下候。來春は御暇相願、一と先歸郷いたす筈に有_レ之候間、相願置候鍊翁并名家四時山水其上乾堂書(小曾根)、(日高氏、長崎の繪、畫を能くす)書にて御謝明通田何分可_レ然御心配被_二成下_一、年内中に熊本に御廻し可_レ被_レ下候。嘉悦も一兩日中に此許出立之筈に御座候。相願置申候包物類熊本廻しは乍_二御多用_一急着之方相願申候。先は此段迄拜呈、餘は何も略いたし候。以上。

九月十五日

横井平四郎

加藤藤右衛門様

平瀬儀作様

尙々小生病後今以勝不_レ申、雪中嚴寒誠に恐敷候間暫歸郷之段及_ニ相談_ニ候へ共何分出來兼困り入申候。來春は早々歸郷之打立只今より取りきめ置き申筈に御座候。老杜云

多年多病久爲_レ客。他席他郷獨上_レ臺。

甚自憐の至御一笑々々。

(小楠遺稿)

一〇四 宿 許

萬延元年九月二十九日

小楠在福井

八月二十七日之御狀相達、忝々披見仕候。先々御揃被_レ爲_レ成益御機嫌能奉_ニ恐悅_ニ候。私も相替り不_レ申病後彌以快相成申候間御安心可_レ被_ニ成下_ニ候。嘉悦去る十九日に此許出立、京都にて少々引き懸り可_レ申候に昨今は出立いたし候事と被_レ存、來月十五日前後には到着可_レ仕候、此許之様子御承知可_レ被_ニ成候。其以來は聊も相替り不_レ申候。左平太・倫彦出府之事嘉悦に蝦置申候間、同人歸郷の上は早々彼方に出府稽古いたし可_レ申候。縁家内出府は彼是心痛に被_レ存、嘉悦方にて候へば何も故障等も無_ニ御座_ニ至極宜しく奉_レ存候。出府所はいまだ御求無_ニ御座_ニ候へば私歸郷迄御待可_レ被_ニ成候。私歸郷も段々申談じいまだ決

定は仕不_レ申候へ共大抵十に八九は來春に決し可_レ申候。左候へば二月末此許出立三月十五日前後は歸郷可_レ仕候。最早當年も三月斗に相成無_レ程事にて何角其用意之心配いたし申候。歸郷之節は三四人は同道可_レ仕候、其御心配可_レ被_ニ成置_ニ候。普請之事は嘉悦に才申談置候間御相談可_レ被_ニ成候。只今通りの離れ家にては何に付け不便利のみに有_レ之、隣の竹やぶ彌富よりもらい受け新宅を引き候て一所にいたし候方重々可_レ然、則さし圖も仕候て嘉悦に遣し置申候。尤嘉悦此許に居候迄は歸郷之事如何成り行可_レ申哉難_レ斗御座候間普請も暫之間相待候様申談置候へ共、前にも申上候通り十に八九は來春無_ニ相違_ニ歸郷之見積りに御座候間此紙面到着仕候へば早速彌富方に竹やぶ御もらい被_レ成候事可_レ然、左候へば竹やぶの開きは又早々御取り懸り年内にも出來仕候様奉_レ存候。尤竹やぶはことごとく開には及申間敷御見積被_レ成可_レ然様御世話可_レ被_ニ成候。普請之方は嘉悦歸郷之上得斗御相談被_レ成、水野方の彦助に一切引き受けさせ候方可_レ然、是又年内より取り懸り不_レ申候ては來春歸郷迄に出來仕り申間敷、何分乍_ニ御世話_ニ御急ぎ被_レ成候様奉_レ存候。

馬屋・男部屋・小屋は至てざつといたし候てよろしく、年内村中に古家之拂物等も御座候へば夫にてもよろしく用をかぎ不_レ申位にて可_レ然奉_レ存候。普請料はあし北之二貫目所々反物之代銀外に十三石借御座候間是にて六貫目内外は有_レ之、其餘之不足は彌富へなりとも御相談被_レ成候方可_レ然候。

當年は様々の物入にて五十人扶持にてはよ程の不足、暮に至り候へば官府へ大分借銀不_レ仕ては難_レ叶、

困り入申候。然し此許はどふでも成り申候。御許も何角と御世話可被成、随分々々御けんやく第一に奉存候。

男の事來春私歸り候へば一人にては六ヶ敷存じ嘉悦に兩人と申談じ置候へ共、又々考候へば兩人には及び申間敷、林吉はとも用立申間敷、三十内外の壯成る男随分高給御出し被成一人にて可然奉存候。歸郷の上どふでも一人にて難叶候へば其時に抱へ可申候。

富田(源助)より尙又註文申遣し、餘り無遠慮之至りに御座候。尤反物遣し候事にて夫は染させ來春歸りに遣し可申候。其上紬近頃過高に上り、上通りにては壹兩貳步貳朱にてふし御座候物も壹兩壹步位に相成り、其外きぬ類何も三割の上りにて京・大坂同様に御座候。必竟外國交易よりの事にて最早きぬ類はきられ不申候。右之通りにて富田參り候へば被仰聞可被下候。此節は何ぞ外に申上候事も無御座候、此段迄拜呈仕候。以上。

九月二十九日

横井平四郎

至誠院様
左平太殿
倫彦殿
おつせ殿

尙々此許當月は雨斗にて漸く昨日より晴と相成、よ程寒く御座候。御許何程に御座候哉、時分柄御自愛可被成候。坂口より敬之助初紙面遣し候へ共此節は書狀遣し不申、宜敷御傳可被下候。
内藤(余吉)も妹看病に久しく歸省いたし、最早歸り候段紙面申遣候。宗育(野中)よりも紙面遣し、是又此節は遣し得不申、可然御傳可被下候。以上。

追啓

嘉悦に遣候二日間作り續きは、新宅を引き候ては餘りそまつにて見苦しくとの見込に候へば新宅は長屋にいたし、新に造作いたし候てもよろしかるべし。然し可成丈は新宅を引き候方物入少く、長屋杯は古家かひ候ても可然事に御座候。

新宅の通ひの廊下は一間に二間半か三間位にて可宜、南の方に窓を明け北の方(戸欄)はとだな・米びつの類を置き、たなをも付け候て客道具杯をも置く様にいたし度候。

爐を廊下のうちに切る様に嘉悦に咄し置申候處廊下のうちには切られ申間敷、八疊之間に切り候方可宜候。御見斗被成候て茶道具杯置候たなにも付け候て可然候。

又案するに(矩燵)コタツを八疊に切り、其上に爐をも切り候へば一ト間にて見苦しく可有御座いかど、是等は御許之御相談次第よろしき様に可被成候。

臺所土間共に随分きれいにいたし度候。新宅天井は(煤色)す、色付け不申候へば秋に成り蠅(蠅)のふんにて見苦

敷可_レ有_レ之候。竹やぶの内大木御座候は直にもらいうけ、一本も切り申間敷候。右之分心付き候まゝ申上候事。

(横井時靖藏)

一〇五 宿 許

萬延元年十月五日

小楠在福井

九月二十五日之御紙面昨日相達し、難_レ有_レ々々拜見仕候。益御機嫌能奉_レ恐悦_レ候。私も相替り不_レ申、病後も全快仕、御安心可_レ被_レ下候。

たび并紙御贈り忝候、是にて十分に御座候。

坪井屋敷牛右衛門^(不敬)敬之助世話にて手に入、一段之事に御座候。先便にも申上候通り平瀬手^(著作)許より七十兩さし出申候筈にて定て當月中には持参いたし可_レ申候、是にて普請迄十分に出来可_レ仕候。

隣家竹やぶ彌富方大抵異義無_レ之遣し可_レ申候。年内より普請御取り懸り被_レ成度、い才は嘉悦杯御相談、可_レ然様御世話可_レ被_レ成候。

先便にも申上候通り此許段々咄し合都合宜しく、御家老一人御目附一人明日此許發足江戸に罷出候。此節は十分之事柄にて大に結構成る御政事に相成可_レ申、就ては中將様^(春徳)より私御呼寄せ被_レ成候筋へも参り可_レ申、左候へば正月早々打立江戸表へ五十日程も罷在、歸りに此許に立より三十日位到留歸郷可_レ。

仕、左候へば五月にも相成可_レ申哉。江戸に参り不_レ申すみ候へば二月末より此許打立、三月中旬には歸り着可_レ申候。右之次第にて普請は早く出来之方に御相談、一刻も早く御取り懸り被_レ成度奉_レ存候。

又法主ひもとき近まり何角御世話可_レ被_レ成候。彌元氣もよろしく盛長いたし候段、悦入申候。

^(内藤)泰吉長崎に参り候由、先月中には歸り申たると奉_レ存候。平瀬列も當月中には参上可_レ仕、何角想ひやり申候。濁り酒は定て十分に出来候と奉_レ存候、浦山敷事に御座候。此許相替り不_レ申、繁用晝夜寸暇無_レ御座、困り入申候。此節は外に申上候事も無_レ御座、此段迄申上縮申候。以上。

十月五日

横井平四郎

至 誠 院 様

左 平 太 殿

倫 彦 殿

お つ せ 殿

尚々此許いまだ雪には相成不_レ申、久敷晴れ續き和か成る事に御座候處、今朝より雨に相成北風にて是より雪と變じ可_レ申候。御許はいまだ嚴寒には相成申間敷、随分御自愛專一に奉_レ存候。此節は何方へも書状さし出し不_レ申、可_レ然奉_レ願候。以上。

追 啓

殿様當冬は御下國にて左平太御目見奉願候様御世話被成度奉存候。私歸郷も來春三月にて懸け合申間敷、且十の一二は如何相成り可申哉、此節打過ぎ候へば明後年迄延引に相成り候間私歸郷にかゝり(關係)やい無く、衣類等之用意出來次第年内にても御願被成度奉存候。倫彦も一同よろしく御座候へば此上無御座候。此段牛右衛門に御相談可被成候事。
(横井時靖藏)

一〇六 嘉悦市太郎へ

萬延元年十月十八日

小楠在福井
嘉悦在熊本

一書拜呈仕候。先以遠路御歸國海陸御安全奉賀候。定て只今迄には御歸着被成たると何角想像のみいたし候。御歸り後江口(通三郎)參り、例の通り毎夜咄し一酌を傾申候。兎角故郷の咄しに相成申候。此許相替り不申と申内執政之面々大に開悟に相成り、東北行違も此節は氷解いたし可申、近々執政・參政・執法出府に相極申候、誠に珍重に存候。其外は此勢にて何も彌以都合よろしく順路に參申候。フランスより朝鮮征伐之打立にて對州借用之申出 廟堂大困窮、可憐々々。越後新瀉開港之筈。

水府も平穩、今以櫻田殘黨御決斷無之、其外は相替り不申候。

沼山家修葺之事來春は是非歸郷之心得に御座候間年内より普請取り懸り候様御相談可被下候。江口

咄しにて坪井大河原割りにて出府所相談相決し候由、右等に付此節七拾兩拜借相願、平瀨(傑作)持參之筈に申談候。何に來月中には持參可致、是等之事共何も可然御世話可被下候。御母公様・御令室様より細々の御狀參り、不淺忝候。此節御返事も可仕候處例の多用、御無禮仕候間よろしく御傳へ可被下候。

不_ニ相替_一日夜多用、誠に_レ困り入申候。

左平太、殿御目見之事宿本に申遣候。是又御世話可被下候。此段迄拜呈、餘は付_ニ後便_一申候。已上。

十月十八日

平 四 郎

市 太 郎 様

尙々御歸着、社中は申に不及何角之御咄し想像いたし候。何方へも可然御傳奉_レ希候。已上。

(岩崎左文藏)

一〇七 荻角兵衛へ

萬延元年十月二十五日

小楠在福井
荻 在熊本

一書拜呈仕候。向寒之節愈御安康に被_レ成_ニ御勤_一、珍重に奉_レ存候。隨て小弟無異に相勤罷在り御安心可_レ被_ニ成下_一候。扱嘉悦も歸着いたし此許之事情は御承知可被下候。其以來様々申談候處中將様御手許と此許御家老情意行違居候筋段々咄合、さしつまり御家老中何も能々了解いたし、近日御家老一人御側御

用人・御目附之重役出府いたし是迄行違之事情一々及言上、東北君臣合體之道に落着いたし、隨て御役人も御家老始再勤等も被_レ仰付_レ筈に相決申候。是にて此許一統人心も合一可_レ仕、聊安心仕候。扱々様々心配のみいたし日夜苦心御察可_レ被_レ下候。乍_レ然是彼何も順路に參り、是よりは段々新政に取り懸りに申談に御座候。政事之筋は三個條之國是相立、三冊之著書出來いたし、是は極内々不_レ遠さし出可_レ申候。御他見は一切御斷仕候。魯・英使節戰將等之姓名此許にも分り不_レ申候、江戸表に及_レ問合_レ置申候。幕府近況之事情相替り申儀無_レ御座_レ候内、フランスより朝鮮征伐之打立に因て對馬嶋借用申出は殊之外之大困窮に相成、實に致され様も無_レ之唯々嘆息のみの由、扱々可_レ憐事に御座候。右に付て其外は何もさし置之體に相聞申候。對馬借用に就ては此方活見御座候へば大成る機會にて尤以日本之大義相立候所置可_レ有_レ御座_レ態と拜呈不_レ仕、御高論追て拜聞可_レ仕候。

アメリカ使節も歸府に相成い、また才之事承り不_レ申候。アメリカにて使節一件之新聞紙世界に廻し申候。釋書此許に參り流石明開成る事に御座候。定て此書は御許にも參り居可_レ申候。

水府も當時は平穩之模様^(宗考)に御座候。櫻田殘黨御吟味も夫々落着、しらべ口書も出來松平伯州より閣老にさし出に相成候處、久世公御預りと申事にて決評に相成不_レ申との事。内々承り候へば死一等は宥められ候内評とも沙汰有_レ之、如何に成り行可_レ申候哉。此許晝夜多用誠に困り入申候。來春はどふでも歸郷可_レ致存じ込候へ共如何成り行可_レ申哉。七月末ギャク相煩、其末今以とんとの平復には至り不_レ申何と

やらん精神も疲れ居候處右之多用にてよ程きけ申候。酒杯もとんと給不_レ申、寢酒少しづ_レ純三郎列と給候事に御座候。樂と申ては刀類斗にて近日相州廣正刀二尺三寸何之申分無_レ御座_レ候珍敷もの手に入申候。是は恐らくは熊本にてもめつたには有_レ御座_レ間敷、先づ名刀にて御座候。外に大和信長のしよふぶ作り脇差是もよ程好き出來にて御座候。江戸後藤一乘門人寶壽なるもの不斗參り、格別之作者にて一にて申候へば目貫を千疋にても四千疋にても作り候にて其手際分り申候。此者時々參り堀物之學問いたし面白き事に御座候。後藤家・柳川家・奈良家此三家鼎足いたし候は誰も承知之通りにて此の三家の堀り様其品物にて講釋承り初て合點いたし申候。是明解は恐くは熊本には分り申間敷候。金の獅子之目貫手に入一ト通りの物と存じ居候處、寶壽一見いたし四代目の後藤に相違無_レ之、太閤時代之由殊之外珍重仕候。伯樂に逢ひ千里馬と成り申候。此外聊之刀道具求申候へ共格別のものにて無_レ之及_レ言上_レ不_レ申候。奉書紙相求置き申候。九谷急須百年前中興之名人作不思議に手に入代二步、追てさし出可_レ申候。徳利は新製より外に手に入不_レ申、純三郎手に入申候は私御覽之急須^{物小サキ}と同人之作、此許にても容易に無_レ之ものにて御座候、代壹兩にて御座候。是段迄拜呈、餘は略仕候。已上。

十月廿五日

平 四 郎

角 兵 衛 様

尙々御自愛可_レ被_レ成候。此許いまだ雪降り不_レ申、天氣もよろしく仕合にて御座候。然し一向に油斷

は成り不_レ申_{□□□□}^(缺字)初可_レ然御傳へ可_レ被_レ下候。

追て刀類は當年は珍敷出申候。當藩士小栗次右衛門手に入候は正宗之短刀に御座候。是は大野より出申候ものにて小栗以前に私も一覽いたし候處古相州に相違は有_二御座_一間敷餘り銘よろしきに付疑惑いたし、代料も格別之高價故に返し申候。尤此許刀社中も同様にて小栗は江戸より歸り右之刀を根段をこぎり不_レ申求申候間一旦は社中笑申候。小栗短刀を江戸にとぎに遣し本阿_ミにも見せ候處正銘之段折紙遣し、大に魂揚り小栗に服申候。本阿_ミ之目利は格別之事にて、一も間違無_レ之、銘を切り候て此刀は何某作と分明に申、本阿_ミ流にて無_レ之ては實は刀は分り不_レ申候。聊之見覺にて御座候。熊本よりも如_レ此江戸に相詰後藤善左初目利之達人も様々御座候へ共誰も肥後流之目利にて自らはとして本阿_ミにも入門いたし不_レ申、扱々田舎漢と近來合點仕候。此許は熊本よりは刀も古物出候のみならず、本阿_ミ手筋御座候間程兩三人は巧者にて御座候。其上尾張・京・大坂に通路いたし候故と被_レ存候。當年中には今一つ位は得可_レ申樂申候。只今之社中了見は應永後はもの、かづといたし不_レ申、專鎌倉代を心懸申候。熊本と違ひ鎌倉代も時々出申候。先日も長光之短刀出申候、是は執政求申候。此段附呈仕候事。

(弓削和三藏)

一〇八 宿 許

へ

萬延元年十一月二十八日

小楠在福井

一書拜呈仕候。寒中益御機嫌よく奉_二恐悅_一候。私事彌以壯健に罷在り御安心可_レ被_二成_一下候。九月末之御狀相達し候後はいまだ御狀到着不_レ仕、如何と案候。何に四五日中には參り可_レ申候。追々申上候通り平瀬參上の砌七十兩は持參仕り可_レ申、嘉悦よりい才普請之事御承知可_レ被_レ成候。隣家竹やぶ御もらい、一刻も早く普請御打立可_レ被_レ成候。先便にも申上候通り私歸郷は來月廿日後御家老歸郷いたし申筈にて其節相分り可_レ申候。江戸に參り不_レ申方に候へば二月末より打立申覺悟に御座候。左候へば此許に罷在候は七八十日にて最早わづかの事に相成申候。江戸に參り候事に候へば正月末にも此許打立彼表に三月程も到留可_レ仕、左候て歸りに此許に一ヶ月程も罷在り歸郷は六月末か七月初に相成り可_レ申、上程まち遠なる事と被_レ存候。何分江戸に參り不_レ申、春に相成り早々歸郷之事いのり申候。不_二相替_一多用にて困り入申候。

今日は御母様御一周忌にて何角思ひ出し參らせ候。御許寺詰法じ客杯さぞ、御世話被_レ成候事と奉_レ存候。此許にても今夕は長谷部^(高平)・三岡^(石五郎)杯心易き人々四五人も呼び、茶たて申筈にて何角心配仕候。扱々間も無き事にて旅に罷在候ては一トしを思ひ出し追慕仕候。

坪井出府所牛右衛門杯世話にて定て一ト通り修覆も出來仕候事と被_レ存候。左平太共は^(折々の意)あり折出府いたし可_レ申、番人よろしき者御座候へかすと存申候。

先便にも申上候通り私^(部屋)へや建續きは新宅引き候ても可_レ然、若し又餘りそまつにて、折角之事にて別に

新規に出来の方よろしかるべきと彦助杯見込み候へば其通りにてもよろしく、左候へば新宅は長屋に引き可申候。左様に相成り候へば過分之物入と被_レ存候間可_レ成丈は新宅にていたし候方宜しき事に被_レ存、長屋杯は古る家かひ候ても不_レ苦事と奉_レ存候。

六まひ屏風相應之物求め申度、敬_{（不殿）}之助杯に御頼み可_レ被_レ成置候、代料は貳兩位迄にて可_レ然候。

そふめん皿十人まへ外にさし身又はもり合せいたし候大平ばち二つ何も古肥前やき求め申度、是又敬_{（察）}

之助・日向屋杯に御頼み被_レ成置、程よき恰好の物御座候へば御求可_レ被_レ成候。本膳やらすゞりぶたやら_{（親蓋）}

大坂廻しは當月初には着いたし候事に被_レ存、今日之御法事に御用被_レ成候事と奉_レ存候。毎々脇方にか_{（他家の意）}

り實々心外に御座候處此節よりは自身物にて御心配無_レ御座、定て夫等之御噂共被_レ成候事と思ひやり

參らせ候。たばこ二月迄位は續き可_レ申、自然江戸表に參り候様に相成り候へば早速御廻し被_レ成下_レ度

候間、此紙面着いたし候へば早速葦北に御申越し一日も早く出来御手許迄參り居候様に御心配可_レ被_レ

下候。左候へば來月下旬には様子相分候間其趣可_レ申上、其上にて江戸之様に御廻し可_レ被_レ成候。目方は

壹貫目にてよろしく御座候。此段迄申上度、餘は後便に可_レ申上候。以上。

十一月廿八日

横井平四郎

至 誠 院 様

左 平 太 殿

倫 彦 殿

お つ せ 殿

尙々此許當月中旬一尺程之雪ふり、其後は格別之事も無_レ御座、一兩日は雨に相成雪も消へ申候。何に不_レ遠又々雪と被_レ存申候。御許寒氣何程に御座候哉、何も御自愛可_レ被_レ成候。當年もわづかの日に相成り扱々一年位は早きものにて御座候。又法主不_レ相替_レ元氣よろしき事と被_レ存、はしり廻り可_レ申候。泰吉_{（内殿）}・宗育_{（野中）}杯に書狀遣し不_レ申、可_レ然御傳可_レ被_レ下候。以上。

（横井時靖藏）

一〇九 宿 許

へ

萬延元年十二月一日

小楠在福井

竹内より今日熊本に飛脚さし立候間一筆啓上仕候。寒中益御機嫌能奉_レ恐悅候。私も相替り不_レ申御安心可_レ被_レ下候。廿八日は御法事何角御世話被_レ成候と奉_レ存候。此許にても長谷部・三岡杯呼び候て茶にて申候。扱々日月の立候は間も無き事にて、旅中別て思ひ出し參らせ候。

私歸郷も先便に申上候通りいまだ分り不_レ申、程により候へば正月中旬比より江戸表に罷越候事にも相成り可_レ申哉、左様に候へば三ヶ月程は彼表に滞在いたし候事と被_レ存候。江戸に參り不_レ申候へば來春二月末より此許發足之心組にて最早間も無き事に御座候。此許は家老去月初より引き返しに江戸に參

り、當月二十日前後には歸り申筈にて其節相分候筈に御座候。自然江戸に參り候儀に候へばたばこ切れ候間此紙面着いたし候と早速葦北に壹貫五百目程御註文被_レ成置可_レ被_レ下候。扱私江戸に罷越候に決し候へば早速紙面さし出申候間其時に江戸の様に御廻し可_レ被_レ下候。

普請は彌以御取り懸り、來春三月歸郷いたし候へば其前に出來いたし候様吳々御世話可_レ被_レ下候。先書に申上候七十兩は定て平瀬より調達仕候事に奉_レ存候。さし圖はい才嘉悦に相談仕候間何分早々御取り懸り可_レ被_レ成候。何も彦助に御相談、同人引き受之方可_レ然奉_レ存候。

此許様々之事共何も治平に相成大に安心仕候。然し不_レ相替_レ多用日夜寸暇無_レ御座_レ誠にく_レ困り入申候。御家老江戸より歸り候へば又々申談様々有_レ之候へ共、是よりは都合よろしき方之事にて何も苦に成り候事無_レ御座_レ候。正月中には夫々相仕舞一刻も早く歸り申度、純三郎と寢酒之度毎に其咄のみ仕候て笑い申候。何分江戸へ參らざる事に相成候へかすと實に祈申候。歸郷之節は書生四五人も參り申候筈にて其内には身分柄之人も打立可_レ申候間塾之方少々取り繕ひ被_レ成候様奉_レ存候。尤格別よろしき様には決して御無用、一ト通りにてよろしく、嘉悦にも咄し置候間御相談被_レ成度奉_レ存候。

男は林吉は次第に老人に相成役に立申間敷、二月は御かやし被_レ成、外に御抱可_レ被_レ成候。私歸り候へば一人にては六ヶ敷可_レ有_レ御座_レ、幸い純三郎召連候者よ程よろしき人體にて此者もらい候心得に御座候。左様御聞置可_レ被_レ下候。

そろく土産物の用意共いたし彼是と心を配り申候。奉書袖類殊之外高價にて迷惑仕候。惣體西洋交易よりきぬ類何も根段上り、かわれ不_レ申候。

九月末の御狀參着後は御狀參り不_レ申、日々相待申候。何に近日には着可_レ仕候。前條通り江戸に參らず二月末に此許出立仕候へば此紙面之御返事迄拜見可_レ仕、最早間も無き事に御座候。此段迄あらく拜呈仕候。以上。

十二月朔日

横井平四郎

至誠院様

左平太殿

倫彦殿

おつせ殿

尙々此許雪も一旦にて消方に相成仕合に御座候。此上どふぞ降り不_レ申候へかすと祈申候。御許寒さ如何に御座候哉、今比は寒氣強く相成候と奉_レ存候、折角御自愛可_レ被_レ成候。

お逸當月臨月かと被_レ存如何々と案じ申候。此節は何方にも書狀仕出し不_レ申、坂口初よろしく御傳へ可_レ被_レ下候。又法主益盛長元氣宜敷はしり廻り可_レ申候。一昨々廿八日にも書狀仕出し置申候。然し是は遅着仕ると奉_レ存候。何も申縮候。以上。